



Jリーグ ホームタウン活動調査 2020年版

56 Clubs

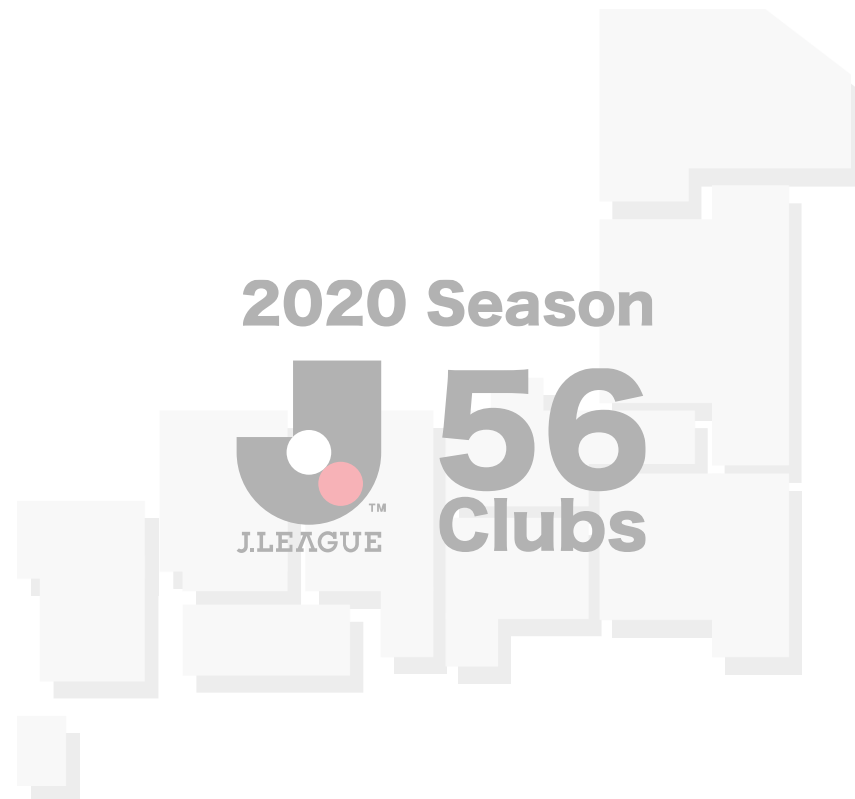


2 特集～2020年～ コロナ禍におけるホームタウン活動・シャレン活動調査

- 3 調査概要
- 4 Jクラブによる寄付・寄贈
- 6 コロナ禍だからこそ実施した活動
- 16 コロナ禍だからこそ実施した活動一覧
- 17 コロナ禍にもかかわらず実施できた活動

23 Jリーグホームタウン活動調査 2020年

- 24 調査概要
- 27 56クラブ全体集計
- 28 SDGsへの取り組み詳細(56クラブ全体)
- 29 56クラブ活動目的(クラブ別)
- 30 ホームタウン活動 クラブ別紹介



特集
~2020年~

コロナ禍における ホームタウン活動・シャレン活動調査



56 Clubs

北海道コンサドーレ札幌が
シャレン手洗い動画
Wash Your Handsをやっ



2020年、新型コロナウイルスの感染拡大により、Jクラブが大切にしてきた「地域でのふれあい」を中心としたホームタウン活動が難しい状況となりました。

活動が制限される中、地域で頑張っている人たちに対してできることはなにか多くのJクラブが考え、まず「寄付」や「寄贈」が行われました。

そして、このような状況だからこそ生まれた活動もありました。

さらにこれまでできていたのにできなくなった活動も、工夫をすることで実施したケースもあります。

各クラブがコロナ禍において実施した活動についてまとめておりますのでご覧ください。

調査概要

調査方法

- 全56クラブへのアンケートを実施

期間

- 2020年1月～12月

アンケート内容

- 寄付・寄贈の有無
- 寄付金額
- 寄贈先
- 寄贈品
- コロナ禍だからこそ行なった活動
- コロナ禍で工夫して行なった活動



Jクラブによる寄付・寄贈

寄付・寄贈をしたクラブ

46クラブ（内訳；寄付・寄贈 16クラブ、寄付 9クラブ、寄贈 21クラブ）

①寄付について

寄付を実施したクラブは25クラブ。多くが自治体や医療機関へ、また社会福祉系の機関への寄付も見られました。主な寄付先、寄付金の調達方法は以下の通りです。

主な寄付先 ※複数回答あり

- 自治体（16件）
- 医療機関（9件）
- コロナ対策系基金（6件）
- 自治体経由医療機関（4件）
- 社会福祉機関（2件）
- 子ども食堂（1件）

寄付金額累計 ※金額非公表クラブあり

36,870,735円（2020年12月10日時点）

寄付元 ※複数回答あり

- クラブ（20件）
- 選手（一部の場合も含む）（7件）
- クラブと選手合同（4件）
- クラブ運営組織の基金（1件）

寄付金調達方法 ※複数回答あり

- マスクなどグッズの売上（24件）
- クラウドファンディング（4件）
- 選手寄付（4件）
- クラブ予算（2件）
- チャリティオークション（2件）
- 募金（2件）
- 企業協賛（1件）



Jクラブによる寄付・寄贈

②寄贈について

寄贈を実施したクラブは37クラブ。入手困難となったマスクや消毒液を調達し、自治体や医療機関に寄贈するクラブが多数見られました。また、困難な状況にある子供たちを支援する取り組みを行うクラブもありました。主な寄贈先、寄贈品目、調達方法は以下の通りです。

主な寄贈先 ※複数回答あり

- 医療機関 (21件)
- 自治体 (20件)
- 福祉施設 (6件)
- 学校 (4件)
- NPO、公益財団法人等 (3件)
- 子ども食堂 (1件)
- その他 (3件)

調達方法 ※複数回答あり

- 購入 (24件)
- クラブ在庫 (19件)
- 他者からの寄贈 (14件)
- サンプリング予定提供品 (4件)
- 協賛にて作成 (1件)

寄贈物品 ※複数回答あり

- マスク (33件)
- ポンチョ (11件)
- 食料品 (10件)
- 消毒液 (8件)
- クラブグッズ (4件)
- 防護服 (2件)
- フェイスシールド (1件)
- 医療用キャップ・医療用グローブ (1件)
- ゴミ袋 (1件)
- サッカー用具 (1件)
- 文具等 (1件)

コロナ禍だからこそ実施した活動

感染対策などの啓発

医療・医療従事者支援



コロナ禍で緊急事態宣言が発令され、多くの皆さん同様日常的に行ってきた活動に制限を余儀なくされたJクラブ。そんな中寄付や寄贈のみならず、この状況下でできる新たな取り組みを考え実施しました。



横浜FC

感染対策などの啓発

コロナウィルス感染拡大予防のための、
手洗い動画



ツエーゲン金沢

感染対策などの啓発

コロナ差別抑制人権啓発動画作成



栃木SC

医療・医療従事者支援

病院へのキッチンカーデリバリー



選手会からの要望で、医療従事者に温かいグルメをいうことで、病院にスタジアムキッチンカーを3台デリバリーし、300食をふるまった。



ヴァンフォーレ甲府

医療・医療従事者支援

医療従事者への感謝



TOPチームの練習場としてお借りしている山梨大学医学部附属病院の皆様へ、選手・スタッフ全員でグラウンドから感謝のメッセージと拍手を送りました。

コロナ禍で緊急事態宣言が発令され、多くの皆さん同様日常的に行ってきた活動に制限を余儀なくされたJクラブ。そんな中寄付や寄贈のみならず、この状況下でできる新たな取り組みを考え実施しました。



京都サンガF.C./ガンバ大阪/セレッソ大阪/ヴィッセル神戸

関西4クラブ連携企画「負けへんで関西！」



コロナ禍だからこそ実施した活動

おうち時間コンテンツ



コロナ禍で緊急事態宣言が発令され、多くの皆さん同様日常的に行ってきた活動に制限を余儀なくされたJクラブ。そんな中寄付や寄贈のみならず、この状況下でできる新たな取り組みを考え実施しました。



北海道コンサドーレ札幌

ぬりえやおうちでトレーニング、おうち遊び、手洗い等の動画配信



ツエーゲン金沢

KAZUトレ
(フィジカルコーチによるお家トレーニングをSNS配信)



カマタマーレ讃岐

小学生及び市民向けのテクニック動画配信



鹿児島ユナイテッドFC

ユナイテッド時報



コロナ禍だからこそ実施した活動

オンライン交流



コロナ禍で緊急事態宣言が発令され、多くの皆さん同様日常的に行ってきた活動に制限を余儀なくされたJクラブ。そんな中寄付や寄贈のみならず、この状況下でできる新たな取り組みを考え実施しました。



北海道コンサドーレ札幌

学校や児童養護施設とのオンラインでの交流



モンテディオ山形

オンライン交流会 (ファン・サポーター・スクール生徒)



水戸ホーリーホック

スクール生とのオンライン交流



ヴァンフォーレ甲府

夢のチカラ・オンライン



選手が児童とのふれあい活動をオンラインを通じ、ホームタウンの子どもたちの夢を育み、健全育成を寄与することを目的としています。

コロナ禍で緊急事態宣言が発令され、多くの皆さん同様日常的に行ってきた活動に制限を余儀なくされたJクラブ。そんな中寄付や寄贈のみならず、この状況下でできる新たな取り組みを考え実施しました。



ファジアーノ岡山

小学校へDVD(夢についてのメッセージ)贈呈、
小学校と選手のオンライン交流会実施



アビスパ福岡

スクール生対象の選手とのオンラインミーティング



コロナ禍で緊急事態宣言が発令され、多くの皆さん同様日常的に行ってきた活動に制限を余儀なくされたJクラブ。そんな中寄付や寄贈のみならず、この状況下でできる新たな取り組みを考え実施しました。



北海道コンサドーレ札幌

小学校用の英語教育補助教材の動画配信



いわてグルージャ盛岡

子ども食堂の参加



©盛岡タイムス



モンテディオ山形

オンライントレーニング

(各種大会がなくなり、部活動が実施できていない高校生に対して)



横浜FC

「横浜FC×子供の未来応援国民運動」クラウドファンディング



コロナ禍で緊急事態宣言が発令され、多くの皆さん同様日常的に行ってきた活動に制限を余儀なくされたJクラブ。そんな中寄付や寄贈のみならず、この状況下でできる新たな取り組みを考え実施しました。

ヴァンフォーレ甲府 私立中高でのオンライン体育授業実施／オープンフィールド／オンラインサッカースクール



オンライン体育授業



オープンフィールド



オンラインサッカースクール

【オンライン体育授業】
中学1年生から高校3年生までの体育のオンライン授業にコーチを派遣。自宅で過ごす時間が増える生徒に対して家で出来るストレッチや、運動不足解消のための運動を実施しました。

【オープンフィールド】
小学校等が休校となり、子どもたちが思い切り体を動かす機会が無い中、運動を楽しめる機会を造れないかと考え、県内4か所を実施しました。

【オンラインサッカースクール】
対面式のサッカースクールが実施できない状況が続く中、トップチームの選手をゲストに迎え、スクール生とコミュニケーションを図りながら一緒に運動する機会を創出しました。

清水エスパルス 小学校訪問



ガイナレ鳥取 ガイナマンの宿題プリント つながる食堂



コロナ禍だからこそ実施した活動

子ども・教育支援

地元企業・産業支援



コロナ禍で緊急事態宣言が発令され、多くの皆さん同様日常的に行ってきた活動に制限を余儀なくされたJクラブ。そんな中寄付や寄贈のみならず、この状況下でできる新たな取り組みを考え実施しました。



ロアッソ熊本

子ども・教育支援

子ども食堂でのオンライン交流会



鹿島アントラーズ

地元企業・産業支援

ドライブスルーマルシェ



水戸ホーリーホック

地元企業・産業支援

スタジアム売店商品をドライブスルー形式で販売



ツエーゲン金沢

地元企業・産業支援

エア遠征プラン



コロナ禍だからこそ実施した活動

その他



コロナ禍で緊急事態宣言が発令され、多くの皆さん同様日常的に行ってきた活動に制限を余儀なくされたJクラブ。そんな中寄付や寄贈のみならず、この状況下でできる新たな取り組みを考え実施しました。



いわてグルージャ盛岡

シトラスリボンプロジェクトへの参加



ベガルタ仙台

健康体操教室



横浜FC

横浜FC献血応援キャンペーン及び
骨髄バンクドナー登録者募集



湘南ベルマーレ

「#こんなときこそたのしめてるか」プロジェクト



ベルマーレのスタッフ、関係者を中心に献血を実施。ずっと公に募集すれば、スタジアムでの実施同様、多くのサポーターの方が協力していただけたのは分かっておりましたが、今回は3密を避けるため、クラブ関係者内での実施とした。

コロナ禍で緊急事態宣言が発令され、多くの皆さん同様日常的に行ってきた活動に制限を余儀なくされたJクラブ。そんな中寄付や寄贈のみならず、この状況下でできる新たな取り組みを考え実施しました。



名古屋グランパス

ドライブインパブリックビューイング



FC岐阜

クラブスタッフの献血協力



コロナ禍だからこそ実施した活動一覧



○ 感染対策などの啓発

- 観戦防止の呼びかけ(鹿島、千葉、新潟)
- 啓発動画制作・出演
(札幌、横浜FC、長野、新潟、金沢、福岡、琉球)
- ポスター制作(甲府、長崎)

○ 医療・医療従事者支援

- キッチンカーデリバリー(栃木)
- メッセージ等発信(水戸、YS横浜、甲府)
- 医療従事者の招待(京都)
- 応援ポスター制作(町田)
- 感謝のイベント協力(相模原)

○ 行政等への協力

- 啓発動画・ポスター等への出演・肖像利用
(浦和、京都、G大阪、C大阪、神戸)
- オリジナルグッズ販売および売上寄付(広島)

○ おうち時間コンテンツ

- トレーニング・体操動画制作
(仙台、栃木、千葉、長野、金沢、讃岐、愛媛、徳島)
- 子ども向けコンテンツ制作(札幌、川崎F、讃岐)
- チアリーディング動画制作(仙台)
- SNS時報発信(鹿児島)

○ オンライン交流

- 小学校・施設との交流(札幌、甲府、岩田、岡山、鳥取)
- ファン・サポーターとの交流(山形、川崎F、富山)
- スクール生との交流(水戸、千葉、福岡)

○ 子ども・教育支援

- 教材制作・配布
(札幌、FC東京、町田、湘南、名古屋、鳥取、北九州)
- 子ども食堂・食育(岩手、大宮、鳥取、山口、熊本)
- 体育・トレーニング授業(山形、甲府)
- クラウドファンディング(横浜FC)
- オープンフィールド(湘南、甲府)
- サッカースクール(甲府、長崎)
- 訪問(清水)
- 校外学習の受け入れ(神戸、北九州)
- 思い出作り協力(山口)

○ 地元企業・産業支援

- クラウドファンディング(札幌)
- 告知・ECサイト・販売協力
(山形、千葉、柏、横浜FM、長野、金沢、沼津、岐阜、G大阪、広島)
- テイクアウト・デリバリー協力
(鹿島、栃木、群馬、松本、名古屋、岩手)
- ドライブスルー(鹿島、水戸、松本)
- PR動画制作・協力(松本)

○ その他

- コロナ差別・偏見啓発活動参加(岩手)
- 運動教室開催(仙台)
- 横断幕設置(鹿島)
- 献血・骨髄バンクへの協力(浦和、横浜FC、湘南、岐阜)
- オンライントークショー配信(千葉)
- 新加入選手の地域交流(富山)
- 観戦防止対策強化(藤枝)
- 児童虐待防止啓発活動(沼津)
- ひとり親支援(沼津)
- ドライブインバブリックビューイング(名古屋、長崎)
- 手話動画の制作(C大阪)
- リモート講演(愛媛)

コロナ禍にもかかわらず実施できた活動

これまで実施してきた活動についても、オンラインの活用、プロトコルの順守など様々な工夫を行うことで「再開」が可能となりました。中には先方からの強い要望を受けて再開した活動もあります。

拡散防止・予防対策

各クラブは、参加者のマスク着用、検温、消毒、ソーシャルディスタンスの確保、会場の換気、人数調整などの感染予防および拡散防止対策、スタッフのPCR検査など、感染拡大防止策を徹底した上で、対面でのイベントを実施し、地域へ様々な貢献を試みました。



FC東京

サッカー教室



1回あたりの参加人数を制限して実施。代わりに行う回数を増やし、感染症対策について、ルールや対応、備品準備を主催者と事前打合せを行った上で実施。事前にPCR検査を受けた上で参加。



浦和レッズ

東日本大震災復興支援活動 「ハートフルサッカーin東北」



- ・通常は子どもたちが大声を出したり触れ合うことが必須だが、コロナ禍においてはマスク着用やハイタッチ禁止という制限下で「両手でハートマークを作る」という新たな感情表現方法が生まれた。
- ・現地に赴くスタッフは全員事前にPCR検査を受けた。



Y. S. C. C. 横浜

寿町自己啓発プロジェクト



室内で大勢で実施することで密が発生するリスクを、人数制限をかけ、コロナウィルス対策を施し(消毒・検温実施、マスク着用)、ソーシャルディスタンスを保ちながら工夫し実施

コロナ禍にもかかわらず実施できた活動

これまで実施してきた活動についても、オンラインの活用、プロトコルの順守など様々な工夫を行うことで「再開」が可能となりました。中には先方からの強い要望を受けて再開した活動もあります。

拡散防止・予防対策



松本山雅FC

スマイル山雅農業プロジェクト あやみどり 種まき、収穫



屋内での作業であったが人手が必要だったので集め方などがネックだったが、最低限の人数に絞り、参加者にはマスク着用、消毒などの徹底、距離を取りながらの作業をしてもらった。



セレッソ大阪

アンバサダーによる講話／出前授業



学校側の希望で実施。参加者の倍以上のスペースを用意して実施。体育館などの広いスペースの場合は、マイクを用意していただき、大きな声を出さないようにした。



徳島ヴォルティス

ヴォルティスコンディショニングプログラム



集合しての実施のため、従来の会場では狭いため、十分広い会場を探し、参加者の方はまず検温、三密・ソーシャルディスタンスに細心の注意を払い、コーチ達はフェイスシールド・マスク着用、参加者もマスク着用、大型扇風機を3台回し、窓を全開で実施した。

コロナ禍にもかかわらず実施できた活動

これまで実施してきた活動についても、オンラインの活用、プロトコルの順守など様々な工夫を行うことで「再開」が可能となりました。中には先方からの強い要望を受けて再開した活動もあります。

拡散防止・予防対策



Gイナーレ鳥取

復活！公園遊び／ちゅらふる



【復活！公園遊び】
ホームゲーム運営のノウハウ活用→検温、手指消毒の徹底、三密回避のため屋外での活動に限定。荒天の場合は活動中止。中止になった学校については、後日スタッフ対応でフォロー。



【ちゅらふる】
ホームゲーム運営のノウハウ活用→検温、手指消毒の徹底、三密回避のためゴミ袋を通常より多く用意。



FC今治

シルバー人材センターによる 清掃ボランティア&スタジアムツアー



シルバー人材センターによるスタジアム清掃ボランティアを開催し、その後スタジアムツアーを実施。60名近く参加して大人数でしたが、三密に気をつけて、マスク着用など徹底して実施した。

コロナ禍にもかかわらず実施できた活動

これまで実施してきた活動についても、オンラインの活用、プロトコルの順守など様々な工夫を行うことで「再開」が可能となりました。中には先方からの強い要望を受けて再開した活動もあります。

リモート・動画配信での実施

例年、訪問など対面で実施していた活動をリモートや動画の配信などへ切り替え行うことで、感染拡大防止につなげるとともに、地域でのコミュニケーションを展開しました。

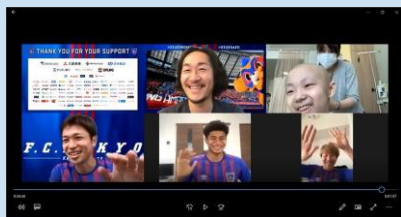


FC東京

選手会主催オンライン小学校訪問／病院訪問 ／指導者講習会



オンライン会議システムの活用で画面越しであるがライブで交流できる体制を、教育委員会に協力していただき整えた/内容を従来のふれあいメインのものから、子ども達にメッセージ届けることにシフトすることで、画面越しでも選手と子ども達が交流できるように工夫を加えた



ZOOMを使用した訪問



指導者講習会



ベガルタ仙台

健康体操教室



元ベガルタ仙台選手である平瀬智行、菅井直樹やベガルタチアリーダーズによる自宅でできる「ベガルタ仙台健康体操」の紹介動画を撮影。簡単にできる体操からハードな体操までを石巻市ホームページを通じて配信した。



ブラウブリッツ秋田

選手による「ゆめ授業」



オンラインでの実施で「伝わる」かどうかが一番のネックであったが、今回は選手とともにパワーポイントで資料を作成し、「伝わること」に重点をおいた。

コロナ禍にもかかわらず実施できた活動

これまで実施してきた活動についても、オンラインの活用、プロトコルの順守など様々な工夫を行うことで「再開」が可能となりました。中には先方からの強い要望を受けて再開した活動もあります。

リモート・動画配信での実施



モンテディオ山形

オンライン夢クラス／食育



選手が学校へ訪問できないことから、ZOOMを活用し実施



アルビレックス新潟

オリンピック・パラリンピック・ムーブメント 全国展開事業



外国籍選手による新潟市内の小中学校への訪問活動。Zoomを利用して実施。



ジェフユナイテッド千葉

オンラインひよこ隊



マスコットによる幼稚園・保育園の訪問が感染防止の観点から出来なかったため、対応可能な園と協力しリモートで繋ぎ園児たちとマスコットの交流を行った。



名古屋グランパス

オンライン学校訪問



コロナ禍の中、選手が現地に行くことが難しく、学校現場においても休校の影響によりカリキュラムがつまっている中、リアルでの学校訪問が困難だった。ZOOMを活用した学校訪問を行なうことでクラブハウスと学校をつなぎ実施することができ、学校現場においても負担少なく実施することができた。

コロナ禍にもかかわらず実施できた活動

これまで実施してきた活動についても、オンラインの活用、プロトコルの順守など様々な工夫を行うことで「再開」が可能となりました。中には先方からの強い要望を受けて再開した活動もあります。

リモート・動画配信での実施



ギラヴァンツ北九州

曽根干潟クリーン作戦



例年クラブと北九州市立曽根東小学校の児童、地域の方々が共同で「曽根干潟クリーン作戦」を実施している。

今年はさらに、ダウ・ケミカル日本株式会社と国際環境NGOバードライフ・インターナショナル、テラサイクルジャパン合同会社が連携して参加。

循環型社会の実現に向けて地域と連携した清掃活動と環境教育、さらに回収した廃プラスチックをリサイクルするプログラムを9月17日(木)・18日(金)の2日間で実施した。

1日目の学校授業では、本プログラムにおいて回収物のリサイクルを行うテラサイクルジャパンが地球温暖化や海洋プラスチック問題などを分かりやすく解説する環境教育を行ったが、児童を一か所に集めないよう各教室のTVモニターでのオンライン授業に変更したことで密を避けることが出来た。

- 本調査は、2020年にJ1・J2・J3の56クラブが実施したホームタウン活動を、クラブからの報告に基づいて集計したものです。
- 2016年版から下記の集計ルールを採用しています。
- クラブによるルール解釈・報告精度の違いを調整できていないため、あくまで参考値としてご覧ください。
- クラブにより、一部が異なるフォーマットで集計を実施しています。

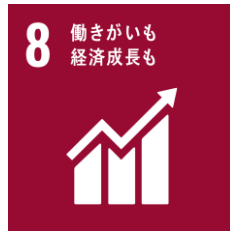
期間	2020年1月1日から12月31日	
場所	ホームタウン及び活動区域内での活動を対象とする。また災害被災地への支援や国外等での社会貢献活動は、ホームタウンまたは活動区域外であっても対象とする。	
活動者	クラブ(株式会社、および関連する社団、NPOなど)に所属し、または直接の契約を有し、またはクラブを公式に象徴する、あらゆる者による活動を集計対象とする。	
	対象とする(A)	対象としない
	<ul style="list-style-type: none"> • 選手(トップ、女子、アカデミー) • 監督、コーチングスタッフ(トップ、女子、アカデミー、普及、スクール) • クラブの役員、職員 • アンバサダー、マスコット、公式チアチーム • エアゴールなど、クラブを象徴しうる備品の貸し出しは、集計対象とする 	<ul style="list-style-type: none"> • 提携先の学校、クラブ、少年団等に所属する選手、監督コーチングスタッフ、役職員等 • クラブの外部株主 • 外部の支援団体(自治体、町内会、商店会、企業、学校、サポーター、ボランティア等)で、(左記)の(A)が参加しない場合

対象とする	対象としない
<ul style="list-style-type: none"> 企業での講話、講演 	<ul style="list-style-type: none"> 企業や店舗への表敬訪問、または商談
<ul style="list-style-type: none"> 地域振興団体*への表敬訪問 	<ul style="list-style-type: none"> 地域振興団体*との事務的な協議
<ul style="list-style-type: none"> 地域振興団体*主催の大規模パーティ、懇親会への出席 	<ul style="list-style-type: none"> 一般的な、またはプライベートな食事会・懇親会
<ul style="list-style-type: none"> 豆まきへの参加(地域の催事への協力) 	<ul style="list-style-type: none"> 必勝祈願(クラブの行事)
<ul style="list-style-type: none"> スタジアムでのリユース食器利用や就労支援 AEDボランティア 	<ul style="list-style-type: none"> ちらし等の配布、またはポスティング グッズ売り場での販売補助 試合会場、トレーニンググラウンド(キャンプ地を含む)におけるファンサービス
<ul style="list-style-type: none"> 社会貢献・地域貢献に関する取材対応 地方振興団体*の広報への協力 	<ul style="list-style-type: none"> スポーツに関する取材対応
<ul style="list-style-type: none"> 障がい者など、社会的弱者を試合に招待 チャリティ目的の選手シートの設置 	<ul style="list-style-type: none"> 一般的な試合招待事業
<ul style="list-style-type: none"> クラブとしての寄付、及び物品寄贈 	
<ul style="list-style-type: none"> クラブと無関係の選手個人の活動 巡回指導など、無償の普及活動 サッカー以外のスポーツ振興活動 介護予防事業 	<ul style="list-style-type: none"> Jリーグ公式行事への参加 クラブが主催する、支援者またはファン・サポーター向け行事への参加(ビジネスパーティ、入団会見、ファン感謝デー、ファン向けトークショーなど) 研修やセミナーの受講

- 地域振興団体:自治体、商工会、青年会議所、ロータリークラブ、ライオンズクラブ、経済同好会、商店会、自治会、及びその外郭団体。並びにクラブを応援する地域の集まり(ホームタウン連絡協議会など)。
- ** 年間を通して毎日稼働する活動(スポーツチームの保有、医療センター開設など)は、1件として報告する。その際、活動内容/名称欄に(チーム)(常設)などと付記する。但し学校訪問など、その都度訪問先が異なる場合は、従前通り一訪問先毎に報告する。

調査概要 3/3 (調査項目の新設 – SDGsへの紐付け –)

2020年調査において、JクラブにおけるSDGsへの取り組みを把握し、顕在化するため、各ホームタウン活動へSDGsを紐付け集計を行っています。



56クラブ全体集計

年間活動回数 **15,772回**

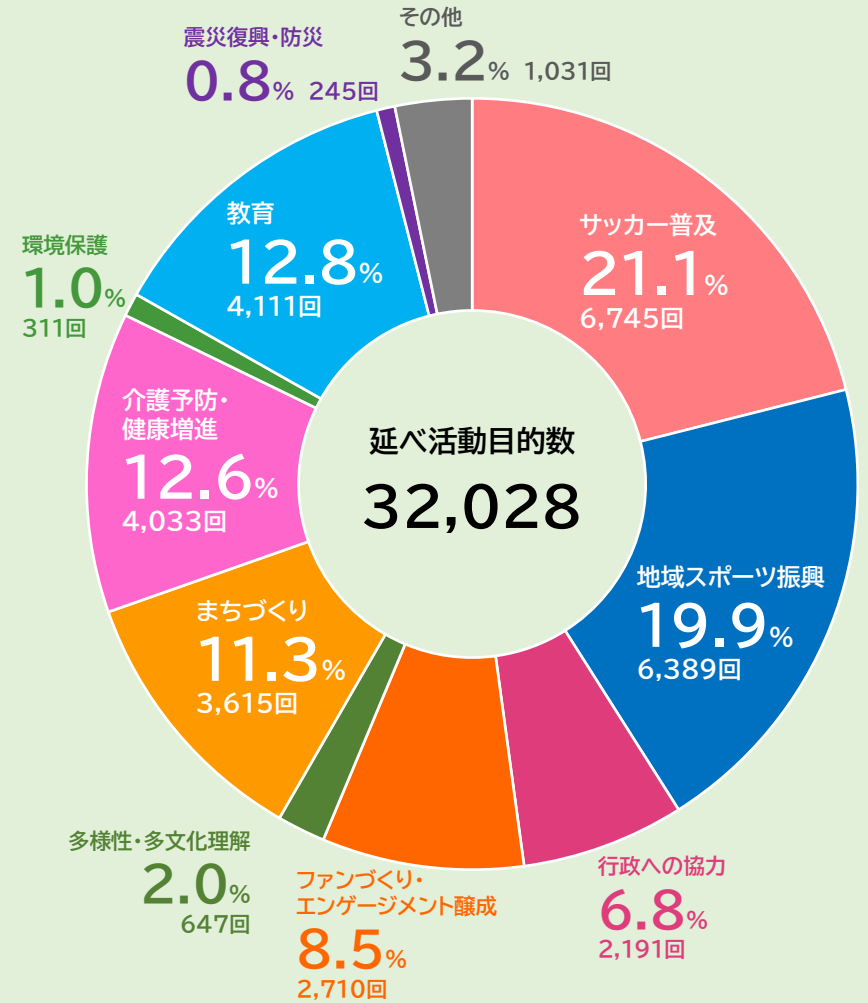
うちシャレン活動回数 **914回**

活動者	回数	協働者	回数
トップ選手	1,773回	行政	5,235回
女子選手	345回	教育機関	2,577回
アカデミー選手	74回	企業	3,050回
監督・コーチングスタッフ	6,217回	NPO等の非営利組織	1,648回
代表(会長・社長等)	974回	自治会や商店会等の地域組織	1,784回
クラブ役職員・アンバサダー	6,161回	サポーター/ボランティア	0回
その他	5,037回	その他	2,838回

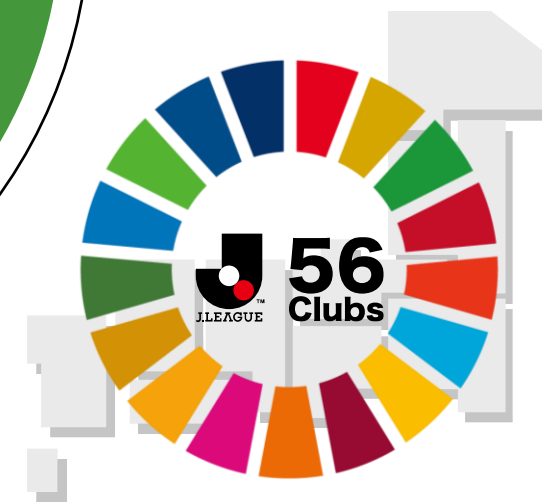
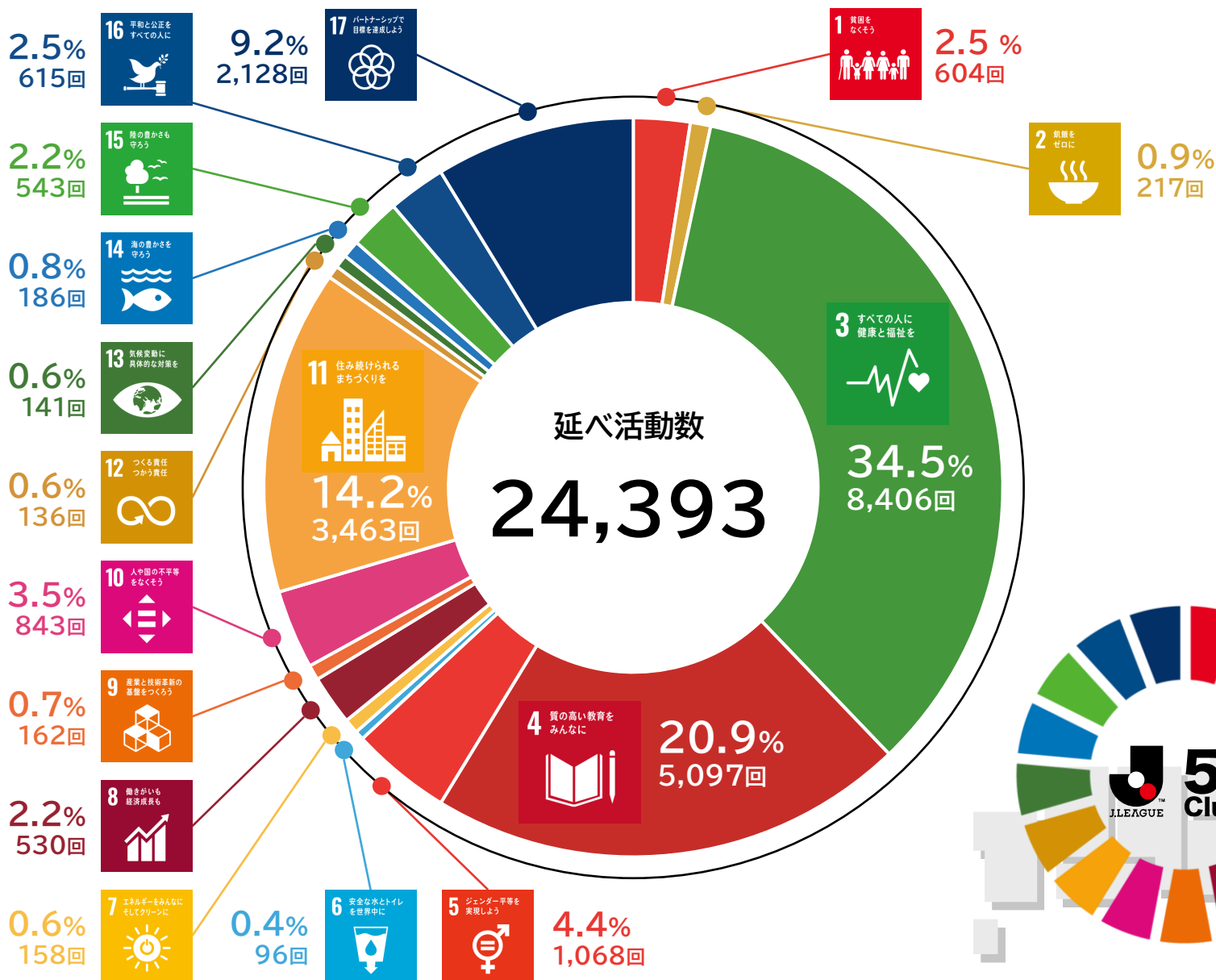
※「活動者」および「協働者」は、1つの活動につき複数選択となるため、延べ活動回数が表示されています。

活動目的の構成

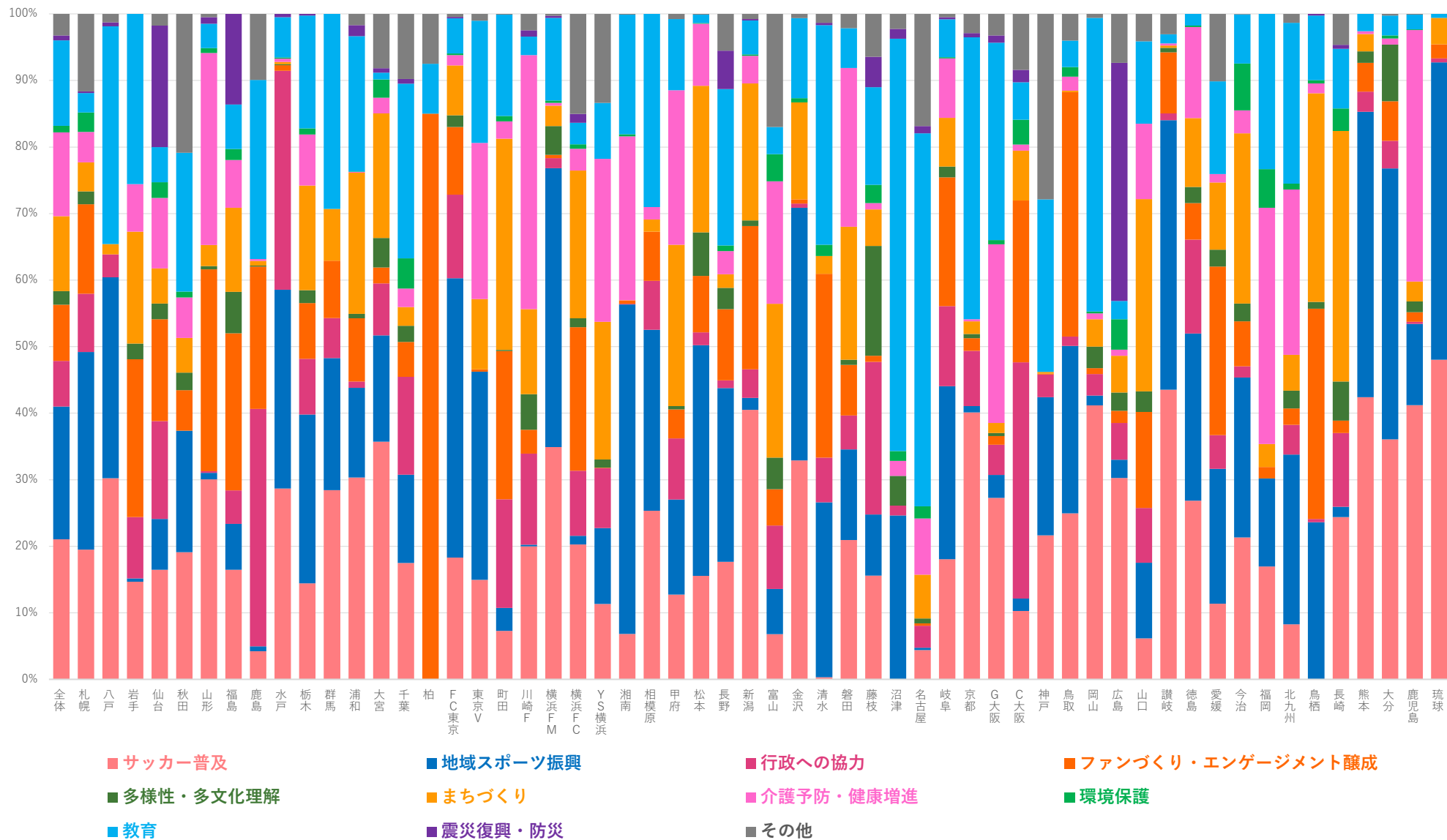
※各クラブが実施したホームタウン活動を、クラブからの報告に基づいて集計しています。
 ※「活動目的」は、1つの活動につき複数選択となるため、延べ活動回数が表示されています。




SDGsへの取り組み詳細(56クラブ全体)



56クラブ活動目的(クラブ別)





ホームタウン活動 クラブ別紹介



56
Clubs



赤い羽根サポーター「くるまをおくろうプロジェクト」 1/2

Story みんなの力で、北海道の福祉施設にクルマをおくろう！北海道コンサドーレ札幌は北海道の福祉のために、社会福祉法人北海道共同募金会が実施している赤い羽根共同募金の協力をしています。「赤い羽根サポーター」として活動を続けて12年。2012年からは「クルマをおくろうプロジェクト」をスタートし、障がいを持つ人たちや高齢者の方々が必要としている福祉車両を贈ることを目標に取り組んでおり、2019年度までに北海道内の福祉施設へ10台の特別塗装車両「コンサドーレ号」をお届けしています。「勝点募金」や「ゴール募金」の他、例年はスタジアムで募金のお礼に「赤い羽根×コンサドーレ」オリジナルグッズを差し上げる募金活動をはじめ、チャリティーオークションやチャリティーサッカー教室などを行い、道民及びサポーターの皆様からあたたかいご支援をいただいております。しかし、新型コロナウイルスの影響により、対面式での募金活動が困難となり、このままでは障がいがかかえる人たちや、助けを必要としている人たちを支援することができなくなってしまう危機感から、2020シーズンはクラウドファンディングを立ち上げることにしました。初挑戦となったクラウドファンディング。全国一斉赤い羽根募金運動がはじまる10月1日から開始し、12月までの3カ月間で実施しました。募金のお礼には選手の私物や直筆サイン入りユニフォームの他、選

手の足型がデザインされたパーカーや缶バッジ、クリアファイル等のオリジナルグッズを作製しました。11月の中旬には、第2弾となるお礼の品を追加し、クラブのホームページやSNS等を活用しながら広く告知していきました。今まではスタジアムでしか手に入らなかったオリジナルグッズですが、クラウドファンディングで実施することにより、道外在住等の遠方に住むサポーターの皆様にもご協力していただくきっかけにもなりました。支援してくださった皆様のおかげで2,085,000円を集めることができました。2020年12月には11台目となる福祉車両を札幌市内の福祉施設へ届けることができました。贈呈式では選手OBの河合竜二CRC(コンサドーレ・リレーションズチーム・キャプテン)とクラブマスコットのドーレくんが出席し、コンサドーレラッピング仕様の車両を贈呈しました。「コンサドーレ号」を目の前にした施設利用者の皆さんの笑顔やお礼の言葉をたくさんいただくことができました。募金にご協力いただいた皆様、誠にありがとうございました。現在、北海道内ではマイクロバスから軽自動車まで様々な車種の福祉車両「コンサドーレ号」が計11台活躍しています。これからも障がいを持つ子どもたちや高齢者のために役立てていただけるよう、そして、皆さんの福祉車両を福祉施設にお届けできるよう継続して取り組んで参ります。

活動詳細情報は



<https://find-h.jp/project/akaihane-consadole/detail>

<https://www.consadole-sapporo.jp/news/2020/06/5119/>

<https://www.consadole-sapporo.jp/news/2020/10/5408/>

<https://www.consadole-sapporo.jp/news/2020/11/5548/>

赤い羽根サポーター「くるまをおくろうプロジェクト」 2/2

活動場所

クラウドファンディング、障がい者支援施設ホップ

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

住民、福祉団体、クラウドファンディング

協働者名

社会福祉法人北海道共同募金会、
北海道民及びサポーター、
find H(北海道新聞社が運営しているクラウドファンディング)





ヴァンラーレ八戸農業支援 1/2

Story 2018年、この活動が始まった。青森県が抱える農業の担い手不足を選手・スタッフが手伝い、労働力の確保・事業PRとして。翌年、クラブのパートナーである株式会社MISTsolution様(本拠地:東京)が八戸市内で農業事業を企画することとなり、2019年の春から活動が大きくなっていく。八戸市南郷にある農地を活用し、ブロッコリーやピーマン、ミョウガ、トマトなどを栽培。2019年の秋には選手とサポーター、MISTsolution役員、地元農家の方々と共に、ニンニクの植付けを実施した。そして、2020年6月。昨年のように多くの方と交流することはできなかったものの選手が地元農家の方々と一緒に収穫を行った。クラブの力だけでは、形成することのできなかった活動。MISTsolution様が農業担当の雇用を、クラブは地元農家の方々と協力し、農地の選定を実施した。まずは皆さんに関心をもってもらうため、収穫した野菜をホームゲームで販売。その後、ニンニクの植付けイベントを開催(※2019年)。選手とサポーターの交流の場をつくった。参加した親子にお話を聞くと、選手と一緒に植付けできて楽しかった。またイベントをやって欲しいとコメントをいただいた。

サポーターにとっては、憧れの選手と触れ合える場。クラブとMISTsolution様にとっては、植付けのお手伝いをしていただけの場。楽しんでもらえるような空間づくり。winwinの場になったことは間違いない。時期にもよるが、収穫した野菜はホームゲームで可能な限り販売している。ただ、天候に左右されるものが多々あること。それぞれの時期があること。このようなことで皆さんの関心が途切れないように、野菜を販売するタイミングの調整は苦勞した。MISTsolutionの田代様は、地域密着クラブの活動として、サッカークラブがサッカー以外のことを積極的に実施することは地域にとって非常に良いこと。サポーターの方々と共有することで、農業やクラブ、選手に対する理解もより深まることも良いと感じていた。この活動を通じて、選手が収穫した野菜を求めてくれる方が増加した。地域の繋がりがより強固なものとなった。多くのパートナー企業様からも良い地域貢献活動をしているねと好評いただいている。現状多くの方を招く大規模な活動はできないものの、この活動を誇るべく、今後も注力していきたい。

活動詳細情報はこちら



<https://vanraure.net/archives/655811>



ヴァンラーレ八戸



ヴァンラーレ八戸農業支援 2/2

活動場所

八戸市南郷

カテゴリー(SDGs)/取り組みテーマ

8



協働者

企業、住民

協働者名

株式会社MISTsolution





いわてグルージャ盛岡・子ども食堂への支援 1/2

Story スポーツの力、Jクラブの力をつかって、子ども食堂を通じた新しい密(シン・密)を地域に共創する。その理念に共感し、Jリーグ「みんなのシン・みつプロジェクト」に参加し、2020年より岩手県にある子ども食堂への支援を開始しました。取り組みに関しては4ステップの段階を作り、シーズンを通しての活動を目指しました。【ステップ1】子ども食堂を知る 【ステップ2】興行を通してクラブを知ってもらう 【ステップ3】子ども食堂に参加する 【ステップ4】地元企業を子ども食堂に巻き込む 【ステップ1】子ども食堂を知る クラブとしてまず初めに取り掛かったのは「子ども食堂を知る」と言うところでした。“子ども食堂”と言うワードは知っていましたが、実際にどのような人が関わっていて どのような活動をしているのか？ そう言った子ども食堂の現状を知る為に、まずはクラブとして子ども食堂のイベントに参加させて頂きました。イベントに参加し子ども食堂の現状と課題、そして子どもの居場所づくりの重要性と必要性を学びました。【ステップ2】興行を通してクラブを知ってもらう 子ども食堂の現状を知った私たちは、次のステップとして「クラブを知ってもらう」活動を行いました。県内の子ども食堂利用者の親子を興行に招待し、試合観戦と同時に選手との交流、バックヤードツアーや職業体験などを体験して頂き、Jリーグを使ったコロナ禍での思い出作りを行いました。参加されたお子様からは「みんなと一緒にごはんが食べられて

いつも以上に美味しく感じた」「サッカー場に初めて来たけど、いろんな仕事が体験でき、試合も見られてファンになった。また来たい」などの感想をいただきました。【ステップ3】子ども食堂に参加する ステップ3からは本格的に子ども食堂の支援に係ることを行っていました。まずはJリーグのスポンサーであるヤマザキビスケット様に物品提供のお願いをしました。同社には子ども食堂で使用のお菓子の提供のご依頼をし、ルヴァンプライム400個を寄付頂き、提供頂いたお菓子を私達が県内の各子ども食堂に配布する「キッズと一緒にお菓子を食べよう」企画を実施し、この活動を通して月2～3回のペースで子ども食堂の活動に参加させて頂きました。【ステップ4】地元企業を子ども食堂に巻き込む 子ども食堂支援の最終段階として、このプロジェクトを「持続可能な取り組み」にするべく、地元企業を巻き込んだ活動を行いました。まずはチームスポンサー様に活動内容を説明し、子ども食堂やフードパントリーの活動支援をお願い致しました。フードパントリーでは食料確保が進まない中、活動に共感いただいた企業様から食料提供をいただき、クラブがハブとなり各子ども食堂へ食料を届けました。2021シーズンは活動範囲を広げ、更に関係者を増やし、県内での子どもの居場所をより多く作る、そして少しでも貧困をなくすべく活動を続けていきます。

活動詳細情報は



<https://grulla-morioka.jp/tab03 event/news0811-03/>

<https://grulla-morioka.jp/tab 09 hometown/news1006-03/>

<https://grulla-morioka.jp/tab 09 hometown/news1021-03/>



いわてグルージャ盛岡・子ども食堂への支援 2/2

活動場所

雫石七ツ森地域交流センター、黒沢尻西交流センター、
花巻市総合福祉センター、いわぎんスタジアム等

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

企業、NPO

協働者名

NPO法人まちサポ雫石、こども食堂キッチンすまいる、
花巻ロータリークラブ、ヤマザキビスケット株式会社、
有限会社福田パン、株式会社美多加堂、めくまる食堂実行委員、
認定特定非営利活動法人インクルいわて、
株式会社ギンビス、株式会社ウノー・インダストリー、
株式会社みちのくクボタ





コロナ禍最初のベガルタ仙台親子サッカー教室

Story 2020年は全ての人にとって、いままでの日常が日常ではなくなった年と言っていいだろう。未曾有の被害をもたらした東日本大震災が発生した2011年でさえ、Jリーグは4月23日に再開したが、2020年は7月4日までまたなければならなかった。さらにベガルタ仙台は7月8日からホームゲームが再開を予定していたが、その前にベガルタ仙台親子サッカー教室は実施することを決定した。本当に実施して大丈夫だろうか。もし何かあったら大変な責任になる。正直、実施してよいか悩んだ。しかし誰かが時計の針を進めなければ、今後のイベントの実施もうまく進まないと覚悟を決めて、関係者と感染症予防対策と万が一参加者の中に感染者が出てしまった場合の対応フローなど、実施まで打ち合わせを繰り返し、マニュアルに落とし込みなんとか実施に至った。宮城県内において2020年2月9日以来、約5か月ぶりのサッカー教室。受付時には、参加者全員が消毒、検温を行い、サッカー教室もソーシャルディスタンスを意識したプログラムを行った。今まで当たり前感じていたサッカーボールを追いかける子どもたちの姿も、親子が触れ合う様子も、改めて幸せな光景だと実感させられた。

活動詳細情報は



<https://www.vegalta.co.jp/backnumber/2020/news-hometown/2020/07/post-278.html>

活動場所

泉総合運動場

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

住民、行政

協働者名

公益財団法人 仙台市スポーツ振興事業団



秋田健康幸せ(健幸)プロジェクト 1/2

Story

秋田県は高齢化率が全国で最も高く、生活習慣病による死亡率も非常に高い状況が続いており、全国に先駆けた健康課題を抱えている地域といえます。このような「課題先進地域」である秋田において、生活習慣病を改善し健康寿命(健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間)を伸ばしていくことが重要視されており、県では『健康寿命日本一』を掲げています。このような地域だからこそ、クラブを活用した課題の解決に地域とともに取り組む必要があると考えております。

まずこの想いを実現するために、クラブは「運動」と「食事」を通じて健康課題に寄与できる可能性が大いにある感じました。そんなときに、スポンサーである地元の医療IT企業の株式会社アルファシステムの社長さんから「何かしらの形でタッグを組みたい」という話をもらい、考案していた内容を提案してみると、とんとん拍子で構想が出来上がりともに進めていくことが決まりました。

そのヘルスケア事業の構想とは、体組成計である「InBody(インボディ)」とクラブのスペシャルスポンサーであるTDK株式会社の製品であるスマートウォッチ「Silmee(シルミー)」を活用した「企業の健康経営」を推進する県内初のヘルスケア事業です。この内容を企業に提案するにあたり、まずは成功のモデルを作るために、2014年よりクラブのスポンサーであり、介護福祉事業や人材派遣事業を展開している株式会社きららホールディングスという地元企業です。その社長さんに相談してみたところ「面白いですね。是非やりましょう!」と強い言葉をもらい、事業を進めていくことが決まりました。

そして、この事業を「秋田健康幸せ(健幸)プロジェクト第一段」と命名し、クラブと株式会社アルファシステムと株式会社きららホールディングスで三社連携協定を結び、走りだしました。

まず、株式会社きららホールディングスの従業員70名に対し、3ヶ月間の健幸プロジェクトを実施し、①従業員にInBodyを活用した健康状態のチェックと毎日Silmeeの装着での生活による、1日あたりの運動量や歩数等の生体データなどを株式会社アルファシステムのITシステムにて管理。②データをもとに、3つの健幸プログラムを実施。③その後の健康状態や活動量の数値的变化とアンケート調査をする。という、大きく3つの流れで進めました。

①では、従業員の方々からは「人生で初めて自分の体脂肪率や自分の筋肉量がこんなに平均値との差があるのだと知り、数値をみただけで運動しないといけなかった」という意見や「Silmeeをつけるだけで、1日の歩数が増えるから、もっと歩かないといけなかったと感じた」など、自分の状態を把握することで健康への意識が高まることになりました。

②では、3つの健幸プログラムを実施し、1つ目は試合の前座でスタジアムのピッチでクラブのトレーナーによる体操とウォーキングを実施しました。またその後にクラブ専属の管理栄養士監修の栄養弁当を食べながら試合観戦するという1日を過ごしてもらいました。「選手が実際に試合するピッチで運動できるというとても貴重な経験でした。」などという声をもらいました。2つ目は、クラブのトレーナーによる「ストレッチ・トレーニング」を実施しました。動画で展開することで、お家時間を活用し、習慣的な運動を実施していくことの重要性を伝えました。3つ目は、クラブの管理栄養士による栄養講座を実施しました。講座の内容は、メタボ予防と免疫力を向上させるために必要な栄養素について、日頃の生活に取り入れやすい内容で講座を実施しました。

③では、健康状態の変化と運動量の変化の調査とアンケート調査を実施しました。結果として、3ヶ月のプログラムでInBodyの結果はあまり変化せず、数値はほぼ横ばいでした。しかしSilmeeの行動変化では、62歳の男性で「1カ月あたりの歩数が、平均6,500歩ほどであったのが、2ヶ月後には平均8,000歩ほどまで向上した」というデータが出ました。この明らかなこの歩数の変化は、将来的な健康に繋がると考えています。またアンケート調査より、全体の85%の人が「健康に対する意識が高まった」と回答しており、健幸プロジェクトによる健康への意識的効果は非常に高いと考えています。さらに「自社の企業イメージがアップした」という意見も多く出ており、健康経営の実現に向けた施策にもなり得ることを感じることができました。今後の展開として、自治体にこの活動に対し興味を持ってもらうことができ、2021年は自治体とともに市民向けのサービスを展開していく方向も見えてきました。

この活動は秋田という「課題先進地域」だからこそ、継続して広げていく必要があると考えており「楽しく、いつの間にか健康になる」を実現していきたいと考えています。

秋田健康幸せ(健幸)プロジェクト 2/2

活動詳細情報はこちら



<https://blaublitz.jp/whatsnew/60274.html>

<https://blaublitz.jp/whatsnew/60915.html>

活動場所

ソユースタジアム、
株式会社きららホールディングス大ホール

カテゴリー(SDGs)/取り組みテーマ

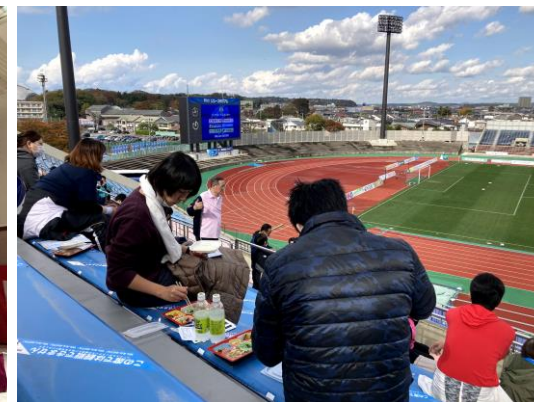


協働者

企業

協働者名

株式会社アルファシステム、
株式会社きららホールディングス、
大塚製薬株式会社





ホワイトシャッタープロジェクト 1/2

Story 昨年の7月末に起きた豪雨の影響により、県内にあるいたるところの河川が氾濫し、多くの人々が被災を受けました。このような災害が今後、環境の変化によって頻繁に起こることが予想されます。それを未然に防ぐためにも今の段階から防災に関する体制を自治体と協力のうえで、整える必要があると考えました。そこで合同会社DMM.com様が新たに取り組み始めた「ホワイトシャッタープロジェクト」に参画することとなりました。「ホワイトシャッタープロジェクト」とは、民間企業と自治体連携による消防・救急・防災現場への支援プロジェクトであり、限られた予算の中で、頻発する災害、高齢化社会に伴う救急出動に対応しなければならない自治体に対して支援する仕組みとなっております。地方の過疎化が進む中で、地域の消防・救急機能の維持は大きな社会課題となっており、自治体の予算及び地域住民、双方の協力が求められる現状があります。賛同いただいた企業の協賛金によって、

各自治体に消防活動に必要な機材が寄附される仕組みになっており、消防車のシャッター部分には賛同企業のロゴが掲載されるほか、定期的な消防・救急の啓発活動の推進、さらに協賛社の獲得が難しい地域に対しても貢献ができるよう、協賛金の一部を、提供シャッター数に応じて、全国すべての参加自治体へ配布される仕組みも取り入れています。その中で県内各地の消防署を合同会社DMM.com様と訪問させていただき、ご提案させていただき、昨年10月に山形県天童市が新たに参画いたしました。同市がモンテディオ山形のホームタウンのひとつであることから、自治体、協賛企業、スポーツチームの3者による協業体制を目指します。なお、消防車輛へのプロスポーツチームエンブレムの掲出は、ホワイトシャッターとして初の取り組みです。また、本業務提携の開始に伴い、プロジェクトをご支援いただく協賛企業も募集しております。

活動詳細情報は



<https://www.montedioyamagata.jp/news/p/10714/>



モンテディオ山形

ホワイトシャッタープロジェクト 2/2

活動場所

山形県の消防署

カテゴリー(SDGs)/取り組みテーマ



協働者

企業、NPO、行政

協働者名

合同会社DMM.com



※画像はイメージです



福島県産品PR・販路拡大事業 1/2

Story

福島ユナイテッドFCでは、『農業部』を立ち上げ、桃、りんご、お米、ぶどう、ル・レクチェといった福島の農作物を農家の皆さんと一緒に選手・スタッフが春先の成育作業から収穫まで一貫して携わり、年間を通して福島県産品をPRする取り組みを行っている。

2020年は新たに喜多方のアスパラガスの成育も開始し、夕方の全国ニュースやサッカー番組でその取り組みが紹介された。

また、震災後から福島県産品PR事業として、県内農家・生産者、スポンサー、行政と協力した活動を継続的に行っており、福島県産の野菜・果物・加工品等の仕入れを行い県外でのマルシェ出店をメインにイベント等にも積極的に出店している。

6月には、今までマルシェ出店時のみの販売となっていた県産品をいつでもお買い求めいただけるように『福島ユナイテッドFC農業部公式オンラインショップ』をオープン。取扱商品だけでなく、生産者の紹介も盛り込み、ただ販売するだけではなく、PR要素も多く掲載している。2020年度、復興庁(事務局:テロイトマト)が実施する『被災地域企業新事業ハンズオン支援事業(東日本大震災の被災地域支援として、共通の課題を抱えるグループ・個別企業に対する新たな取り組み支援を目的とした支援事業)』に参画。福島ユナイテッドFCは、農業部での活動を通じた県内農家・生産者との繋ぎ役

〈支援事業グループのハブ〉となり、個別企業(農家)と一緒に福島県産品PR活動を実施。個別企業(農家)商品PR機会として、県外でのマルシェ出店や商品に対するアンケートを実施。生産者がブースに立って販売することでより魅力を伝えられることで、新しい福島県産品の発見や購買(リピート)に繋がるきっかけを創造、それぞれヒアリングを実施し商品開発についても専門家を入れながら取り組んでいる。

また、県産品の取扱いがある『福島ユナイテッドFC農業部公式オンラインショップ』サイトのPRやサイト向上アンケート、生産者への取材・撮影、それらをスペシャルストーリーとして掲載し、サイトコンテンツの充実も図っている。

新しい取り組みとして地元で営業するカレー屋さん〈笑夢カレー〉で使うカレー種(チャツネ)開発として、大野農園と福島ユナイテッドFCで成育したりんごを使用する新商品も開発中(1月末時点)。

福島の魅力を発信するツールとして、従来のマルシェ出店だけでなく、県産品に特化したECサイトを立ち上げ、県内各地の商品をクラブで仕入れて生産者紹介と販売PRを行う。Jリーグクラブの発信力を使ってサッカーファンを中心に全国へ向けて地域の皆さんと協力して福島のPRを続けていきたい。



福島県産品PR・販路拡大事業 2/2

活動場所

Shonan BMWスタジアム、等々力陸上競技場、福島県内農家

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

企業、行政、農家、生産者

協働者名

復興庁、デロイトトーマツ、SEA、阿部留商店、ダイオー、COOL AGRI、食農価値創造研究舎、笑夢カレー、その他参加事業者、大野農園、安斎果樹園、カトウファーム、鈴木農園、渡辺果樹園、エガワコントラクター





鹿嶋市×鹿島アントラーズ 小学校プログラミング教育 1/2

Story

鹿島アントラーズは、鹿嶋市及びキラメックス株式会社と協働し、鹿嶋市内の小学校5校計157回のプログラミング授業を行いました。

ホームタウンである鹿嶋市とアントラーズは、スマートシティ事業の推進などによる地域課題の解決を目的とした「地方創生に関する包括連携協定」を締結しており(株式会社メルカリも含めた3者間協定)、同協定における教育分野での新規事業として、小学校でのプログラミング教育を推進しております。IoT、ビッグデータ、ロボット、AI(人工知能)等による技術革新が進むにつれ、IT人材の必要性がより高まります。2020年度より小学校でのプログラミング教育が必修となる中、ホームタウンの小学生の「自ら考える力」「創造する力」を醸成するため、キラメックス株式会社が運営する小中高校生向け実践的プログラミングサービス「TechAcademyジュニア」を用いて授業しました。キラメックス社は、アントラーズのクラブパートナーである

ユナイテッド株式会社の連結子会社であり、社員の皆様には講師としても関わっていただきました。授業は人気のものづくりゲーム「Minecraft(マイクラフト)」を活用していることもあり、児童はゲームを動かすためのコマンド入力に夢中です。1文字でも間違えると思いに動かしませんが、懸命に打ったコマンドが正常に動き、ゲーム内で雨が降ったりキャラクターが動いたりすると児童たちはとても喜んでいました。「難しいと思っていたけど楽しかった」「思っていたより面白かった」と、授業後の反応も上々です。

この授業はプログラミングの基礎を学ぶことはもちろん、コマンド入力に必要な英単語・記号の学習や、キーボード入力といったITスキルの向上にも繋がり、人材育成として優れています。鹿島アントラーズは今後も質の高い学習システムをホームタウンに広め、次の世代を担う子どもたちの育成と地域の発展に貢献していきます。

活動詳細情報はこちら



https://www.antlers.co.jp/news/club_info/79740

<https://city.kashima.ibaraki.jp/site/kashimaphoto/18348.html>

<https://www.kiramex.com/news/press/2020/5f90e89ad55d27000966d041/>



鹿嶋市×鹿島アントラーズ 小学校プログラミング教育 2/2

活動場所

鹿嶋市内の小学校5校

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

企業、学校、行政

協働者名

鹿嶋市、キラメックス株式会社、
鹿嶋市立豊津小学校、波野小学校、
大同西小学校、中野西小学校、三笠小学校





Make Value Project 企業合同研修 1/2

Story

水戸ホーリーホックでは、パートナー企業「株式会社ノーブルホーム」の社員の皆様とMVP (Make Value Project) 合同研修を実施いたしました。まず「MVP」とはクラブ独自の知識習得・人材育成研修プログラムになります。2018年から選手向けに栄養面やトレーニングの専門家、ビジネスでご活躍されている方々を講師としてクラブハウスに招き、セミナーを開催しております。このプロジェクトの実施背景には、サッカー選手それぞれが個人事業主で、自分の在り方を言語化して外に発信しなければならない。ただ今までは練習以外の時間を有効に活用していた選手が少なかったのが現状でした。だからこそ週に一度クラブが選手に対して学びの機会を提供したら自分の視野が広がり、「プロのアスリート」として良い方向性に向かう選手が増えるのではないかと思ったのがきっかけです。サッカー業界以外の方の日常を知り多様な価値観に触れることで社会人としてのスキルや人間力を高め、ピッチ外の時間や引退後のセカンドキャリアにも応用することができます。継続的に研修プログラムを実施する中で、選手たちの中で言語化する機会が増えインタビュー等のコメントも変わり、

活動の成果を感じる回数も増えました。今回共同でMVP研修を実施した背景には、株式会社ノーブルホームが力を入れている社員教育と、地元企業と共同で研修プログラムを実施したいというクラブの思いが合致し実施に至りました。また講師役として、サッカーとビジネスを双方の視点でファシリテートできるMeRAQ COMPANYの鶴川様を招き、講義とワークショップをおこないました。人生や仕事でのビジョンを言語化して、自己理解や相互理解を深めるセミナーになります。ワークショップでは選手、フロントスタッフ、ノーブルホーム社員が4人1グループを作り、実現したい未来をプレゼンする中でそれぞれの職業感・価値観の違いを受け入れて、相互理解を深めることができました。またケーズデンキスタジアムのVIPラウンジを研修場所として利用し、非日常を味わいながら意見出しがしやすい空間づくりを意識しました。研修に参加した平野佑一選手は、「より自分の思考をブラッシュアップさせて、進化できたと思います」と満足された様子でした。今回はコロナ禍での合同研修であったため感染症対策を万全に施した上での実施は、多くの方にご協力していただきました。

活動詳細情報はこちら



https://twitter.com/hollyhock_staff/status/1336589988977201152

Make Value Project 企業合同研修 2/2

活動場所

ケーズデンキスタジアム水戸 VIPラウンジ

カテゴリー(SDGs)/取り組みテーマ

4 質の高い教育を
みんなに



8 働きがいも
経済成長も

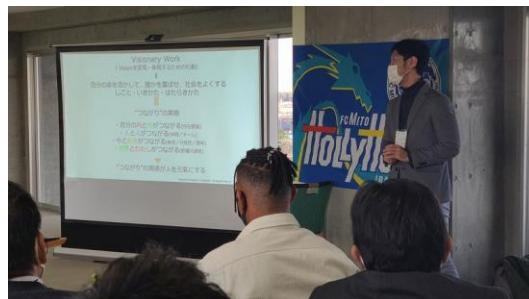


協働者

企業

協働者名

株式会社ノーブルホーム、
MeRAQ COMPANY





県内プロスポーツ5チームによる温泉デリバリー

Story コロナ渦で休業状態となった温泉地を応援しようと栃木県内の5プロチームが連携し、温泉地の源泉を家庭に無料で届ける「源泉デリバリー」を全県的に実施した。事前応募で当選した方に栃木SCスタッフが鬼怒川温泉のお湯をお届けした。自粛期間中で温泉などに行けない中、自宅で温泉に入れることをとても喜ばれた。また、プロスポーツチーム5チームが協力したことでメディアにも取り上げられ、経営に苦しむ地元の温泉地を盛り上げることができた。

活動詳細情報はこちら



<https://www.shimotsuke.co.jp/articles/-/311948>

活動場所

鬼怒川パークホテルズから県内各所へ

カテゴリ(SDGs)/取り組みテーマ



協働者

NPO, プロスポーツチーム5団体

協働者名

栃木県旅館ホテル若旦那の会、栃木シティFC、宇都宮ブリッツェン、那須ブラーゼン、宇都宮ブレックス





スマイルキッズキャラバン

Story 「スポーツの楽しさ」「体を動かすことの喜び」と同時に「協力することの大切さ」を体感するため、「仲間と助け合いながらボールを使った運動」を指導します。小学校のほか幼稚園や保育園、PTA行事、学童、地域のスポーツクラブなどでの実施を行います。群馬県内の子どもたちに地元「Jクラブがあるからこそその体験をしていただく、またザスパクサツ群馬を身近に感じてもらえるように県内各地で実施します。サッカーに親しみのない子どもたちは活動序盤に少しサッカーへ苦手意識を持ちますが、経験のある子どもたちにつられ、徐々にボールへの苦手意識が薄れ積極的に活動してくれるようになります。コロナウィルスの影響で運動会等の行事が無くなったこともあり、親子行事の代替でスマイルキッズキャラバンを実施してくれる団体もありました。将来的には障がいスポーツなどを取り入れるなどして、幅広く活動して行きたいと考えております。

活動詳細情報は



<https://sgrum.com/web/smile-kids/>

活動場所

小学校

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

企業、NPO、学校

協働者名

NPO法人ザスパスポーツクラブ





レッズローズ植栽プロジェクト 1/2

Story

◆世界初、サッカークラブの名が付いたバラが誕生するまで◆

バラの誕生のきっかけは、1999年までさかのぼります。同年のリーグ最終戦、駒場スタジアム。浦和レッズのJ2降格が決まり、歓声が消え、スタンドを重い沈黙が覆いました。絶望感に包まれる選手たち。すると、スタンドのファン・サポーターは涙交じりに『We are REDS!』コールを始めました。それは、“たとえJ2であってもチームを支え、1年で再びJ1に復帰させる”誓いのコールでした。クラブが浦和を愛する仲間たちと真の絆でつながった、忘れられない瞬間でした。その後、この浦和を愛するホームタウンの人たちへの恩返しと更なる絆づくりへのクラブの想いと、さいたま市(旧与野市)在住のバラ育種家の「地元のサッカークラブをイメージした真っ赤なバラを作りたい」という想いが重なり、世界中で愛されているバラをテーマにしたオリジナルローズの育種が始まりました。何度も交配を重ね、実験栽培などを経た2010年、ついに「浦和レッドダイヤモンドズ」(愛称:Reds Rose)が完成。従来のバラがもつ特徴に「レッズの赤」「誰からも愛される」「力強さ」というテーマを加えた、浦和レッズにふさわしいバラとなって誕生しました。

◆Reds Roseの特徴と込められた想い◆

【鮮やかな赤】

多くの交配を繰り返して出来た60の個体(バラ)の中で納得のいく赤は2つだけでした。その2つから「強さ」や「育てやすさ」を改良し、チームカラーを表現した世界でひとつだけの「レッズの赤」を作出しました。

【育てやすさ】

鉢植え、地植えの共用が可能で、樹高が80cm程度とコンパクトに生育する品種であるため、市街地やベランダ園芸にも適しています。また耐病性にも優れており、初心者でも安心して育てられることから、浦和レッズの目指す「誰からも愛される(クラブ)」を表現しています。

【力強さ】

四季咲き性の品種で、春から秋まで繰り返し開花します。また、一つの房に花が多く付く多花性で、花もちが良い品種です。一般的な四季咲き性のバラは秋の花付きが少ない傾向ですが、Reds Roseは春はもちろんのこと、秋も花付きが良く実用性に優れる「力強さ」を兼ね備えています。

◆Reds Roseのこれまでと「これから」◆

2012年、埼玉スタジアム公園緑化事業に協力しスタジアムへ植栽したのを皮切りに、浦和駒場スタジアムやレッズランドなど、クラブやホームタウンさいたま市のランドマークとなるスポットを中心に活動を開始しました。2013年には、さいたま市公園緑地協会が推進する市民協働事業への参画や埼玉県公園緑地協会との協働により、両協会が管理する公園や施設など、さいたま市から埼玉県全域へと植栽エリアを拡大。公共施設への植栽が進むと徐々に認知も高まり、2017年頃からはさいたま市内の小・中学校や高等学校を中心とした学校関係へと輪が広がっていきました。そして2020年秋には、さいたま市中央区との協働植栽事業がスタート。これは行政・クラブ・区内の企業・バラサポーターが連携し、植栽活動を通じた「住み続けられる『バラのまち中央区』の街づくり」に貢献していくものです。この取り組みにより、Reds Roseの植栽活動はシャレン!活動へと昇華しました。

Reds Roseは単なる植栽活動のアイテムではなく、コミュニティづくり、ファンづくり、地域とクラブを繋ぐエンゲージメントづくりのシンボルとなっています。このコロナ禍において、その価値・存在感はさらに高まっています。これからもこの地道に作り上げてきた流れをさらに加速していきたいと考えています。

◆笑顔あふれる幸せな街づくりに貢献するために◆

Reds Roseの花言葉は、3つ。「誰からも愛される、強い、忍耐」。

作者の河合伸志(かわいたかし)氏より次のようなコメントをいただいています。~この「浦和レッドダイヤモンドズ」というバラは、本当に「浦和レッズ」そのものだと思います。誰からも愛され、強く、そして耐えることを知っているバラだからです。植物はいい時も悪い時もありますが、愛情を注げば必ず元気に長く育ちます。冬は休眠期に入るため元気がないように見えるかもしれませんが、この時期にしっかりエネルギーを蓄えることで、力強く芽吹き、春には燃えるような赤い花が咲きます。美しく咲くには、咲かない時期も必要なのです。「浦和レッズ」も同じことが言えるのではないのでしょうか。「Reds Rose」と「浦和レッズ」を重ね合わせながら育ててもらえれば嬉しいです。そしてこのバラからいろいろなことを感じながら、ファン・サポーターの皆さんの心が豊かになっていくことを心から願っています。~

河合氏の想いととも、これからも浦和レッズはReds Roseに「ホームタウンで輝き続ける!」というメッセージを込めてプロジェクトを推進し、真っ赤に咲き誇るバラとともにホームタウンの人々の笑顔があふれる幸せな街づくりに貢献していきます。



レッズローズ植栽プロジェクト 2/2

活動詳細情報はこちら



<https://www.urawa-reds.co.jp/clubinfo/%E3%80%8Creds-rose%E3%80%8D%E8%AA%95%E7%94%9F/>
<https://www.city.saitama.jp/chuo/002/p076417.html>

活動場所

埼玉スタジアム2002ほか埼玉県内の公園、施設、学校など

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

企業、住民、学校、行政

協働者名

株式会社グリーンダイナミクス、有限会社ハイフラワー小磯梨園、中央区バラサポーター、さいたま市立小・中・高等学校、さいたま市中央区役所、公益財団法人さいたま市公園緑地協会、公益財団法人埼玉県公園緑地協会

補足

2020年末現在、計47箇所(966株)を植栽しています。





あおぞら子ども食堂&アルディージャテラス 1/2

Story

新型コロナウイルス感染症の影響によるステイホーム期間以降、新しい生活様式の中での地域の皆さまとの関わり方について模索している中、パートナー企業である『関東食糧株式会社』様(埼玉県内を中心とした食品流通・販売業)より、コロナ禍で埼玉県内の子ども食堂の活動が停止・停滞しており、食堂の運営にとっても苦勞しているため、クラブからもなにか支援をしてもらえないか、とご相談がありました。また、同時期に埼玉県内子ども食堂の統括団体である『埼玉県子ども食堂ネットワーク』の代表者様からも、「コロナ禍での様々な制限により疲弊してしまっている子ども食堂利用家族に対して、大宮アルディージャと一緒に笑顔を届ける活動ができないか」と相談を受け、それから間もなく打合せを重ねていきました。従来の子どもの食堂の活動は「子どもの貧困対策」だけでなく「地域の交流拠点」としての役割も担っていましたが、コロナ禍においてはその意義が果たせなくなってしまっている状況を知りました。クラブとしてもコロナ禍により相次ぐ地域イベントの中止や自粛により地域の皆さまとの活動や交流の機会が激減していましたが、外で元気いっぱいスポーツをすることや家族・仲間と共に食事をする楽しさを、改めて子どもたちに体感してもらって元気になってほしいという願いを込めて、2つの屋外イベントを計画していきました。第一弾は「あおぞら子ども食堂withアルハロ」と題し、フットサルコートでのサッカー教室とあおぞらランチを実施。10月開催であったため、大宮アルディージャのシンボルカラーであるオレンジ色との親和性が高いハロウィンの要素も取り入れ、お菓子配布や仮装なども楽しみました。当日の参加者のうち、サッカー教室でのコーチ陣の指導でサッカーが大好きになり、後日にクラブ主催イベントに自主参加をしてくれたお子様がいたと報告があり、コーチたちも指導者冥利に尽きると大変喜んでいました。第二段は、協働者の皆さまと地元のプロサッカーチームを応援する機会を通じて地域とのつながりを再確認する機会づくり、ならびに子どもたちの夢や家族の絆を育む場を共創することを目指し、11/15・ツエーゲン金沢戦の同日に「アル

ディージャテラス@大宮一番街」を実施。大宮の商店会や事業者の皆さまにも活動の主旨に快く賛同していただきました。新たなパブリックスペース創出を目的とする街路沿道利活用社会実験「おおみやストリートテラス@大宮一番街」(令和2年度土地活用モデル大賞にて国土交通大臣賞受賞)協力のもと、感染対策を徹底しながら大宮一番街商店街内に特設ブースを出展。当日は、27組96名の家族を招待し、特設ブースでは観戦チケットと地元・大宮の町おこしB級グルメ「大宮ナポリタン」と子ども食堂へ寄付された古米を使用して作られたパエリアを盛り合わせた「特性オレンジ弁当」を配布しました。そのほか、キッズサポーターを対象とした「お菓子配布大作戦!!」や、各家庭から余剰食材を回収し子ども食堂へ寄付するための「フードドライブコーナー」の設置、11月の児童虐待防止推進月間に併せて、子ども虐待防止「オレンジリボン運動」の啓発活動を実施し、特設ブースには合計250名ほどの皆さまにお越しいただく大盛況ぶりでした。加えて、対戦相手であるツエーゲン金沢のシャレン!担当スタッフ様にもイベント告知に協力して頂いたため、金沢サポーターの皆さまも大宮駅からNACK5スタジアム大宮へ向かう道中で特設ブースにお立ち寄り頂き、金沢グルメを中心に多くの食品をフードドライブコーナーに寄付して頂きました。また、この日の最初の食品寄贈者が金沢サポーターの方であったことが、クラブの枠組みに捉われず互いをリスペクトし合えるJリーグならではの醍醐味を味わうことができた非常に感動した出来事でした。<参加者の声>・初めてこのようなイベントに参加しましたが、試合観戦もとても楽しみです、また機会があれば必ず参加したいです。ナポリタンとパエリアを組み合わせた色鮮やかなオレンジ弁当もとてもおいしくいただきました。・親子で参加できるイベントなので非常に嬉しいです、10月にオレンジコートで実施したイベントにも参加しましたが、子どもたちはお友達とサッカーができてとても楽しかったようで、試合観戦もとても楽しみにしていました。スタジアムの大きさにも大興奮で、「選手たちがカッコイイ!」と憧れの眼差しでピッチを凝視していました。

活動詳細情報はこちら



<https://www.ardija.co.jp/hometown/detail/14843.html>

<https://www.ardija.co.jp/hometown/detail/14855.html>

あおぞら子ども食堂&アルディージャテラス 2/2

活動場所

オレンジコート ステラタウン、大宮一番街商店街内特設ブース

カテゴリー(SDGs)/取り組みテーマ



協働者

企業、NPO、住民、行政、地元商店会、外郭団体

協働者名

さいたま市子ども食堂ネットワーク、関東食糧株式会社、さいたま農業協同組合(JAさいたま)、株式会社明治、ケアサポート株式会社、アルディージャビジネスクラブ、大宮一番街商店街協同組合、おおみやストリートテラス@大宮一番街実行委員会、大宮ナポリタン会、アーバンデザインセンター大宮(UDCO)、ハッピーファームみやたけ、ディアボラ大宮店、埼玉県、さいたま市、金沢市、ツエーゲン金沢、Jリーグ社会連携本部、NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ





地域共生事業 蘇我スポーツ公園除草作業

Story

2020年4月より、ジェフユナイテッドが「蘇我スポーツ公園指定管理者SSP UNITED」の構成企業となり、蘇我スポーツ公園の管理運営に携わっていることから、千葉市から受託した蘇我スポーツ公園進入路の除草作業を、障害者の自立・社会参加を目指している「社会福祉法人オリーブの樹」に依頼することができました。ジェフユナイテッドでは「長期研修生(企業等派遣研修)」として千葉県の教員研修を受け入れており、本年度研修にいられていた方より、障害者の雇用問題についての課題を伺っておりました。そこで今回の除草作業を、障害者の就労機会に結び付けられないかを検討し、千葉県障害者就労事業振興センターの仲介を経て、実施することができました。

蘇我スポーツ公園の進入路は、試合観戦に来られる多くのファン・サポーターのスタジアムへの玄関口です。除草作業を障害者の方々に行っていただくことで、ご来場いただく皆さまに障害者と共生する社会を感じていただきたいと考え実施いたしました。

今後、私たちジェフユナイテッドは、蘇我スポーツ公園だけではなく、より広い視野で障害者雇用の一助を果たしていきたいと考えております。

活動詳細情報はこちら



<https://jefunited.co.jp/news/2020/10/grassroots/160214526013781.html>

活動場所

蘇我スポーツ公園進入路

カテゴリー(SDGs)/取り組みテーマ

8



協働者

共同事業体、社会福祉法人

協働者名

社会福祉法人オリーブの樹、
蘇我スポーツ公園指定管理者SSP UNITED

補足

10月6日(火)には本村武揚選手と見木友哉選手も作業に参加をして、障害者の方と共に働きました。本村武揚選手コメント「僕たちがプレーするフクアリの裏側で、このように仕事を支えてくれている人がいる事を知れてよかったです。今まで以上に良いプレーを見せて、みなさんと一緒に喜びを感じたいと強く思いました。」





柏市子どもルームへの飲料提供

Story 新型コロナウイルスの影響で外出や飲食などが自由に出来ない中、昨年5月中旬に柏市役所様(こども部児童保育課)のご協力を頂き、市内の子どもルーム(43箇所)に飲料を提供させていただきました。柏市役所様にこ市内の子どもルーム数を確認し、その後各ルームの方に連絡をさせていただき、ご提供をさせて頂きました。少しでも、子どもたちからの笑顔を見れたこと。また、これを機に「柏レイソル」というクラブを知ってもらい、スタジアムに足を運んでもらえるようにと思い、今後もこのような活動が出来ればと存じます。

活動詳細情報はこちら



<https://www.reysol.co.jp/news/home/033262.html>

活動場所

柏市内子どもルーム(43箇所)

カテゴリー(SDGs)/取り組みテーマ

子どもたちに健康と笑顔を

協働者

企業

協働者名

柏市こども部学童保育課





FC東京が大切にしてきたもうひとつの「居場所」あおぞらサッカースクール！（知的障がい者対象） 1/2

Story

FC東京のグラスルーツ宣言は次のとおり。
「サッカーを通じてスポーツの楽しさを伝え、人を育て、

夢を育みます。

仲間の笑顔で包まれるような活動を増やし、東京を元気にします。」

年齢、性別、障がい、人種などに関わりなく「だれもが、いつでも、どこでも」サッカー、そしてスポーツの持つすばらしさの多くをみなさんと分かち合い、育みたいと考えています。

誰もが心からサッカーを楽しめるように、自分のニーズや希望に合ったサッカーの選択肢を増やし、安全に、安心してサッカーを楽しめる環境を、しっかりと整えます。

本活動は、主に知的・発達障がいのある方を対象としたサッカースクールです。毎月第2日曜日に開催しており、2018年5月に開校いたしました。

もともとは日韓ワールドカップ(W杯)が開催された2002年、調布市とともに知的障がい者とサッカーをする教室を開催したことがきっかけです。その時の子どもたちの楽しそうな表情、保護者の皆さんの嬉しそうな様子が格別で、この機会をとにかく増やしていくこととなりました。

参加者はダウン症、多動症、自閉症など障がいは様々であり、接し方にも専門性が求められるため、知的障がい者のサッカー教室を運営する認定NPO法人トラツソスの協力を得ながら行ってまいりました。

調布市内に在住、在学、在勤の方々を対象として、調布市から市報やHPなどを通じて募集がなされ、調布市より補助金の交付を受けながら、トラツソスのコーチとFC東京の普及部コーチたちが連携して活動がスタートいたしました。

当初は年間に4回のみで開催でしたが、徐々に拡大していき、いよいよ定期的に継続的に開催されるように発展してきた次第です。

さらに、あおぞらスクールの会場も、スーパースポーツゼビオ調布東京スタジアム前店が、本活動の趣旨に賛同して、無償で利用させてくださっています。

担当のFC東京普及部の鯨井健太コーチは次のように語ってくれました。

「単発の教室の場合、その場のコーチと子どもたちの関係性によって子どもたちにとって良かったかどうかが変わってしまいます。定期的にやることで私たちと子どもたちの関係性が保たれ、深まっていきます。

知的障がいがある子どもは、何かに突出している子どもが多い。見た目ではわかりづらく、でもそれを周囲に受け入れてもらえないことで自尊心を傷つけられてきている子どももいます。そういう子どもたちへの居場所を作りたいという想いで続けてきました。障がいがある子どもの中には、サッカーがしたいのにする場がなくて困っている子どもたちは多い。Jリーグクラブはサッカーを上達させることを求められていると思いますが、加えて、人間教育もできるということにつながっていきたいです」

自分が受容されていると感じた子どもは表情が明らかに変わるし、この一連の話は健常者への指導にも通じるもの。障がい児と接しながら、コーチたちも磨かれ学ばせてもらっていることも多いです。

そして単発のイベントではなく、定期的なスクールにしたのは、日常の一部に少しでも近づけたかったからです。サッカーを教わるというよりもコーチたちに会うのを楽しみにしている参加者も多いかもしれません。

そんなこともあってコロナ禍でも、オンラインでコーチや仲間の顔を見られる機会を絶やさずに、積極的に交流に努めてまいりました。

トラツソスの吉澤昌好副理事長は「子どもたちはスクールのこの1日のために他の日を過ごしていることも。ここでコーチたちと一緒に楽しむために体調を整えてくる。そうすることによって日々の生活も安定する」と話してくれたこともあります。そしてサッカーをプレーすることも継続して本当に上手になっていき、自信もつけていきます。

FC東京U-18やU-15の選手の間人間的向上も期待して、あおぞらサッカースクールと合同練習を行うことも大切にしています。U-18の選手は周りに目を配り「この子はボールに触っていないよ」と伝え合ってパスを出したり、障がい児と接点を持ったことで、コーチも選手もクラブスタッフも気づかされるのが本当に多いです。

そしてこれまでの活動については、発達障害の学会からもすでに評価していただき、トラツソスとともに発表させていただく予定です。

今後は、知覚過敏な子どもたちにもセンサリールームを用意して試合観戦を楽しむ機会も提供したり、試合運営業務にボランティアメンバーのみなさんとともに携わることも増やしてまいりたいと考えています。プレーだけでなく、様々なかかわりや交流、社会経験を重ねることによってさらに多くの刺激を届けたいと思います。



FC東京が大切にしてきたもうひとつの「居場所」あおぞらサッカースクール！（知的障がい者対象） 2/2

活動詳細情報は



<https://www.fctokyo.co.jp/news/8993>

<https://www.facebook.com/ChofuCity/posts/1765853903468110/>

<http://chofuoyanokai.com/index.php?QBlog-20200802-1>

活動場所

ゼビオスポーツパーク調布 他

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

企業、NPO、学校、行政

協働者名

認定NPO法人トラッソス、調布市、
スーパースポーツゼビオ調布東京スタジアム前店



ともに未来へ Green Heart Project 1/2

Story

2020シーズン、東京ヴェルディはジョンソン・エンド・ジョンソングループ医薬品部門のヤンセンファーマ株式会社様とSDGsパートナー契約を締結し、『ともに未来へ Green Heart Project』をスタートしました。これはホームタウンとのつながり、パートナーとの幸せな出会いから実現したプロジェクトです。東京ヴェルディはホームタウン東京都内の各市区で、障がい者スポーツ普及活動を続けてきました。2015年に日野市で『障がい者スポーツ体験教室』が始まり、2016年に立川市、2017年に多摩市、2018年に稲城市、2019年に渋谷区と北区、2020年に足立区とエリアを拡大。2019年度の活動は年間100日を超え、のべ4,000名以上の方々をたのしみました。この活動には障がいの有無に関わらず誰でも参加できます。種目はサッカーに限らず、ポッチャ、チアダンス、フライングディスク、玉入れなど様々なスポーツや遊びをたのしめます。担当するのは障がい者スポーツ指導員の資格を持つ東京ヴェルディ普及部のコーチたち。私たちは、障がいのある方が東京のどこに住んでもスポーツをたのしめることを目指して活動してきました。あるとき、ご縁があってヤンセンファーマ様に私たちの活動についてお話をすることがありました。そこで感じたのは、おたがいの想いが共鳴しているということです。ヤンセンファーマ様は医薬品を作る企業ですが、当事者の方の回復のためには医薬品だけではなくスポーツなどの力も不可欠だとお考えでした。そしてそのためには、当事者の方々が属するコミュニティに直接つながっていきける存在が必要でした。一方、東京ヴェルディは未来にむけてともに活動するパートナーを必要としていました。これは私たちにとってまさに幸せな出会いで、そこからものすごいスピードでプロジェクトが進んでいきました。『ともに未来へ Green Heart Project』は、“こころの病”と向きあう方々にスポーツ教室、就労体験、試合観戦をたのしんでいただくプログラムで、シーズン終盤の3試合で開催しました。SDGsの17の目標のなかでは、3『すべての人に健康と福祉を』の実現を目指しています。活動には自信がりましたが、実際に何名の方が来てくださるか当日まで不安な気持ちもありました。しかし蓋を開けてみれば、スタジアムには平均50名を超える方々が、ニュースやチラシを

見てくださった方、いつも障がい者スポーツ体験教室にご参加されている方、そのご紹介でいらっしゃった方、ヤンセンファーマMRの皆様ご担当のドクターからお話を聞いた方、スポーツ庁や企業から視察に来られた方。その全員とコーチやスタッフが同じGreen Heart Tシャツを着て、活動がスタートしました。最初はスポーツ教室。普段は入れない味の素スタジアムのピッチレベルに降りて、みなさんうれしそうです。まずはソーシャルディスタンスを保ちつつ、エアハイタッチでこころの距離を縮めて、その後はダンスやサッカーをたのしみます。途中、場内ビジョンには大久保嘉人選手、長谷川唯選手、ラモス瑠偉チームダイレクターからのサプライズメッセージも映し出されました。活動のキーワードは、笑顔です。コーチたちは参加者の皆さんが笑顔でたのしめるメニュー、声かけ、雰囲気イメージし実践していきます。そしてそれは、クラブ創立の1969年から続くヴェルディの伝統でもあります。昼食休憩後は就労体験。キッズパークのプラススポーツ体験ブースでお客様と交流します。就労支援事業所スタッフの方が『普段は見せない表情でたのしんでいた』とおっしゃるほど、みなさん生き生きとお仕事をされていました。就労体験後、謝礼を封筒に入れておひとりずつにお渡ししました。この頃にはもう誰が参加者で、誰がコーチで、誰がスタッフなのか分からないほどの一体感が生まれ、まさにインクルーシブな活動になりました。最後はホームゲーム観戦。試合には勝ちも負けもあります。それでも『負けただけ選手が一生懸命でたのしかった！』と言っていたいたり、快勝した試合で『本当にうれしい！』と喜んでいたり、それは涙が出るほど感動的なことでした。後日実施したアンケートでも『たのしかった』、『自信をなくしていたけど、勇気を出してチャレンジしてよかった』、『また参加したい』といったご感想をいただきました。2021シーズンも、『ともに未来へ Green Heart Project』は続きます。これまでは東京から日本全国へ発信することを考えていましたが、ヤンセンファーマ様のような世界的な企業とともに活動することで、これからは世界にむけて想いを発信していきます。よりよい未来の世界をつくるために、東京ヴェルディはスポーツ&SDGs普及活動を続けていきます。

ともに未来へ Green Heart Project 2/2

活動詳細情報はこちら



<https://www.verdy.co.jp/news/9377>

<https://www.verdy.co.jp/news/9478>

<https://www.verdy.co.jp/news/9624>

<https://youtu.be/1yizJWy2E3M>

<https://www.verdy.co.jp/news/9445>

<https://www.verdy.co.jp/news/9560>

<https://www.verdy.co.jp/news/9584>

<https://www.janssen.com/japan/green-heart-project>

活動場所

味の素スタジアム

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

企業

協働者名

ヤンセンファーマ株式会社





ゼルビアウォーキング 1/2

Story

新型コロナウイルス感染症に伴い、クラブでは『#いまゼルビアにできること』を標語として、子どもたちの自宅学習支援を目的に『ゼル塾』の配信、ひとり親家庭の支援を目的に『おうちでできる簡単な遊び』、感染予防対策の啓発や医療従事者の方々へ応援ポスターの掲出など、行政・企業・町田市医師会・地域と連携した活動に取り組んでいた。活動のポイントは『クラブがやりたいこと』ではなく、地域の声をキャッチし『地域が必要としていること』であった。活動を企画・実施していく中「家に籠ることで運動不足になりがち」「外出する機会が減って食欲が減退したように感じる」という声を耳にするようになった。そこで、クラブが得意とする運動・健康増進施策を実施することが、町田市民が抱える課題解決へ繋がると考え、積み重ねてきたウォーキングイベントなどのスキームを活かすことで、楽しく健康増進を図れないかと検討を進めた。企画・実施においてポイントを整理することが望ましいと考え、3つに分類した。『三密を回避すること』『散策するコースが魅力的であり、町田市民が街への愛着を深められること』『協働者がそれぞれのリソースを最大限発揮できること』ポイントを意識した中で、町田市観光まちづくり課に企画案を提出、相談した。すると、二つ返事で早速アクションを起こしてくれたのだ。町田薬師池公園四季彩の杜西園の指定管理者であるNEST Machidaをご紹介いただき、三者で実行へ向けた協働がはじまる。町田市民にとって魅力的で、参加動機に繋がる仕掛けを如何に実現するか、上記の3つのポイントを磨き上げることで議論は白熱した。三密の回避については、実施期間・時間の幅を設けることで参加者を分散し、自分のペースで楽しむことができるよう設計し、手指消毒の徹底や物の共有・使いまわしを避けるなど感染予防対策を徹底。散策コースは、2020年6月にオープンした街の新たな魅力である町田薬師池公園四季彩の杜西園ウェルカムゲートをスタート・ゴール地点にすることで、施設内のカフェや地元野菜の販売所、自然豊かな景観や歴史文化等を楽しむことができ、町田市民が街の魅力を発見し、愛着を深めることに重点を置いた。また、参加者特典の用意、行政の広報発信など、協働者がそれぞれのリソースを最大限発揮することで、町田市民の参加動機、満足度向上が高まるのではないかと力を入れた。目的の共通認識、役割りの確認を徹底しつつ、協働者を

増やしていくことで、初めての協働とは思えないほどに企画はスピード感ある中で進んだ。ただ、全てがうまくいくほど甘くはない。参加者目線を意識すればするほど『安心・快適に参加いただくための準備』ガイドがない中でも最大限に魅力を感じさせる仕掛けが課題として浮き彫りになったのだ。気兼ねなく参加でき、散策しやすいことが大切であると考え、何度も会場に足を運び、実際に歩き周ることで、魅力的な場所をチェックポイントとして設定し、初めて訪れる方も歩きやすいようなウォーキングマップを作成することに着手した。また、チェックポイントのPOPに熱中症対策や環境対策に関連したメッセージを盛り込むことで学びの要素を取り入れ、公園に隣接する町田ダリア園にも協力いただくことで植物の生育機会を創出することで課題解決へと向かうことができた。1人でも多くの方に参加してもらうため告知に注力する必要性を。クラブ公式でのリリースや行政のプレスリリース、町田市長定例会見でのイベント告知、各協働者のもつメディアでの広報発信で周知に全力を注いだ。いざ本番！コロナ禍ということもあり、参加意欲が高まるかという懸念材料もあったが、蓋を開けてみれば2週間限定開催の中、予想をはるかに超える833名が実際にウォーキングを楽しんだ。繰り返しの参加、自身の経験を身近な方に伝え新たな方が参加する好循環が生まれるなど魅力が伝わる取り組みとなった。『歩く』というシンプルなことに色々な要素が加わったことも魅力となった要因だ。アンケートからも「気持ちの良い環境の中で、密を気にせず楽しく歩くことができた！」「こういった企画を待っていました！」は最大の喜びとなった。また、協働した観光まちづくり課職員からは「気兼ねなく参加できるイベントであるため、参加者の満足度は非常に高く、西園と薬師池の良いPRに繋がった。今回のイベントで、新たに三者の『繋がり』ができたことも大きな収穫で、今後の展開が大いに期待できる」と協働に価値を生み出すことができた。その言葉通り、早速三者が別企画で新たなスタートをきった。今後は近隣の町内会自治会や地域団体にも関わっていただき、町田市民の健康増進、持続可能な地域づくりを実現していきたい。更には、スキームや協働方法を地域で共有しながら、様々な場所で行われていくことを目指したい。

活動詳細情報は



<https://www.zelvia.co.jp/news/news-156378/>



ゼルビアウォーキング 2/2

活動場所

町田薬師池公園四季彩の杜

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

企業、住民、行政、社会福祉法人

協働者名

町田市(経済観光部観光まちづくり課・都市づくり部公園緑地課・環境資源部環境政策課・保健所健康推進課・地域福祉部障がい福祉課)、NEST Machida、社会福祉法人まちだ育成会かがやき、地域住民、ファン・サポーター

補足

コロナ禍でもやり方を工夫すればできることがある。スポーツの力を信じて取り組んだ事例として今回はこちらをエントリーします！2,000字に魂込めます！





川崎フロンターレ監修「みやまえご近助体操」 1/2

Story

6月初旬。 昨年の「みやまえご近助ピクニック」(※1)以降、積極的に連絡を取り合っている宮前区役所地域振興課のかたよりこんな話をききました。「地域のお年寄りを中心に、外にすることができないひとがいます。訪問サービスはまだ完全に復旧していませんし、このままだとみなさんの心身の調子が心配です。」世間は緊急事態宣言が明けて、ようやく人々の活動が活発になりはじめてきたときでした。事実、リーグ戦の再開にむけてスタッフは動いていましたし、街のお店も徐々に営業再開をしている状況。長かった自粛期間を終えて、友達とお会いした方も多くいたと思います。そのなかで聞いた宮前区の現状。もちろん日本中で似た状況だったと推測できます。しかし、フロンタウンさぎぬまも営業再開に向け、お客さんに連絡をしていたときに地域にそのような課題があるとは想像もしていませんでした。日頃の健康教室に参加されているかたにだけ、運動機会を提供できていればいいのか。そう思うようになりました。11月1日(日)からイツコムチャンネル11にて『川崎フロンターレ監修「みやまえご近助体操」』の放送が開始されました。サポーターのみなさんはもちろん、普段フロンターレに触れることのない方、特に今もなかなか自宅の外に出る機会がない方、運動機会がここ半年ほどで著しく減少してしまっている方に見ていただきたいと思い作成しました。地域振興課のみなさんとお話したときから、どうにか運動の機会をフロンタウンにこずとも提供できないかと考えていました。6月にサービス開始した「フロンタウンオンラインフィットネス」はzoomを使用したプログラムのため、受講までが難しい。地域の施設でプログラムを行うには感染症対策などの面でハードルが高い。正直、あきらめかけていたところでしたが、最後に思いついたのがテレビでした。テレビのない家庭が増えているとニュースで見ることがありますが、私たちが今届けたい年齢のみなさんのご自宅にはまだまだ現役のテレビがある。早速イツコムさんに相談しました。地域の課題と企画をすぐに受け止め、すぐに放送に向けて準備を進めてくださいました。こうして完成したのが「みやまえご

近助体操」です。体操の内容は、宮前区の有志が作成した体操『風の中で』をアレンジしたもの。せっかく区民のみなさんに届けるのならと、宮前区の公園で日頃から使用されている体操をもとにプログラムを作成。番組のオープニングでは、公園体操に参加されている区民のみなさん、高橋哲也区長、フロンタウンさぎぬまスタッフ他、区全体で番組作りをしました。番組の収録はフロンタウンさぎぬまで行いました。普段あまり意識したことがなかったのですが、フロンタウンの周りには意外と音が多い。まずは電車の通過音。近隣の工事の音、そして小学校での組体操の練習。撮影の途中、隣の小学校から某人気アニメの主題歌が。それまでほかの音は気にせず収録を続けていたカメラマンさんもカットをかけました。そこまで大きな音ではなかったのですが、番組を作るうえで権利の問題で既存の音が入ると素材がつかえないようです。なるほど、番組作りとはそこまで繊細な作業なのかと勉強になりました。気が付くとはじめに地域振興課のかたとお話ししてから半年近くの月日がたっていました。それまではフロンタウンさぎぬまにお越しいただくかたにプログラムを提供していましたが、地域に目を向け、想像することでまだまだやるべきことはあるはず。クラブとして、エンターテインメントをスタジアムでお届けすることにこれからも注力していきますが、並行して地域の課題解決にもうまく関わっていくことができるといいと思います。今回、この施策を2021Jリーグシャレン！アウォーズにエントリーすることにクラブとして決断しました。コロナ禍でスタジアム施策を行うことができなかったことは一因ですが、改めてこのクラブは地域に支えられ、そして支える存在にならなければならないと実感しています。エントリー項目協働者の欄の「住民」。この施策を通してたくさんの方にお話を聞き、巻き込み、お願いをし、されて完成させました。このクラブは川崎市民のみなさんがいないと成り立ちません。重ねてになりますが、コロナ禍において地域と強く繋がり、お互いに共走したこの施策にて2021Jリーグシャレン！アウォーズにエントリーいたします。

※1 みやまえご近助ピクニックについて

<http://www.frontale.co.jp/diary/2019/1002.html>



川崎フロンターレ監修「みやまえご近助体操」 2/2

活動詳細情報は



<https://www.miyamae-gokinjosan.com/index.php>

<https://www.itscom.co.jp/ch/program/miyamaegokinjyotaisou>

<https://www.city.kawasaki.jp/templates/press/miyamae/0000121783.html>

活動場所

イツコムチャンネル フロントウンさぎぬま

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

企業、住民、行政、宮前区全町内・自治会連合会

協働者名

宮前区役所、イツコムコミュニケーションズ株式会社、サントリーウエルネス株式会社、宮前区全町内・自治会連合会、宮前区内公園体操参加者のみなさま、石塚睦己さん(宮前区在住インストラクター)





【地域を応援】ホームタウン テイクアウトマップ 1/2

Story

横浜F・マリノスのホームタウンである横浜市・横須賀市・大和市を中心に600を超えるテイクアウト・デリバリー可能な店の情報が集まったこの「ホームタウンテイクアウトマップ」はまさに「ホームタウンのチカラ」で創り上げられたものだ。行政、商店街、サポーター、企業……。それぞれが情報を持ち寄ることでマップは充実していき、価値を高めていった。緊急事態宣言下でお客様の足が遠のいている飲食店、外出が制限されている地域の人々を結ぶことを目的として、それぞれがアクションを起こした結果がこのマップである。

緊急事態宣言真ただ中の4月14日、「この状況でクラブがホームタウンに対してできることはないか」と企画がスタート。サポーターの協力もあり、そこからわずか1週間後の4月21日にはローンチさせた。正直、「テイクアウトマップ」というもの自体は既に様々な団体が展開しており決して真新しいものではなかった。しかし我々が目指したものは、「Jリーグクラブの発信力」を使っての「多くの人に知ってもらえる・使ってもらえるマップ」、そしてホームタウンの様々な団体やサポーターを巻き込むことで「ローンチしてからも有機的に進化し続けるマップ」であり、結果として複数のローカルメディアへ掲載され、ローンチ時には200に満たなかった掲載店舗が1か月足らずで500を超えるまでになった。

運用自体は非常にシンプル。ソーシャル上でハッシュタグを使って情報を広く募集する一方で、既にテイクアウト実施店舗の

リストを持っている団体にアタックし情報を提供してもらい、クラブの管理リストに追加、Google マップに都度あげていく、というものである。掲載作業自体は機械的なものなのだが、掲載店舗の中には普段クラブのポスターを掲出していただいている店舗も多く、そういった店舗の情報を提供してくれるサポーターの投稿には単なる情報提供を越えた、「地域とのつながり」も感じることができた。

テイクアウトマップが公開されてしばらくすると、「F・マリノステイクアウトマップに載っているお店に行ってみた」という声や「テイクアウトマップを見たお客さんが何組かきた」というお店の声、そして「自分たちが持っている店舗リストと相互情報提供しませんか」という団体からの声も聞かれるようになってきて、この活動で「地域が動いている」という実感も得られるようになった。それと同時に、サポーターをはじめとした多くの人々のチカラのすごさ、そして多くの人と手を取り合うことでより大きなチカラが生み出せること、旗を振ることでそこに人は集うこと、を感じることができた。

この文章を書いている2021年1月28日現在、神奈川県は緊急事態宣言下に置かれている。このマップが厳しい状況にある飲食店の皆さんのチカラになればと思う一方で、今後このマップが大きく活用されるようなことのないホームタウンになることを切に願う。

活動詳細情報は



<https://www.f-marinos.com/news/category/4/6967>

<https://www.google.com/maps/d/viewer?hl=ja&mid=1C1iGeWJHsN4vyLuU7-PxOidQhthwY6C&ll=35.40730888913592%2C139.58236075000002&z=11>

【地域を応援】ホームタウン テイクアウトマップ 2/2

活動場所

オンライン上

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ

8 働きがいも
経済成長も



11 住み続けられる
まちづくりを



17 パートナシップで
目標を達成しよう

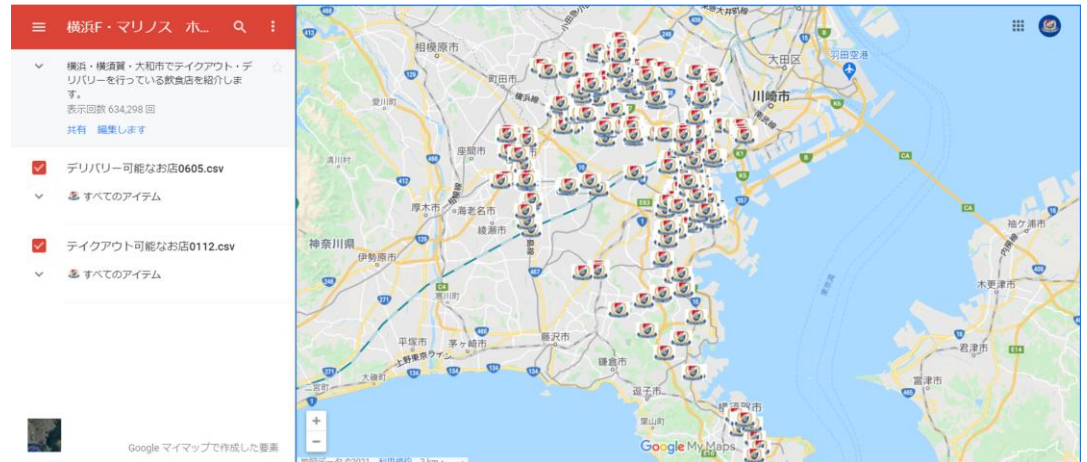


協働者

企業、NPO、住民、行政、サポーター

協働者名

NPO 法人ハマトラ・横浜フットボールネットワーク、
港北区役所、港北区商店街連合会、
都筑区商店街連合会、青葉区商店街連合会、
南林間ちよい呑みフェスティバル実行委員会、
はまれぼ、GREEN SMILE - ぐりすま -





「横浜FC」×「子供の未来応援国民運動」 1/2

Story

内閣府等の推進する「子供の未来応援国民運動」として横浜FCがクラウドファンディングを実施し、多くの皆様よりご賛同いただき3つのプロジェクトを実現することができた。クラウドファンディングを通じて横浜FCの取り組みを知っていただき、ご支援していただくことで一緒に地域活性化活動に参加していただき、一緒に元気を届けることができた。ご支援金は「子供食堂&選手と夢トーク」の運営費、「フリ丸の焼印」製作費として使用させていただき、一部を「子供の未来応援国民運動」へ基金として贈呈した。 ※クラウドファンディングご報告書およびリターン送付:2020年11月30日 完了

1. 子供食堂&選手と夢トーク(2020年10月4日)事前募集をした小学生22名とその保護者19名を対象に「子供食堂&選手と夢トーク」を開催。コロナ禍の環境で密を避け換気の良い場所を選択し、公園(屋外)でお弁当の提供と安永玲央選手、松尾佑介選手が、事前にいただいた質問に答えながらオンライントークを展開。お土産にフードドライブの食料品、横浜FCオリジナルお弁当箱、子供の未来応援国民運動グッズなどをお持ち帰りいただいた。当日のテレビ神奈川のニュースで放映、タウンニュース保土ヶ谷区版(10月16日)の紙面、Web版に掲載された。 コロナ禍においてスタッフはもちろんのこと、ご参加者には検温、消毒、ソーシャルディスタンスなど感染予防対策にご協力いただいた。ご参加者からは「おいしかった」「選手の顔が見られてよかった」「新しい形として今後も続けてほしい」など、選手からもリモートでもできることを視野に入れた活動を継続していきたいという発言もあり、コロナ禍に応じた環境作りをしながら可能な限りの内容で進めることができた。

2. フリ丸印の焼印 協力:東洋美術印刷株式会社 オフィシャルマスコット「フリ丸」の焼印を新規で5種類製作し横浜市内の店舗で「フリ丸印」のパンや和菓子の販売。売上金の一部を内閣府へ「子供の未来応援基金」として寄付。 ※2021年12月贈呈予定 取扱店舗は、TSUBAKI食堂(横浜市新市庁舎内)、南区弘明寺商店街2店舗(コロナ禍において販売開始日調整中)、

その他の候補として瀬谷区1店舗(商品アイテム、複数店舗での使用など運用方法を検討中)。「フリ丸焼印」の商品販売により商店街の活性化を図り、横浜FCがホームタウン横浜のシンボルになることを目指してこの活動を継続的にやっていく。

3. 「子供の未来応援国民運動」へ基金の贈呈 2020年12月25日、内閣府(内閣府出席者/参事官 飯田剛)で、横浜FCの代表取締役社長COO 上尾和太、事業部社会連携グループ長 花村仁が出席し贈呈式を行った。クラウドファンディングのご支援金の一部と既存の焼印を使用した「フリ丸印のぱん」の売上金の一部を合わせて贈呈し、内閣府の飯田剛参事官から「みんなで助け合っていこうという取り組みが形になっていることに感謝したい」とメッセージをいただいた。

クラウドファンディングは、ご賛同いただくことで成立するため達成までの道のりは緊張した日々が続いたが、同時に3つのプロジェクト企画の進行から完了、ご報告まで貴重なご支援金を使用させていただくため慎重かつ大切に実行することができたことで学ぶことも多く、関係各所からも心強いサポートをしていただき、お力とお時間を頂戴し、責任は重大であることを肝に命じながら進めた。強い志を持ちながら社会と真摯に向き合っている皆様に出会い、その行動力を知り今後の活動に向けて大きな財産となった。このプロジェクトで得たものの一つとして、選手が動画などで告知協力に取り組みリモートトークに参加したこと、リターン商品として選手からのお礼メッセージ動画などを盛り込むことでクラブ内の各セクションが関わり全体で取り組んだプロジェクトとなり「子供の未来応援国民運動」への取り組みの意識付けも深まった。「サッカーだけでは足りない、サッカー以外の取り組み」を形にしていくことをこのプロジェクトを通じ、このようなときだからこそ子供たちの未来を応援することの意義を重く受け止めるとともに、あらためて皆様と共に歩いていくことを継続していくことが今後の目標となった。

活動詳細情報は



<https://readyfor.jp/projects/yokohamaFC2020>

https://readyfor.jp/projects/yokohamaFC2020/accomplish_report

「横浜FC」×「子供の未来応援国民運動」 2/2

活動場所

横浜市保土ヶ谷区川島第4町内会館、
バニヤンツリーバーカリー、
水道みち公園、横浜市新市庁舎、弘明寺商店街

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

企業、NPO、住民、行政、内閣府

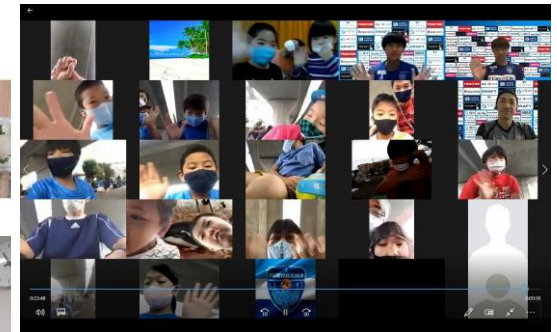
協働者名

社会福祉法人横浜市保土ヶ谷区社会福祉協議会、
ほどがや みんなde食堂 ネットワーク ヘルキーカフェ
(NPO法人ぎんがむら/NPO法人ちゃっと)、
地域食堂りり庵、横浜健康ファーム ともだち、
NPO法人フードバンク横浜、横浜冷凍株式会社、レノボ・ジャパン合同会社、リコージャパン株式会社神奈川支社、株式会社ミツハシ、
日本KFCホールディングス株式会社、バニヤンツリーバーカリー、東洋美術印刷株式会社、内閣府、弘明寺商店街、TSUBAKI食堂



箱にフル丸の捺印を押印

捺印イメージ (だし巻玉子)



地域はファミリー Y.S.C.C.元気プロジェクト 1/2

Story 寿町はかつての高度成長を陰で支えた日雇い労働者が数多く暮らす地域ですが、その多くが現在では高齢化しています。実際、生活保護を受けながら生活をされている方も多く、他の地域と比較にならないほど大きな社会課題となっています。Y.S.C.C.の根底にある地域はファミリーを体現する為、各種団体と協力し『Y.S.C.C.元気プロジェクト』を立ち上げました。「スポーツの力で全ての人の心と身体を元気に！」そして「地域を幸せに、世界を平和に！」をテーマに誰一人取り残さない社会を実現する為、街の特性に起因する社会課題の解決に向け活動しています。実施するコンテンツは、特別な器具を必要とするものではなく、老若男女、年齢や性別を超えてどなたでも参加することができるメニューとなるように設計しています。また、実施団体からしても低予算で狭いスペースでも出来るよう、簡単に実施可能なメニューとし、カスタマイズも容易になっており、サステナブルに提供可能なプログラムとなるよう工夫しています。寿地区住民の方の元気と活力になるには何をしたらよいか当初は模索する日々でしたが、その地域に住む方々にフォーカスし、様々なソリューションをカスタマイズして提供するという事です。身体の不自由な方や精神疾患の方もいます。その中でそこに生活する方々の視点で多面的にアプローチし、サステナブルに継続した結果、参加者も年々増加し、今では年間で約500人の方々にご来場いただいております。安価でありながら健康管理にあたって重要なメニューを総合的にパッケージ化することで、住民の年齢層や経済的な地位に即し

た実践的なメニューを専門家と協力して構築しています。住民の健康寿命を延ばすことで、間接的ではありますが医療費負担の削減、地域の治安向上にも一定の効果を出しています。またスポーツを通して日中の活動をすることで寝付きが良くなるなどの効果もあります。横浜市寿町健康福祉交流協会はY.S.C.C.と協働して、コラボ企画(自己啓発講座・HTプロジェクト)を実施し、寿地区における元気な町づくり、健康づくりを目指しています。これまでに、「食育・栄養」「咀嚼力・口腔衛生」「健康体操」など、楽しみながら学べる講座を行い、参加者の心と体の健康に役立っています。今後は「睡眠」「体の痛み予防」などの講座も加え、更に多くの方に喜ばれる講座を行っていく予定です。「Y.S.C.C.スタッフの管理栄養士から学んだ方法で料理を作り実践している。安くて簡単に栄養が取れるのでよい」「歯の磨き方など丁寧に教えてもらい、日々の歯磨きに役立っている」「Y.S.C.C.のスタッフから健康体操を教えてもらった。何度か参加し行くと楽になるので続けてほしい」「実用的な内容の講座でとても良い」などの声をいただき、講座を行う励みになっています。1986年の創立以後、「地域はファミリー！」のクラブ理念のもと、ホームタウンである横浜市中区を中心に様々な地域貢献活動を行ってきました。その歴史の中で徐々に拡大し、現在ではSDGsの17項目全てを網羅するまでになりました。『Y.S.C.C.元気プロジェクト』は全ての人に元気を与え続けることが目標です。いつの日かY.S.C.C.が地域のシンボルになるまで継続していきたいと思っております。



Y. S. C. C. 横浜



地域はファミリー Y.S.C.C.元気プロジェクト 2/2

活動場所

横浜市寿町健康福祉交流センター

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ

3

すべての人に
健康と福祉を



協働者

NPO、行政

協働者名

公益財団法人 横浜市寿町健康福祉交流協会





長期療養児自立支援活動「TEAMMATES」 1/2

Story 難病や慢性疾患等、長期療養を必要とするお子さんは全国約25万人います。医学の進歩により救命率の向上や入院期間の短縮化がされた一方、多くのお子さんが定期的な通院や治療を必要としながら、学校や地域社会の中で生活を送っています。国では年間約9億円をかけて、長期療養を必要とするお子さんへの自立できる支援をしていますが、こうしたお子さんが社会の中で多様な経験と交流を得て、自立できる機会がまだ十分とは言えません。体力の低下や外見の変化、友人との関係が希薄な状態の入院生活から、日常生活に戻る過程をはじめ、継続的に治療・療養を続けながら学校への復学やコミュニティの参加等、社会的な活動に参加する過程は、お子さんにとって大きなチャレンジです。当事業は入院を経て、退院後に復学する過程、および社会参加の促進と自立支援を目的とした支援をしています。スポーツチームへの入団を通じて、こどもたちとご家族の長い療養生活を支える存在（TEAMMATES）をコミュニティの中に増やす支援を目指しています。2019シーズン、Jリーグクラブ初の TEAMMATES事

業として、悪性リンパ腫で長期療養中の高田琥太郎選手の入団を受け入れ、約5ヶ月間チームの一員として練習・試合、サポーターとの活動を行って参りました。2020シーズンには、湘南ベルマーレに2人目のチームメイツとして、小児がんで長期療養中の橋本琉（はしもとるい）くんの入団を受け入れ、2021シーズンいっぱい、選手、チームスタッフ、サポーターとともにチームメイツ活動を行います。入団発表時にはサポーターの方々から歓迎する横断幕の掲出もいただき、クラブだけでなく、サポーターの方々からの歓迎もいただきました。後日、練習場に訪れ、実際にトレーニングする選手たちと交流し、共にピッチで笑顔溢れる時間を過ごすことができました。そして、このプロジェクトは昨年12月に亡くなった湘南ベルマーレフットサルクラブの久光重貴選手から紹介してもらった事業でもあります。久光選手の想いを繋ぐ意味でも、この活動を通して同じ病気で戦っている方々に勇気や元気を発信して、この地域が明るく元気になればと思っています。

活動詳細情報はこちら



<http://www.bellmare.co.jp/247998>



長期療養児自立支援活動「TEAMMATES」 2/2

活動場所

馬入ふれあい公園、スタジアム等

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

NPO

協働者名

特定非営利活動法人Being ALIVE Japan





一杯からはじめよう！脱・使い捨てAction 1/2

Story

SC相模原は、麻布大学をはじめとするクリーンパートナーズponsorらと共同で、2016年よりスタジアムでのカップ使用において、紙コップから繰り返し洗浄して使用できる『リユースカップ』への置き換えに取り組んできた。しかしながら、2020年。新型コロナウイルス感染症により、リユースカップの扱いにリスクが生じる為、紙コップ使用に戻らざるを得なくなる。「カップを回収・洗浄する人にコロナのリスクがあるならば、逆に、マイタンブラー製の呼びかけのチャンスなのではないか」麻布大学の学生が主体となり、マイタンブラー製の導入の提案がなされ、リモートでの会議を重ね準備が行われる。「どんなにいいことをしていても、興味を持ってもらえなければ、手に取ってもらえなければ、はじまらない」スタジアムで先行のPRをしファン・サポーターの声を聴き、デザインをし、人に手に取ってもらうための試行錯誤を学生が行った。リユースカップ使用の習慣は年々高まっていたものの、ファン・サポーターに対するクラブからの「意義・意図・取り組みの及ぼす効果」の周知は十分とは言えず、SC相模原は学生にその点のわかりやすいPRを盛り込むことを依頼する。学生たちは、SC相模原ホームゲームにてブースを出店しPRを実施した。森のタンブラーの実物展示とともに、ポスター展示とチラシを配布し活動を紹介した。相模原市総合政策部政策課 SDGs 推進室と協力し、SDGsのゴールを的にしたサッカーのキックターゲットも展開。子どもたちの心を掴み、多くのファン・サポーターの関心を得ることに成功した。「来場者のみんなが環境への意識が高いことを感じた。予想以上だった。これからも、森のタンブラーの普及活動に参加して、

環境問題への意識をより高めてもらえるよう活動していきたい」(学生)

「今回、自分でマイタンブラーに飲料を注ぎ、タンブラーを自分で洗浄するというスタイルを紹介し、SC相模原サポーターに、楽しみながら脱プラスチック、脱 使い捨ての大事さを体感してもらった。学生には、企画立案と実践を重ね、自分自身の自信と将来への可能性につなげてほしい」(麻布大学教員)

イベントのグッズを、スタジアムや会場から自宅や職場に持ち帰り日常使用をする機会が多い。しかし、イベント会場に再度それを持参し、スタジアムや会場で繰り返し使用するとう例は少ない。年間十数回あるサッカーのホームゲームとなると、どれくらいの効果になるだろうか。SC相模原ホームゲームのフードパーク説明会にて、相模原ケータリング協会の飲食出店者たちにSC相模原はこう説明した。「名前は“タンブラー”だが、これはコップじゃないんです。皆さんの商品と森タンを組み合わせるとしたらどうなるだろうか想像してほしい」SC相模原のスタジアムで森のタンブラーを手にする親子を見かけた。お父さんはなみなみ注がれたビールの入った森タンを手にし、子どもはいちごのシロップのかかったかき氷の入った森タンを手にしていた。「学生達の取り組みで興味を持った。

スポーツと食は密接で、そこから環境配慮への意識が芽生えたら良いと思います。」(SC相模原サポーター)

今後は、スタジアムや家庭・職場だけではなく、街のまつりや商店などへの波及も考えられる。飲食店やコーヒーストア、コンビニエンスストアなど、このカップの使用の可能性は広い。

そう、このプロジェクトは始まったばかりなのである。

活動詳細情報はこちら

https://www.azabu-u.ac.jp/topics/2020/1022_31827.html



一杯からはじめよう！脱・使い捨てAction 2/2

活動場所

相模原ギオンスタジアム

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ

12

つくる責任
つかう責任



14

海の豊かさを
守ろう



17

パートナーシップで
目標を達成しよう



協働者

企業、学校、行政

協働者名

麻布大学、アサヒビール株式会社、相模原市





社会課題解決型のヘルスケア事業 1/2

Story

これまでJリーグや行政を中心に協力を頂き実施してきた介護予防教室やジュニア層、アスリート層に向け実施している健康促進、健康維持、運動能力向上などの活動にクラブ所属のフィジカルコーチや地元介護予防サポートボランティア等の方々と連携した運動プログラムを実施。さらに効果の測定を行うため筋力測定・姿勢解析・健康調査アンケートなどを通じ結果を可視化することでプログラムの価値を表現し、県民のQOLの向上、その先には医療費削減のアウトカムを抽出しSIBの導入やヘルスケアデータの活用した事業展開を目指し活動しました。この事業の特徴的な部分として県内の複数市町村、クラブスポンサーと協働し行うことで市町村毎にカスタマイズしたプログラムを実施し、その地域のニーズに合ったヘルスケアサービスや健康増進の形を意識し取り組むことが出来ているという点が挙げられます。参加者からは、「歩く時、

筋肉の部位を意識するようになった」「大腿部～腰にかけての痛みが軽減した」などの意識の変化や痛みの改善が見られる一方、一番多かったのは「運動するキッカケになった」「新しい仲間が出来た」「ひきこもりの友達を連れて毎回参加できた」などの運動のキッカケづくりやコミュニティの構築にも一役かっていることが明確になりました。行政からも「市民が積極的に楽しくやっている姿が印象的で課を跨いだ取り組みとして、回数を増やすなどもっと多くの市民が参加してもらえるようにしたい」と次年度以降も継続していく意向を示して頂いております。今後の展望としては、より多くの県民が参加出来、効果を感じる事業として進めるべく、デジタル化を見据え大学発ベンチャー企業との連携で実証実験の場として活用して頂きながら関わる全ての人々がWIN-WINで健康になれる事業を目指していきます。

活動詳細情報は



https://www.ventforet.jp/news/press_release/519718



社会課題解決型のヘルスケア事業 2/2

活動場所

韮崎市・韮崎市営体育館、甲斐市・島上条公園、
笛吹市・石和清流公園、中央市・山梨大学医学部グラウンド、
山梨中銀スタジアム

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

企業、NPO、住民、学校、行政

協働者名

甲府市、笛吹市、中央市、韮崎市、(株)グローバルヘルス、
(株)Sportip、(株)はくばく、(株)クスリのサンロード、
NPO韮崎スポーツクラブ、(株)日本総合研究所





地域のみみんなを笑顔に！自立支援プロジェクト 1/2

Story

我々がホームタウン活動を行う際に軸にしている項目の1つに「地域に暮らすみんなを笑顔に」という項目があり、障がいや年齢に関わらず地域に暮らす誰もが心豊かな生活をしてほしいという想いで活動を行っています。

ここで連携している「医療法人 虹の村ひかり有徳会 虹の村診療所」は安曇野市の心療内科・精神科の診療所で、心の病や人生の困難で社会から「ひきこもる青年」に医療と教育の両面からその心に働きかけ、関わる人々が生涯に亘って自己を学ぶ治療共同体として診察やケアなどを行っています。虹の村診療所(以下、虹の村)との出会いは2019年に開催された、日本障がい者サッカー連盟主催の「9地域障がい者サッカー連携会議」でした。偶然なことにお互い、日本ソーシャルフットボール協会山梨県地域推進委員の方と知り合いで、「クラブとしても虹の村の皆さんの力になりたい」、「虹の村も山雅と何かしたい」、「ソーシャルフットボール協会山梨県地域推進委員担当としても、2者の協力で長野県の障がい者スポーツに発展があれば」という3者の想いが繋がりました。この出会いは虹の村と連携をしていく良いきっかけになりました。連携事業は4つです。1つ目は指導者派遣。虹の村の方から、ケアの一環で行っているフットサルワークに「プロスポーツチームの方から指導を受けたい」という要望がありました。

月1回、約2時間、楽しく身体を動かす運動や技術練習も行います。毎回参加者も増えており、「毎回楽しみにしている」「身体を動かすのが楽しい」と口コミで診療所内に活動が周知されています。

回数を重ねるごとに、休憩中に自らボールを蹴る姿などが見られ積極性も感じました。

この活動の延長で昨年のホームゲームでは虹の村の皆さんを招待し、スタジアム横の広場で各種出店ブースがある中でスポーツ教室と試合観戦を併せたイベントを実施しました。

参加者の皆さんは、普段あまり人混みが得意ではありませんが、誰一人不安な気持ちになることなく運動と観戦を楽しんでいました。引率者からは「大勢の人がいる中で活動ができた事はいい経験、楽しそうな姿が印象的だった」と感想もいただきました。

2つ目は「スマイル山雅農業プロジェクト」への協力。

4年目を迎える本プロジェクトは昨年、安曇野地域への拡大を目標に安曇野市に新しい畑をお借りしました。虹の村からも「自前の畑があるので農業

分野でも何か一緒に取り組みたい」と話を受け、「スマイル山雅農業プロジェクト」への協力をお願いしました。

枝豆収穫のタイミングでは、診療所のイベントとして「収穫祭&フットサル」を行い、収穫体験、収穫した枝豆を昼食の時間で食べて最後にフットサルを行い食事と運動の大切さを学んでもらうという狙いで実施しました。

また他の畑でも、地域の農家やサポーターなどと協力しながら大豆の栽培をしています。虹の村の方にも携わっていただき、様々な人との出会い、社会参加への「きっかけ作り」に繋がるような働きかけも行いました。収穫した大豆の選別・袋詰め作業もお願いしています。

3つ目は虹の村の関連法人、「NPO法人マイトリー虹」の運営する就労継続支援B型事業所「イーリス」との連携。ユニフォームのリメイク品を作ってもらい、ホームゲームで販売の検討や、イーリスの運営する喫茶「虹の村陶苑」では「あやみどり」を活用した商品開発や店内での提供も検討中です。

4つ目はホームゲームのボランティア活動参加。

毎試合、約100名のボランティアスタッフの協力で試合を運営しています。虹の村の方々は体調・体力面を考慮し、Beバモスという試合30分前まで活動するボランティアをお願いしています。

今は虹の村スタッフのみ参加ですが、2021シーズンは診療所の利用者の方も参加予定で新たな社会参加の機会を創出しています。

スポーツだけではなく様々な分野で関わりを持ち、多くの方が山雅に触れることで、新たな気づき、心豊かな感情や喜びを感じ、相互理解が社会参加へ繋がる1歩を踏み出すことができていると思います。

協働者の声として「診療所で心の成長に取り組む青年たちがフットサル、大豆栽培、ボランティア活動など大変楽しい活動を経験でき、コーチ達の働き掛けもあり、社会的ひきこもりから脱するチャンスを与えられたことに感謝します」。

その他の協働者・参加者の方からも「新たなコミュニティができた」「山雅を通して様々な体験ができた」というような声をいただいています。

ここで山雅に関わった方が、自らスタジアムに足を運ぶようなきっかけ作り、スポーツで元気になり笑顔があふれる地域を作るとともに、今後は本活動に支援いただけるように企業・行政などへのアプローチも行いたいと考えています。将来的にはソーシャルフットボールの普及まで広げる計画です。



地域の人々を笑顔に！ 自立支援プロジェクト 2/2

活動詳細情報は



<https://www.yamaga-fc.com/archives/228533>
<https://www.yamaga-fc.com/archives/220164>

<https://www.yamaga-fc.com/archives/221987>
<https://www.yamaga-fc.com/archives/210476>

活動場所

安曇野市穂高会館体育館、虹の村診療所、
安曇野市内の畑、サンプロアルウィン

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

企業、NPO、住民、学校、
行政、診療所、山雅後援会安曇野支部

協働者名

医療法人 虹の村ひかり有徳会 虹の村診療所、
山雅後援会安曇野支部、チームバモス、
日本ソーシャルフットボール協会





パルシェ 1/2

Story

長野県は、自然豊かな地域であり、寒暖差が大きい内陸的気候の土地である。その自然条件から、野菜、果物、きのこなどの栽培が大変盛んで、その販売品目は100種類以上にも及んでいます。AC長野パルセイロでは2020年7月より地域のパートナーの皆様と共に歩み、長野の魅力为全国に発信していきたいという想いから、ホームタウン周辺の農家の皆様と連携した、長野県産農産物の産直販売を公式オンラインショップにて「パルシェ」を開始。「ながのを贈ろう」を合言葉に無農薬・低農薬を中心とした新鮮な野菜や果物(加工品含む)をクラブのファン・サポーターのみならず県外にも新鮮な状態でお届けし長野県魅力を発信。地元の農家さんを周る中で無農薬・低農薬である為、販売ルートが限られる現状の中、クラブがプラットフォームとなり全国へ生産者の想いや商品を発信し知って、食べていただくきっかけの媒体となった。ここでの販売により、今まで関心が少なかった無農薬や有機野菜についての意識が高まってきたのではないかと農家さんの嬉しい声を聞くことができた。また珍しい野菜や果物はこれまではほとんどが首都圏への出荷の為、長野県産でありながら市

内のスーパーでは手に入ることは難しく、パルシェを通して購入できるようになったことは新たな発見でもあり意義を感じる。購入したファン・サポーターからも当初、野菜はどれも同じだろうと思っていたが、無農薬・低農薬野菜は美味しさが違う！と直に感じていただき地元の地産地消に繋がっている。担当者の願いはサポーターを始めとして全国のサッカーファンのみならず多くの方に長野の魅力に触れていただきたい！と熱い想いを持って活動中。長野の野菜や果物を通して多くの方に長野を知ってもらい、消費者から生産者へ就農の促し、そして、移住も含めた空き家対策にも繋げていきたい。また昨年は新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、外出や帰省を自粛し、アルバイトも困難な状況が続いた中で、親元を離れて頑張っている学生へ、それまでの自粛協力への感謝と、今後の生活への応援の気持ちを込めて長野市が地元の特産品等の詰め合わせをお届けする「学生応援パック給付事業」を実施。AC長野パルセイロもパルシェを応援パックのセットとして協力し地域のパートナーと連携し(行政×クラブ×農家)地元の魅力発信のみならず、農家の販売促進、そして、学生にエールを贈った。

活動詳細情報はこちら



<https://www.parceiro-shop.com/>



活動場所

長野県内外

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ

2 飢餓をゼロに 	11 住み続けられるまちづくりを 	12 つくる責任 つかう責任 	17 パートナリシップで目標を達成しよう
---------------------	-----------------------------	---------------------------	---------------------------------

協働者

ホームタウン農家、行政

協働者名

ホームタウン各農家、長野市

「長野市学生応援パック」お届けします!

長野市は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、市内中継ぎ一時滞在施設として、市民会館を改装し、県内外から避難してきた学生や職生にも贈りて感謝している学生や職生へ、今までの感謝の気持ちを込めて、これからの生活への応援の気持ちも込めて長野市特産品の詰め合わせをお届けする「学生応援パック贈付事業」を実施しています。

申し込み先 <https://nagano-ouen.jp> 10月30日まで!

応援パックの内容

【贈付セット】
 1. 干し芋 干し芋 干し芋
 2. 干し芋 干し芋 干し芋
 3. 干し芋 干し芋 干し芋
 4. 干し芋 干し芋 干し芋
 5. 干し芋 干し芋 干し芋
 6. 干し芋 干し芋 干し芋
 7. 干し芋 干し芋 干し芋
 8. 干し芋 干し芋 干し芋
 9. 干し芋 干し芋 干し芋
 10. 干し芋 干し芋 干し芋
 11. 干し芋 干し芋 干し芋
 12. 干し芋 干し芋 干し芋
 13. 干し芋 干し芋 干し芋
 14. 干し芋 干し芋 干し芋
 15. 干し芋 干し芋 干し芋
 16. 干し芋 干し芋 干し芋
 17. 干し芋 干し芋 干し芋
 18. 干し芋 干し芋 干し芋
 19. 干し芋 干し芋 干し芋
 20. 干し芋 干し芋 干し芋
 21. 干し芋 干し芋 干し芋
 22. 干し芋 干し芋 干し芋
 23. 干し芋 干し芋 干し芋
 24. 干し芋 干し芋 干し芋
 25. 干し芋 干し芋 干し芋
 26. 干し芋 干し芋 干し芋
 27. 干し芋 干し芋 干し芋
 28. 干し芋 干し芋 干し芋
 29. 干し芋 干し芋 干し芋
 30. 干し芋 干し芋 干し芋
 31. 干し芋 干し芋 干し芋
 32. 干し芋 干し芋 干し芋
 33. 干し芋 干し芋 干し芋
 34. 干し芋 干し芋 干し芋
 35. 干し芋 干し芋 干し芋
 36. 干し芋 干し芋 干し芋
 37. 干し芋 干し芋 干し芋
 38. 干し芋 干し芋 干し芋
 39. 干し芋 干し芋 干し芋
 40. 干し芋 干し芋 干し芋
 41. 干し芋 干し芋 干し芋
 42. 干し芋 干し芋 干し芋
 43. 干し芋 干し芋 干し芋
 44. 干し芋 干し芋 干し芋
 45. 干し芋 干し芋 干し芋
 46. 干し芋 干し芋 干し芋
 47. 干し芋 干し芋 干し芋
 48. 干し芋 干し芋 干し芋
 49. 干し芋 干し芋 干し芋
 50. 干し芋 干し芋 干し芋
 51. 干し芋 干し芋 干し芋
 52. 干し芋 干し芋 干し芋
 53. 干し芋 干し芋 干し芋
 54. 干し芋 干し芋 干し芋
 55. 干し芋 干し芋 干し芋
 56. 干し芋 干し芋 干し芋
 57. 干し芋 干し芋 干し芋
 58. 干し芋 干し芋 干し芋
 59. 干し芋 干し芋 干し芋
 60. 干し芋 干し芋 干し芋
 61. 干し芋 干し芋 干し芋
 62. 干し芋 干し芋 干し芋
 63. 干し芋 干し芋 干し芋
 64. 干し芋 干し芋 干し芋
 65. 干し芋 干し芋 干し芋
 66. 干し芋 干し芋 干し芋
 67. 干し芋 干し芋 干し芋
 68. 干し芋 干し芋 干し芋
 69. 干し芋 干し芋 干し芋
 70. 干し芋 干し芋 干し芋
 71. 干し芋 干し芋 干し芋
 72. 干し芋 干し芋 干し芋
 73. 干し芋 干し芋 干し芋
 74. 干し芋 干し芋 干し芋
 75. 干し芋 干し芋 干し芋
 76. 干し芋 干し芋 干し芋
 77. 干し芋 干し芋 干し芋
 78. 干し芋 干し芋 干し芋
 79. 干し芋 干し芋 干し芋
 80. 干し芋 干し芋 干し芋
 81. 干し芋 干し芋 干し芋
 82. 干し芋 干し芋 干し芋
 83. 干し芋 干し芋 干し芋
 84. 干し芋 干し芋 干し芋
 85. 干し芋 干し芋 干し芋
 86. 干し芋 干し芋 干し芋
 87. 干し芋 干し芋 干し芋
 88. 干し芋 干し芋 干し芋
 89. 干し芋 干し芋 干し芋
 90. 干し芋 干し芋 干し芋
 91. 干し芋 干し芋 干し芋
 92. 干し芋 干し芋 干し芋
 93. 干し芋 干し芋 干し芋
 94. 干し芋 干し芋 干し芋
 95. 干し芋 干し芋 干し芋
 96. 干し芋 干し芋 干し芋
 97. 干し芋 干し芋 干し芋
 98. 干し芋 干し芋 干し芋
 99. 干し芋 干し芋 干し芋
 100. 干し芋 干し芋 干し芋



長野を贈ろう

AC長野パルセイロならびに一般社団法人長野市農協株式会社では、ホームタウン周辺の農家の皆様と連携し、秋野菜、秋農産物を贈りました。秋、収穫の多い秋野菜や秋農産物に収穫した野菜、秋農産物パックを贈付いたします。

AC長野パルセイロ・公式オンラインショップ内で販売しています。ご家庭でももちろん、贈りて暮らすご家庭や仲間もたくさん、是非贈りて暮らすかへ贈ってみたいかがでしょうか。農家の皆さんの情熱の詰まった長野の秋力を是非ご賞味ください。

長野のサッカーチームから県内の農産物の魅力をキュッと詰めてお届けします!





守れ、ニイガタのいのち。自殺予防のための啓発活動 1/2

Story

新型コロナウイルスの影響によるリモートワーク期間中、「(2020年)4月の自殺者が前年同期比で大幅に減少」との報道がありました。多くの企業や学校などで自粛が続き、人と人が顔を合わせない日々が続いたことが影響したのではないかと、とも付け加えられていました。自殺者の減少は喜ばしい一方で、人間関係で悩むことがこんなにも多くの自殺の原因になっていることに衝撃を受けました。

アルビレックス新潟は、この問題を解決するために強くアプローチできるのではないかと、むしろ、もっとも力を発揮すべき場所なのではないかと、ひとつでも多くの命を救うことができるかもしれない。そう考えたことが、この活動のはじまりとなっています。

新潟県の自殺者数は、全国ワースト上位(人口10万人当たりの自殺死亡率: 2017年第6位、2018年第6位、2019年第4位)という危機的な状況が長く続いています。新潟県では、3月を自殺対策強化月間、9月を自殺対策推進月間として、自殺対策事業を集中的に実施しています。

担当部局である新潟県福祉保健部障害福祉課にご相談を差し上げたのは、2020年5月。新型コロナウイルスの影響で、心の不調を訴える方が増えていることにクラブとして課題感を感じていることをお話すると、ぜひ啓発活動と一緒に取り組みたいとお話をいただきました。打ち合わせの中で、キーワードとして出てきたのは「ゲートキーパー」。自殺の危険を示すサインに気づき、適切な対応(悩んでいる人に気づき、声をかけ、話を聞いて、必要な支援につなげ、見守る)を図ることができる人のことで、言わば「命の門番」とも位置付けられる人のことです(厚生労働省ホームページより)。ゲートキーパーを広く知っていただき、同じ想いを持った方を増やすことを目的に、クラブスタッフ・アカデミースタッフを対象とした研修会を企画しました。

当初は、集合研修を予定していましたが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、Zoomを用いたオンラインでの研修会として実施しました。担当いただいた新発田地域振興局健康福祉環境部の中村美穂子様が「リモートという形で、人に伝えることの難しさを痛感しました」と仰られた通り、オンラインでの

研修会は初めてのご経験。事前にご用意いただいたデータを通じて実態を学び、ゲートキーパーの4つの役割「気づき」「声かけ」「傾聴」「つなぎ」を知ることができました。会の結びには、「アルビレックス新潟の皆さんが心身ともに健康であることが、私たちにとっても、子どもたちにとっても良いメッセージとなります。特に、子どもたちにとっては、憧れや目指す大人のイメージなことがあります」とお話をいただきました。クラブを構成する一人一人が、身の周りの命から守っていく意識を持つことが、周囲にメッセージを発することにつながることを強く感じさせられました。今回の取り組みは、クラブだけでなく、サポーター、パートナー企業の皆様をはじめ、多くの方々にもご理解いただきたいと考え、クラブ公式YouTubeで公開しています。

2021年1月23日付けの新潟日報の紙面で、2020年の自殺者数が20,919人と2019年より750人増加(前年比3.7%増)になり、2009年以来、前年を上回ったことが報じられました。緊急事態宣言下の4、5月は減少していたものの、7月からは前年比で増加に転じていたとのこと。新潟県では、2019年よりも3人増えており、人口10万人当たりの自殺者数は20.2人で、全国ワースト6位だったと併せて報じられており、社会全体に与える影響を改めて痛感しています。アルビレックス新潟では、新潟県が自殺予防の醸成を図ることを目的として、自殺予防対策に積極的に取り組む企業・法人および団体を登録し、自殺予防対策推進宣言団体として周知する「いのちとこころの応援団」の一員として、3月に予定されている「新潟県自殺対策強化月間」に向けて、ゴールキーパーの3選手を起用したビジュアルの作成を進めています。ゴールキーパー(Goal Keeper)とゲートキーパー(Gate Keeper)には、頭文字が「GK」という共通点があること、周囲の変化に気づいて仲間に声をかける存在であること、そして「いのちを守る」「ゴールを守る」という意を込めています。

「守れ、ニイガタのいのち。」を合言葉に、新潟県にあるプロスポーツクラブとして、ひとつひとつの「いのち」を大切にクラブとして、今後もさまざまな活動に取り組んでまいります。



守れ、ニガタのいのち。自殺予防のための啓発活動 2/2

活動詳細情報はこちら



<https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/shougaifukushi/arubizisatuyobou.html>

<https://www.albirex.co.jp/news/59481/>

<https://www.albirex.co.jp/news/59522/>

<https://www.albirex.co.jp/news/59682/>

<https://www.youtube.com/watch?v=azjgdTgyOso&t=15s>

活動場所

新潟聖籠スポーツセンターアルビレッジ、
デンカビッグスワンスタジアム

カテゴリ(SDGs)／取り組みテーマ

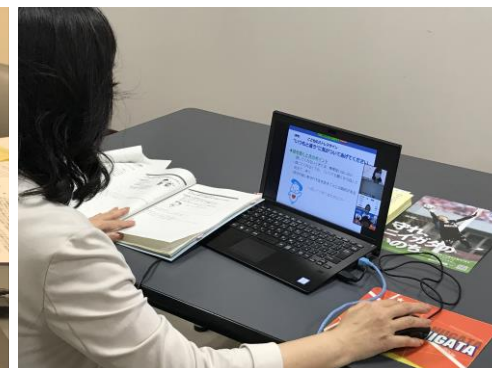
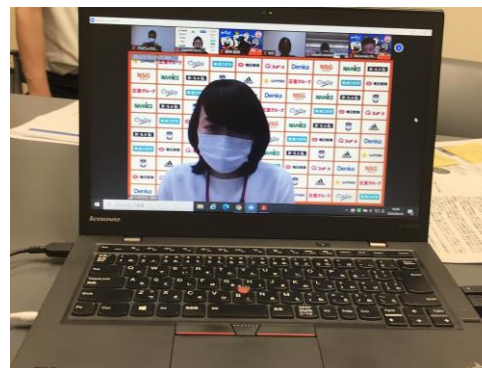


協働者

行政

協働者名

新潟県福祉保健部 障害福祉課 いのちとこころの支援室、
新発田地域振興局 健康福祉環境部 地域保健課、
聖籠町役場 保健福祉課





“カタラボ”スポーツで描くまちの未来をカタラボで語らおう 1/2

Story

カタレ富山ラボ“カタラボ”～スポーツで描くまちの未来をカタラボで語らおう～はカタレ富山を使ったまちづくりについて、参加者全員で楽しく考えて「シャレン！」となるアイデアを出し合う全4回のプログラム。「まちをよくしたい」そう思っても、どうアクションすればいいかわからない、本場の地域課題がわからないという人が多いと思います。富山市と協働し、様々な人々がそれぞれの強みを持ち寄り共に未来を創る場所としてカタラボを開催しました。

協働者 塩原拓さん(富山市職員)

企業経営者、公務員、大学生、IT技術者、アーティストなど、様々な背景を持つ参加者が立場を越えた対話を重ね、クラブのリソースを活用した「シャレン！」企画を生み出しました。さらに、カタラボ終了後もクラブと参加者が連携・協働し、企画の実現に向けて準備を進めています。理想のまちの未来を思い描き、そのために今すべきことは何か、自分には何ができるかということを実際に考え仲間と議論し、行動に移す人が現れた(意識が変わった)ことが一番の成果だと考えています。地域課題が多様化・複雑化し、行政だけでは解決できない課題も数多くある中で、今後もカタレ富山がハブとなり多様なステークホルダーを結び付け、クラブのリソースをフル活用したシャレン！を展開していくことにより、「まちづくり」や「暮らしの課題解決」を「自分ごと」として捉え行動する人が増えていくことを期待しています。

参加者 村上綾子さん

選手の皆さんがピッチを駆け回る姿を見て、社会課題に駆け回る方々の姿に重なりました。様々な立場の人が答えの無い間に向き合っていく現在、選手の皆さんの真摯なプレーの姿に、これからの社会をより良くしてゆく仲間としての頼もしさや力強さを感じています。2030年にはSDGsゴール達成ですが、これからも共に社会というピッチを駆け抜けたしたいと思います！

参加者 沖田諒さん(富山大学大学院)

普段は出会えないような地域の方々との立場を超えて語り合い、気持ちをぶつけ合うことは大学ではできない貴重な経験でした。大学での勉強や研究に打ち込みつつ積極的に地域に出て行き、自分たちの手で富山の未来を切り拓いていこう、という当事者意識がカタラボによって生まれました。

カタレ富山シャレン！担当

カタレ富山はプロサッカークラブであり多くの人はサッカー競技面の意識が強いと思います。それだけではなく、カタレ富山は富山をよくするひとつのツール、富山を愛する仲間の一員だということを知っていただく機会になりました。

まちを想う仲間の輪が広がるのが豊かな地域づくりに繋がっていくと思います。

第1回Jリーグとカタレ富山の社会活動について知ろう！

○インスピレーショントーク 公益社団法人日本プロサッカーリーグ 社会連携本部 部長 鈴木 順氏 (シャレン！とは、シャレン！の効果やポイントなど)

○カタレ富山の事例紹介「病院ビューイング」協働者 富山市民病院 山野 潤先生

○グループディスカッション

第2回スタジアムで語らおう！

○インスピレーショントーク 富山大学人間発達科学部 地域スポーツコース 准教授 神野 賢治 氏 (スポーツとまちづくりの関係性や価値、スタジアムを活用したシャレン！事例など)

○フィールドワーク スタジアム周辺を散策し運営やリソースなどを観察

○試合観戦 (J3リーグ第23節vs. Y.S.C.C横浜)

○個人ワーク ワークシートの作成 (スタジアムを活用したシャレン！のアイデア)

第3回理想のまちについて語らおう！

○インスピレーショントーク 富山大学人間発達科学部 地域スポーツコース 准教授 神野 賢治 氏 (スポーツによるまちづくりの時代背景、日常生活でのスポーツ活用事例など)

○個人ワーク スケッチシート「まちの理想の風景を考えよう！」

○マグネットテーブル スケッチシートを見せ合い、共感した人同士でグループを形成

○グループワーク マグネットテーブルにより組成されたチームでシャレン！のアイデアを検討

第4回まちづくりのアイデアを考えよう！

○インスピレーショントーク 米田公認会計士事務所 代表(Jリーグ前理事)米田 恵美 氏 (シャレン！の立ち上げについて、シャレン！で実現したいこと、アイデアをカタチにするために大切なことなど)

○シャレン！企画発表 チーム名/企画名①With カタレ/子どもえがおプロジェクト②チームガヤ/新歓スタジアム③カタレシェアクラブ/探検！裏カタレ④BASE/未来の『笑顔』を守るBASE(基礎)を作る

*スピンオフ企画

○カタレを知ろう (選手の地域貢献に対する想いやクラブについて知りたいことを聞く会)

ゲスト:佐々木陽次選手、高橋駿太選手、佐々木一輝選手、稲葉修士選手、椎名伸志選手

○企画相談会 企画づくりにフロントスタッフや事務局がアドバイス

“カタラボ”スポーツで描くまちの未来をカタラボで語らおう 2/2

活動詳細情報はこちら



<https://www.kataller.co.jp/all/press-release/%E3%82%AB%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%83%AC%E5%AF%8C%E5%B1%B1%E3%83%A9%E3%83%9C%E3%82%AB%E3%82%BF%E3%83%A9%E3%83%9C-%EF%BD%9E%E3%82%B9%E3%83%9D%E3%83%BC%E3%83%84%E3%81%A7%E6%8F%8F%E3%81%8F/>

活動場所

Sketch Lab(スケッチラボ)、
富山県総合運動公園陸上競技場

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

行政、NPO、住民

協働者名

富山市、とやま未来共創チーム、住民





子どもの未来を応援する活動 1/2

Story

11/1(日)北九州戦にて、金沢星稜大学地域スポーツマネジメント研究室との共同事業として、「子どもの未来を応援する活動」を実施しました。

■本活動の背景および趣旨

2020年4月、「コロナ禍でフードバンクへの食料需要が急増し在庫が急減している」との記事を読み、クラブとしてできることを考えた結果、クラブグッズの「ゲンゾイヤーカーレー(レトルトカレー)」をNPO法人いしかわフードバンク・ネットへ100個寄贈しました。その後、トップチームの廣井選手からも、クラブの寄贈活動を受けて「子ども達のためにできることをしたい！」との相談があり、趣旨に賛同した選手有志達(以後、フードバンカーズ)でお金を出し合い、パートナー企業から店頭で陳列できなくなった食料品を購入してフードバンクに寄贈する、という活動を毎月実施することとなりました(同年7月より継続)。本活動は、こうして広がった支援の輪をさらに広げたいという想いと、貧困問題等子どもたちをとりまく環境についてサポーターの皆さんの理解を深め、その未来について考えてもらいたい、という想いから、金沢星稜大学地域スポーツマネジメント研究室と共同で企画・立案する運びとなりました。

■実施企画

①ひとり親家庭を対象とした試合観戦ツアー開催

スタジアムでのサッカー観戦を楽しんでもらいたい！という想いから、10家族30名程度のひとり親家庭の皆様を観戦にご招待。試合前には、ピッチ上にて星稜大生とお子さん達でのスポーツ教室を開催。また、スタグルで使用できる飲食割引券と応援グッズ、フードバンカーズのサイン色紙をプレゼントしました。

②フードドライブ窓口の設置

クラブとして初めて、ホームゲーム会場にフードドライブ窓口を設置。事前にクラブ公式SNSにて食品寄贈の呼びかけを行ったところ、当日は162.2kg(小型バン1台分)もの飲食料品の寄贈がありました。

③「子どもの未来を応援する活動」啓発ブース出展

子ども達を取り巻く環境(貧困問題等)や、それに対しての金沢市の取り組み、子どもたちの居場所としての「子ども食堂」を紹介。本ブースに展示した「子ども食堂」「フードバンク」に関しての説明資料は、関係者へのインタビューをもとに金沢星稜大生が手作りで作成しました。また、ブースに立ち寄った方には子ども食堂に関する意識調査(認知度やイメージなど)も実施しました。

■協働者の役割

ツエーゲン金沢:企画、場の提供、情報発信
金沢星稜大学:各ブース・イベントの準備・運営
フードバンカーズ:フードドライブ告知協力、飲食券&グッズ購入等の費用負担
石川県および金沢市母子寡婦福祉連合会:ひとり親世帯への情報発信
NPO法人いしかわフードバンク・ネット:フードドライブブース運営
金沢市子育て支援課:啓発ブース運営協力
かなざわっ子niconico倶楽部(子ども食堂):企画への助言、啓発ブース運営協力
■本企画を実施するうえでの苦労
企画立案前に学生メンバーと一緒に、いしかわフードバンク・ネット、金沢市子育て支援課、かなざわっ子niconico倶楽部に事前インタビューを実施。その結果、主催者である自分達が本活動の意義を十分理解できたと思います。また、どんな企画であれどひとり親世帯の皆さんが参加しやすいか、理解を深めて企画に反映させることができました。

■参加者の声

- ・試合前にお兄さん達と一緒に遊べて楽しかった(お子さん)
- ・家に帰ってからも話が尽きず本当に楽しい一日だった(保護者)
- ・食料品を寄贈したい気持ちはあったが、常設フードドライブに行くハードルが高かったので…やっと協力できて嬉しい！(サポーター)

■協働者の声

- ・子供たちの笑顔を見ることができてよかった。継続的なイベントになってほしい(金沢星稜大学)
- ・一会場集まった食料品として、これまでと比較にならない量を寄贈いただけて本当に嬉しい(いしかわフードバンク・ネット)
- ・ブースに立ち寄ったサポーターが多く、クラブの発信力の強さを感じた(金沢市子育て支援課)
- ・フードバンクや子ども食堂の認知度向上につながった(子ども食堂)

■活動後の変化と今後

昨年4月の記事をきっかけとした一連の活動を通じて、子どもの貧困問題やフードバンク・ドライブに対しての関心を高めることには貢献できたと思っています。フードドライブへの寄贈量の多さが、関心度の高さを物語っていますし、サポーターからも「試合会場で定期的にフードドライブを開催してほしい」との声をもらいました。今後はこの活動を継続するだけでなく、子どもの貧困問題を起因とする他の地域課題に対しても、地域の皆さんと一緒に取り組んでいきたいです。



子どもの未来を応援する活動 2/2

活動詳細情報は



<http://www.zweigen-kanazawa.jp/news/p4135.html>

活動場所

石川県西部緑地公園陸上競技場

カテゴリー(SDGs)/取り組みテーマ



協働者

NPO、学校、行政

協働者名

金沢星稜大学スポーツ学科地域スポーツマネジメント研究室、
 石川県母子寡婦福祉連合会、金沢市母子寡婦福祉連合会
 NPO法人いしかわフードバンク・ネット、
 金沢市子ども未来部子育て支援課、
 かなざわっ子niconico倶楽部





静岡市シェアサイクル事業 PULCLE(パルクル) 1/2

Story

Jクラブ初、クラブ公認シェアサイクルPULCLEで街を元気に！街中にオレンジがあふれる「エスパルスのある街しずおか」へ。～自転車を活用し地域へ貢献！～ 2020年3月、静岡市は自転車に適した地域特性を活かし、より多くの市民が安全で快適に自転車を利用できるよう「静岡市自転車活用推進計画」を策定し、新たな都市交通システムとしてシェアサイクル事業を官民連携で実施することを検討していました。そんな中クラブへ『ブランド協力』の話が舞い込みました。運営主体のTOKAIケーブルネットワークより「広告費はいらないので宣伝協力してほしい。市民の認知度が高いパルちゃんを使ったロゴやネーミングで、一緒に地域を盛り上げたい！」とシェアサイクル事業協力による地域貢献、街のオレンジ化への波及効果について提案がありました。エスパルスのクラブハウスや練習場、富士山世界文化遺産構成資産 三保松原がある三保地区は、清水駅からのアクセスの悪さが課題。シェアサイクルを利用すればもっと交流人口が増えるのではないかと、街中にパルちゃんロゴの自転車が走っている光景を想像するとワクワクする、まさに街のオレンジ化につながるのではないかと！自転車そのものがエコであり、自転車を利用することは温室効果ガス削減、健康増進や地域活性化にも有効であるため、スポーツの力で地域課題解決とSDGs達成に取り組む中でその効果に期待し「COOL CHOICE啓発活動」の一環として事業への協力を決定し、エスパルスの‘PULSE’と自転車の‘CYCLE’を組み合わせた名称『PULCLE(パルクル)』、自転車に乗ったパルちゃんをロゴマークとした新たなサービスが誕生しました。～コロナ禍における新たな日常の足へ～ 本事業のリリースは2020年6月。日本中が緊急事態宣言に揺れ、新たな生活様式と向き合う最中でした。コロナ禍において、ソーシャルディスタンスに配慮した交通手段として注目を集め、運動不足解消も担い、Jクラブ初の公認シェアサイクルという話題性もあり多くのメディアに取り上げられました。半年間で当初の39ステーション/自転車94台から、2021年1月現在84ステーション/270台にまで事業は拡大。クラブのサポーターからも「通勤で利用している」「ちょっと出掛けるのに車より便利」「自転車だと車では気付かなかったお店を見つけられる」といった声が聞か

れ、利用者の約77%が30分以下の短時間利用といった「市民の日常利用」のニーズを満たすサービスとして広がっています。～共創で目指す持続可能なまちづくり～ ステーション用地の一部は、事業に賛同した地元企業より無償協力いただいています。また日々の清掃・日常保守作業をNPO法人に依頼し市内4つの障がい福祉事業所が担当するなど、地域を挙げたパートナーシップで運営しています。2020年10月には静岡サレジオ高校 草薙フューチャーセンターと産学官連携をスタート。山田邦彦先生は「生徒は社会との深い繋がりの中で、PULCLEを活用した街づくりに意欲的に取り組んでいます。」と話し、新規利用者獲得やSNS活用等、「PULCLEの利用促進と草薙の活性化」をテーマに活動を行っています。～地域と共にPULCLEで広がる未来～ 2023年までにはステーション300ヶ所、自転車600台の展開を目指しています。PULCLEを使用した交通安全動画作成、観光ツアーや健康プログラム、お試し移住者への提供や空き家対策など、様々な事業発展を検討中です。また、PULCLEに搭載されたGPS走行データを分析すれば、例えば静岡市では自転車専用道路の改良や避難経路の設定、クラブは効果的な広告露出やスタジアムアクセスの検討等への汎用も可能です。社会のためにエスパルスを‘つかって’いただき誕生したPULCLE。「静岡市民に親しみのあるエスパルスカラーを採用することで、事業認知度を上げることができたと感じています。PULCLEはエスパルスの目標像と同様に、“市民が作り育て地域の発展”に貢献していく新たな移動手段となることを目指しています。共に静岡の街を盛り上げましょう！（静岡市交通政策課 市川志乃様）」、「今回、静岡市シェアサイクル事業PULCLEにおけるエスパルスとの協働は、単純なネーミング協力に留まらず当初の想定を超えて様々な分野へと拡がりを見せています。『日常にエスパルスがある街の風景』をより推進していきたいと思います！（TOKAIケーブルネットワーク営業企画部 部長 山内崇資様）」と協働者の皆様からも嬉しいお声をいただいています。PULCLEをきっかけにエスパルスが地域の日常に更に浸透し『この街にエスパルスがあってよかった』とっていただけるよう、今後もチームPULCLEで地域に貢献してまいります。

静岡市シェアサイクル事業 PULCLE(パルクル) 2/2

活動詳細情報はこちら



https://www.s-pulse.co.jp/csr/eco_cool_choice
<https://bit.ly/2Mucv8Z>

<https://pulcle.hellocycling.jp/>

<https://www.shizuoka-cyclecity.jp/planning/>

https://www.shizuokabank.co.jp/pdf.php/4289/200930_NR1.pdf

<https://www.facebook.com/kusanagifc/>

https://www.city.shizuoka.lg.jp/445_000122.html

<https://www.s-pulse.co.jp/news/detail/44805>

<https://shizuoka.rokin.or.jp/news/details/20200702.html>

<https://bit.ly/3j3SvGr>

活動場所

静岡市内ステーション84ヶ所(公共施設・公園、商業施設、金融機関等)、
静岡サレジオ高等学校

カテゴリ(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

企業、NPO、住民、学校、行政

協働者名

静岡市、株式会社TOKAIケーブルネットワーク、
株式会社トコちゃんねる静岡、OpenStreet株式会社、
ステーション設置協力企業
(ヨシコン株式会社、株式会社静岡銀行、静岡県労働金庫、
株式会社タカラ・エムシー、静岡ガス株式会社、鈴与株式会社等)、
NPO法人 オールしずおかベストコミュニティ、
静岡サレジオ高等学校、machi machi(まちまち)

補足(写真説明)

1 オレンジののぼり旗がはためくPULCLEステーション(静岡駅北口駅前広場) 2 パルちゃんをはじめCOOLCHOICE、エスパルスSDGsロゴを採用したクラブカラーの自転車デザイン
3 オープニングセレモニーの様子(左からパルちゃん、(株)エスパルス 山室晋也 代表取締役社長、静岡市 田辺信宏 市長、(株)TOKAIホールディングス 嶋田勝彦 代表取締役社長(CEO))
4 静岡市・TOKAIケーブルネットワーク・エスパルスの担当者も授業に参加する草薙フューチャーセンターの様子





ハザードマップの周知【ソナエル東海】

Story 東海6クラブによるシャレン活動(東海シャレン=ソナエル東海)が生まれた事で「地震」における「備え」に対し磐田市と一緒に向き合えるきっかけとなりました。「備える」に対し行政が市民に望む事のひとつが「ハザードマップの周知」でした。ホームページ内にハザードマップ自体は存在しているが、もっと知っていただくための手段として、身近にあるモノを活用し、現代に合わせた周知方法としてデジタル化を考えています。世の中ではスマホが普及し、近い将来子供たちにタブレット端末が普及すると言われています。まだまだ絵空事の段階ではありますが、電信柱などにQRコードを貼り付け、スマホやタブレット端末をかざす事でAR(拡張現実)による情報が起動し避難経路案内、浸水等、今いる場所の情報が得られるようにしたいと考えています。

活動詳細情報はこちら



<https://www.jleague.jp/sharen/news/545/>

活動場所

磐田市全体

カテゴリ(SDGs)／取り組みテーマ

9 産業と技術革新の基盤をつくろう	11 住み続けられるまちづくりを	13 気候変動に具体的な対策を	17 パートナーシップで目標を達成しよう
-----------------------------	----------------------------	---------------------------	--------------------------------

協働者

企業、住民、学校、行政

協働者名

磐田市【予定】愛知大学地域貢献部、地域企業、中部電力、磐田市内小学校



福祉支援プロジェクト2020

Story

Jリーグが開幕25周年を迎えた2018年に「Jリーグをつかおう！」を発信。以降、藤枝MYFCは地域に根差したホームタウン活動への質向上を目指して来ました。そのひとつとして、2020シーズンスタートした活動がこの福祉支援プロジェクトです。スタートのきっかけは、既に行政・NPOと協働にて実施されていた川崎フロンターレさんの取り組みを知ったからです。地域課題の解決に向け思いを共有できる仲間とともに、一年間の準備期間を経て実現。行政とパートナー企業様に支えられスタートした活動は、回を重ねるにつれて地元大学や学生ボランティアさんにも参加いただけるまでになりました。活動に参加いただいた事業所様からは、これまでお給料が上手に使えなかった利用者さんが、プライベートでチケットを購入し観戦に行っているようで嬉しい！ご家族の方もその姿に喜んで！といった声が上がっていると聞きました。行政、参加事業所様、パートナー企業様からも継続の要望をいただき、2021シーズンは活動の継続はもちろん、皆様のさらなる活躍の場を創出できるようチャレンジしてまいります。

活動詳細情報はこちら



<https://myfc.co.jp/blogs/20200715/1109970/>

<https://myfc.co.jp/blogs/20201212/1112995/>

活動場所

藤枝総合運動公園サッカー場

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

企業、学校、福祉事業所

協働者名

株式会社マルフク、有限会社ロード・ワン、ダイソー水産株式会社、杉村精工株式会社、クボタ環境サービス株式会社、明治安田生命保険相互会社静岡支社、焼津市健康福祉部、焼津市内就労継続支援事業所、静岡福祉大学





全力防災隊

Story

【全力防災隊とは】災害に備えた防災のスペシャリストを育成します。第1回講座では、25名の全力防災隊員にご参加頂きました。宮城県仙台市出身の菅井拓也選手に震災の体験談を話していただいたり、沼津市危機管理課より「自分と自分の身近な人を守る方法」についてクイズ形式の講座を行いました。第2回、第3回の講習では、スルガ銀行、日本赤十字支部の皆さんにもご協力いただき、防災対策やAED使用方法・心肺蘇生方法について学びました。同じ思い、気持ちを持った多くの人たちに参画していただき、この地域の為に力を貸していただけたいと思います。災害はすぐそこで起こっています。今後も全力防災隊では、資格を取ることが目的ではなく、“たのしく災害・防災について学ぶ”機会を設け、いざという時に使える知識・技能を習得していきます。

活動詳細情報は



<https://www.azul-claro.jp/information/51980/>

活動場所

【講義】愛鷹広域公園多目的競技場
 【実際の活動】静岡県東部地域

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ

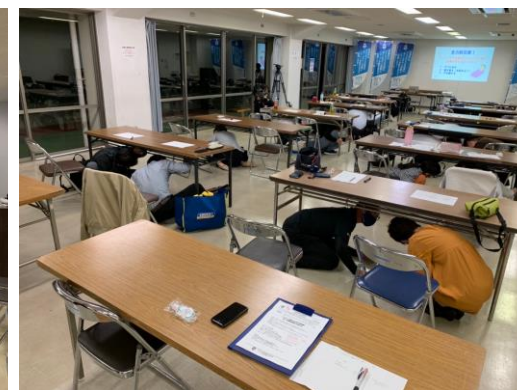


協働者

企業、行政

協働者名

沼津市危機管理課、スルガ銀行、日本赤十字社静岡県支部





大学生消防団×SNS「#防災キックオフチャレンジ」 1/2

Story

クラブのホームタウンである愛知県はいつ大きな地震が起きてもおかしくないとされています。また伊勢湾台風や東海豪雨等、歴史上水害に悩まされた地域でもあり、来る大きな災害への備えは大きな社会課題となっています。

実は名古屋市とクラブの象徴でもある「鯨」は防火の効があることから街を災害から守ると言われています。ホームタウンの社会課題であり、名古屋グランパスの「鯨」の役目を果たすため「防災」をテーマとした活動をクラブでは実施しています。

名古屋市には「大学生消防団」という組織があります。消防団というと地域の方々に参加されている組織をイメージしますが、名前の通り市内大学に通う大学生から構成される消防団です。

そんな大学生消防団の出会いは大学生からのお声かけでした。とあるイベントにクラブスタッフが参加したところ、「私は大学生消防団の団長です。ぜひグランパスと防災について連携したいです」とお話いただきました。その後、マスコットのグランパスくんが「消防団サポーター」となり、㈱HITOTOWAと連携したディフェンスアクション等、様々な連携活動を実施してきました。

しかし、2020年、検討していた企画はコロナウイルスの猛威により全て中止になりました。コロナ禍の中、「リアル」の活動は出来ないけど、こんな時こそ防災の啓発は止められない。そうした声大学生消防団から聞こえてきました。その想いに動かされ、いつ起きるか分からない災害への備えは重要であると信じ、ステイホームでアイデアを巡らせました。

オンラインでの打ち合わせが再開されたのが7月頃でした。議論を交わす中、「コロナ禍の中、緊急時に避難所だけでなく在宅で生活できるよう『在宅避難』をテーマにしよう」「SNSで備蓄品の重要性を発信したい。参加型で楽しく学ぶ企画にできないか」少しずつテーマが見えてきました。

大学生消防団では公式ツイッターの立ち上げなど準備を進めてくれました。そして、全国でディフェンスアクションを展開している㈱HITOTOWAと共に企画を練り、「#防災キックオフチャレンジ」が出来上がってきました。

そして、ついには防災月間でもある9月に「#防災キックオフチャレンジ」がスタートします。ルールはシンプルに、「ボールタッチ等しながら、各自で用意しておきたい備蓄品、避難時の持出品を答えていく」としました。オリジナル備蓄品リストも作成し、消防団サポーターのグランパスくんが先陣を切って、チャレンジしました。

グランパスくんを皮切りに、大学生消防団でも自宅や近くの公園で様々な方法での見本動画を作成しながら継続的に投稿をしていきました。

しかし、動画再生数は増えているものの、投稿は伸びていきません。より拡散されるよう名古屋市の河村市長や名古屋おもてなし武将隊の皆様等にも投稿いただきながら、少しずつ投稿は増えていきました。

募集期間も終わり、MIP賞等の発表、そして防災講座を行なう「防災オンラインアカデミー」にも多くの方に参加いただき「#防災キックオフチャレンジ」は終了しました。MIP賞の景品は防災リュック。景品が届くとSNSで「この機会に備蓄品を揃えよう」という嬉しい声もいただきました。

2020年、私達の社会は「新しい生活様式」で過ごすことが必要になり、改めてサッカーは安定した社会の上でこそ成り立つのだと実感しました。いつ大きな災害が来てもおかしくないとされている地域の中で、名古屋グランパスはこれからも様々な取り組みを通して、ホームタウンに貢献していきます。

【協働者の声】

○名古屋市大学生消防団 佐藤 綾

動画を作成する中、皆で協力して作り上げることができ楽しかったです。消防服が硬く見せてしまったかもしれませんが、より目についたかと思います。皆さんが備蓄品を確認するきっかけに繋がっていたら嬉しいです。

○名古屋市消防局 安藤 修平

SNS上での活動経験がない我々にとって、チャレンジングな取り組みでした。動画の作成など試行錯誤しましたが、今後もこのような取り組みは防災を広めるために非常に有効であると考えています。皆さんと協力して「命を守る、ための新しい一歩を踏み出したことを誇りに思います。

またこの企画を通して、庁内でもグランパスがこんなに接しやすいクラブだったんだという声もありました。今まではプロのクラブだから一緒に何かできる存在ではないというイメージでしたが、それが一気に変わりましたし、地域に根付いて活動していく姿勢がとても感じました！これからもよろしく願います！

○㈱HITOTOWA 津村翔士

参加いただいた方のSNS投稿の中に「家に備えてないものがいっぱいあった。備えなきゃ」と言うコメントが多く見られました。普段は防災を意識されていない方であっても、クラブと協働することで、こういった意識の広がりやアクションの背中押しになることが改めてわかり、とても意義深い取り組みだったと感じています。

活動詳細情報はこちら

<https://nagoya-grampus.jp/news/sdgs/2020/0919post-1566.php><https://colojapan.asia/report/online-defense-action.html>



大学生消防団×SNS「#防災キックオフチャレンジ」 2/2

活動場所

SNS

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

企業、行政、大学生消防団

協働者名

名古屋市大学生消防団、名古屋市消防団連合会、名古屋市消防局、(株)HITOTOWA





ソナエル東海:防災(自助)の大切さを感じよう！ 1/2

Story

2020年9月1日「防災の日」。この日、東海地区の6つのJクラブが中心となって“備えるを、たのしもう。”をコンセプトとした「ソナエル東海」が発足しました。6クラブで共通した活動はもちろん、それぞれのクラブでも防災に関連した活動を推進していこうということでスタートしました。FC岐阜は岐阜県内すべての地域がホームタウンになっていることもあり、まず岐阜県と連携した活動ができないかと考えました。岐阜県の防災を管轄する危機管理部危機管理政策課に活動の趣旨を相談したところ、とても興味を持っていただき、ぜひ一緒にやりましょう！というお返事をいただきました。ちょうど岐阜県では「災害から命を守る岐阜県民運動」を推進しようとしていたところであり、多くの方が集まるFC岐阜のホームゲームの日に防災啓発イベントを実施することとなりました。また、9月1日のソナエル東海発足のリリースをみたスポンサー企業様(名鉄協商株式会社)からも、防災キットの取り扱いがあることからオリジナルの防災キットを作りませんか？というご提案があり、FC岐阜のオリジナル商品を入れた防災キットも併せて販売することが決まりました。11月8日のホームゲーム開催日には、岐阜県が芝生広場で、3密回避などコロナ感染防止に

配慮した「コロナ対応仕様の避難所体験展示」や地震や風水害に掛かる基礎知識、災害から命を守るために必要な情報一式をまとめた「防災パネル展示」、防災備蓄品や県産品の当たる「お楽しみ抽選会」を実施しました。また、グッズ売店ではFC岐阜×ソナエル東海のオリジナル防災キットを販売し、ステージイベントではその防災キットの中身を紹介するコーナーなどを開催しました。さらにスタジアム内の大型ビジョンでは、FC岐阜の選手が登場して「LINE岐阜県公式防災アカウント」の登録を呼びかける動画などのCMが放映されました。スタジアムに来た方がいろいろな場面で防災に触れることで、防災に対する意識が高まったのではないかと思います。来場したサポーターの方からは「防災って大事だと改めて思った。」といった声が聞かれました。また、岐阜県の担当者からも「防災はとっつきにくい分野だけど、こうして多くの方が集まる場所でイベントができたことで、少しでも多くの人に体験してもらえて良かった。」と言っていただきました。防災は1回やって終わる活動ではないので、これからも引き続き定期的に連携して活動に取り組んでいきたいと思えます。

活動詳細情報はこちら



https://www.fc-gifu.com/news_game/64529.html



ソナエル東海:防災(自助)の大切さを感じよう！ 2/2

活動場所

岐阜メモリアルセンター

カテゴリー(SDGs)/取り組みテーマ



協働者

企業、行政

協働者名

岐阜県危機管理政策課、防災課、名鉄協商株式会社





GATE WAY大作戦 1/2

Story 2020年1月にオープンしたサンガスタジアム by KYOCERAは、京都府中部に位置する亀岡市に誕生した京都サンガF.C.の新しいホームスタジアムであると同時に、京都府中北部へのゲートウェイとしての機能も期待されています。

そこで、サンガでは、ホームゲームの開催に合わせた「スポーツツーリズム」の振興・発展を図るため、京都府内の観光地やグルメスポットを訪れ、魅力を紹介する「GATE WAY 大作戦」を実施しました。

本企画は、「海の京都」、「森の京都」、「お茶の京都」という3つのDMO(観光地域づくり法人)や、府内自治体、府内事業者の協力のもとに、サンガキャンパス隊(学生リポーター)が取材や体験をしたことをサンガタイムズ(フリーペーパー)の紙面において6月号から12月号までの7回にわたり情報発信するといった内容です。

各地の取材にあたっては、各DMOとの打ち合わせにより取材先を選定し、取材交渉や紙面の確認は各DMOに行っていただ

きました。これによりサンガの一方的な企画とせず、協働者それぞれが本気で魅力発信に取り組む企画とすることができました。

紹介した取材先からは、サンガタイムズを読んで知ったというサンガサポーターが訪れてくれたという声も聞かれ、この企画をきっかけにサンガに興味を持って下さる事業者や、パートナー契約を結んで下さる事業者もありました。

サップ体験、パワースポットめぐりなど、様々な取材や体験をしたキャンパス隊は毎回、体験記を寄稿し、読者に伝わりやすい素朴な感想で、幅広い世代に向け、魅力を発信してくれました。

新型コロナウイルス感染症の流行により、観光客が減少し、各地の経済が冷え込む今、京都府の魅力を伝えることがクラブの使命と考え、アフターコロナの時代が訪れた際には、サンガのファン・サポーターだけではなく、多くのアウェイサポーターが各地を訪れることができるよう、クラブのホームページやSNSなどを通じて情報発信に努めてまいります。

活動詳細情報はこちら



<https://www.sanga-fc.jp/freepaper/2020/>

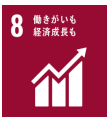


GATE WAY大作戦 2/2

活動場所

京都府内の観光地・名所等

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

企業、NPO、行政

協働者名

海の京都DMO、お茶の京都DMO、森の京都DMO、
訪問先自治体、訪問先事業者

補足

今回の企画実施にあたり、
取材先では新型コロナウイルス感染症の感染防止対策を行い実施しました。



「ホームで勝とう～ガンバとともに～」

Story

ガンバ大阪では新型コロナウイルスの影響で、超厳戒態勢下でのサッカー観戦が続く中、新型コロナウイルスに負けない！という思いを込めた限定ユニフォームシャツを、ファン・サポーター・パートナー企業の皆さまからのご協力のもと作成させていただきました。

その活動の一環として、現在も最前線で活躍頂いている医療従事者の方々に、感謝の気持ちをもって「応援」「勇気」「元気」づけができればと思い、ホームタウン北摂7市内にある医師会等を通じて医療施設へ寄贈させて頂きました。一日でも早く、新型コロナウイルスが終息し、少しでも市民の皆さまに安心・安全な世の中になることを願っております。

★贈呈先

吹田市医師会/茨木市医師会/高槻市医師会/豊中市医師会/摂津市医師会/市立池田病院/箕面市医師会/国立循環器病研究センター/大阪大学医学部附属病院

★贈呈数

約4000着

活動詳細情報はこちら



<https://www.gamba-osaka.net/news/index/c/6/no/11898/>

活動場所

ホームタウン活動7市 各市医師会、
大阪大学医学部附属病院、国立循環器病センター

カテゴリ（SDGs）／取り組みテーマ

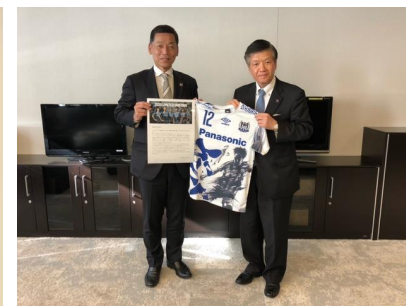


協働者

企業、行政、サポーター
(一般顧客からもユニフォーム製作に係る費用を負担頂いております)

協働者名

パナソニック株式会社、ロート製薬株式会社、株式会社ダイセル、
シップヘルスケアホールディングス株式会社、大建工業株式会社、
ぴあ株式会社、EXPOCITY、北おおさか信用金庫、紀陽除虫菊(株)、
HATTRICK





セレッソ交通安全ランドセルカバー 1/2

Story

セレッソ大阪では、毎年、大阪市内のすべての小学1年生に対し、入学のお祝いとして、光反射材付のオリジナルランドセルカバーを贈呈しています。初年度である2018年度はスタジアムのある東住吉区内の小学1年生約1500人にのみ配布しましたが、2019年度以降は大阪市内すべての小学校(約280校)に入学した小学1年生約2万2千人を対象に実施しています。この取り組みは、大阪府警察本部交通総務課との打ち合わせの席から始まりました。同課とは、小学校での交通安全教室(自転車の乗り方指導等)にマスコットを派遣するなど、以前から取り組みを続けておりましたが、その打ち合わせの際に、①小学生、中でも4月から1人で登下校を始めた小学1年生の通学時の事故が多いこと、②登下校の慣れが見え始める5月・6月に交通事故に遭う割合が多くなっていること、③大阪府の小学生の交通事故数が他県と比較して多いことなどを伺いました。そこで、入学する新一年生に交通安全ランドセルカバーを配布するというアイデアをお話したところ、可能であればぜひ実施したいとの話になりました。まずはセレッソ大阪のスタジアムのある大阪市東住吉区内の小学校で実施することを検討。区の担当者および東住吉警察署にも相談し、東住吉警察署、大阪府警察本部交通総務課と共に話を進めることになりました。課題となったのが、予算面でした。当初は、クラブの持ち出しを考えておりましたが、セレッソ大阪のスポンサーの中に、100円均一商品の企画・製造を行っている株式会社モリトク様があり、そこに製作を依頼できないかというご相談を持ち込んだところ、子どもたちの交通安全に関わることであればと、費用も含め「うちで製作してもいいね」と協賛をいただくことができました。配布は各小学校に人数分を納品する形でしたが、スポンサー様へのメリットも考慮して、4月に行われたホームゲームに新一年生を招待し、その代表の子どもたちに観客の前で贈呈式を行いました。贈呈式には、東住吉警察署長、東住吉区長、セレッソ大阪社長が参加。地元東住吉高校のダンス部のパフォーマンスを交えて華やかさを演出しました。翌2019年度は、この取り組みを大阪市内の全小学校に広げました。2018年度の取り組みをスポンサー企業であるモリトク様に報告したところ、非常に喜んでいただきました。

その際に、雑談として「セレッソ大阪としては、いずれは大阪市内の全小学生に配布するのが夢」とお伝えしたところ、「来年やりましょう」と即答。大阪市内の小学校約280校、およそ2万人の新1年生全員に配布することが決まりました。初年度の配布数は約1500。これが2万となり課題となったのが、配布の方法でした。初年度は10数校だったため、ホームタウングループの担当者が各学校へ持参しましたが、280校となるとそうはいきません。大阪市教育委員会との協議で、学校ごとに仕分けをして流通センターに納品することで、各学校に配布していただけることとなりました。このことを、モリトク様に報告すると、仕分けに関しても社員の方がボランティアで行っていただけるのお話をいただきました。そこで、モリトク様から流通センターまでの運送に関して、長年セレッソ大阪のスポンサーである株式会社樋口物流サービス様にご相談したところ、こちらも無償でご協力いただけることになりました。こうして無事、大阪市内の新小学1年生全員の手元にセレッソ大阪のマスコットをあしらったオリジナルランドセルカバーをお届けできることになりました。配付の際には、入学のお祝いとしてホームゲームへの親子ペアご招待をご案内するお手紙を同封。約2万人の配付に対し、1500組以上の応募がありました。また、大阪府警察本部と連携し、スタジアムに近い長居小学校で、交通安全授業を実施。児童の登下校時の交通安全意識を高める講座の後、マスコットも参加して下校時の見守り活動を行いました。この様子は、地元テレビ局にも取り上げられ、ご協力いただいたスポンサー企業様にも良い報告ができました。続く2020年度も、コロナ禍での配布時期の遅れやイベントの中止などはありましたが、無事に配布。ご協賛いただいたモリトク様からは「毎年、子どもたちにランドセルカバーを配布し、いずれは1年生から6年生まで全員がこのランドセルカバーを使ってくれるのが楽しみ」などと言っています。この取り組みは、地元警察や区担当者、教育委員会などとのコミュニケーションを密に行ってきたこと、その上でスポンサーである地元企業から活動への理解をスムーズに得られたことが成功の要因だと考えています。子どもたちの笑顔のために協力していただける方々の多さに感謝しつつ、継続した取り組みにできるよう、これからも尽力していきます。

活動詳細情報は



<https://www.cerezo.jp/news/2020-06-29-15-00/>



セレッソ交通安全ランドセルカバー 2/2

活動場所

大阪市立小学校全校

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

企業、学校、行政

協働者名

株式会社モリトク、大阪府警察本部交通部、
大阪市教育委員会





ノエスタ思い出プロジェクト

Story 2020年、新型コロナウイルスの影響で、行事の中止や延期が相次ぐ中、「思い出づくり」を手助けしようとスタジアムを活用した貢献活動を企画しました。5～6月にジャンルを問わず、とにかくスタジアムでやりたいことを募り、総数284件の応募がありました。その中からJリーグなどのスケジュールの合間を使って7案件のご依頼を採用。サッカーが大好きなお子さんがかかってしまった病気をノエスタのピッチの真ん中でスクールコーチが励ます企画や、コロナ禍ですべての学校行事が中止となった小・中・高それぞれが運動会や文化祭に変わる学校行事を普段選手たちが活躍するピッチで実施。また、夏の総体が中止になったため卒業する先輩たち(3年生)に記念試合を実施したりと、コロナ禍の2020年を少しでも多くの人が笑顔で終わられるような「思い出づくり」のお手伝い企画をすべて無償で実施させていただきました。

活動詳細情報は



<https://www.vissel-kobe.co.jp/news/article/17427.html>

https://www.youtube.com/watch?v=i0_M0tPnAwM

<https://www.kobe-np.co.jp/news/souguou/202010/0013752170.shtml>

活動場所

ノエビアスタジアム神戸

カテゴリ(SDGs)／取り組みテーマ

教育現場のサポートおよび地域連携・社会貢献活動

協働者

学校、行政、地域の皆様

協働者名

神戸市、スタジアム近隣自治体、神戸市立駒ヶ林中学校、神戸市立吉田中学校、兵庫県立兵庫工業高校、他(非公表団体)





地域のガキ大将づくり『復活！公園遊び』 1/2

Story

18年続く『復活！公園遊び』
ガイナレ鳥取に加入した鳥取県出身の坂本選手。

「ぼく小学生の頃、鶴見さん(当時選手でいまはフロントスタッフとして勤務)に『復活！公園遊び』に来てもらいましたよ。」と話す。加入後は自らがまちにでて『復活！公園遊び』をしています。そして、こどもを連れてきた保護者が「わたしが子どもの頃、塚野社長に遊んでもらったんですよ」と声をかけてくれる。この活動を始めて18年が経ち地域でこんな会話を聞く機会が増えてきました。

『復活！公園遊び』とは

『復活！公園遊び』とは「鬼ごっこ・ろくむし・だるまさんが転んだ・中当て・めんこ」など昔懐かしい遊びから体を使った遊びまで様々な遊びを通じて、子どもたちの心身の健全な育成に目的にした活動です。「いつ来てもいつ帰っても良い」「誰が来ても仲間に入れる」「準備いらず片づけいらず」がモットーの活動でガイナレ鳥取では選手・フロントスタッフが地域のプレーリーダー(ガキ大将)となって活動しています。また年代や性別の垣根のない公園遊びでは、年上の子が年下の子でも楽しめるような雰囲気を作ったり、積極的に話しかける姿を多く見ることができ、楽しさの中で「他人との関わり方」「相手の気持ちを考えること」など遊びの中で子どもたちが気づける場所にもなっています。

活動のはじまり

はじまりは2003年。外で遊べば近所から苦情が出たり、公園ではボール遊びが禁止になるなど、子どもたちが体を使って遊ぶ環境が減少していました。子どもたちが役所に公共の場の利用に関して懇願状を提出したのは記憶に新しいと思います。「コンピューターゲーム機」が急速な勢いで広がり、1人で遊ぶ時代に子どもたちの遊び方や遊ぶ環境は大きく変わっています。人口最少県の鳥取も例外ではなく当時NPO法人やまつみスポーツクラブの専務理事だった塚野真樹(現SC鳥取代表取締役社長)が子どもたちの環境変化に直面し『このままではいけない』という想いから始まりました。『スポーツや遊びの本質は「遊びであり楽しさ」。故に人はそれを決して手放さない。価値や意義を超え、本質の享受と本質の伝承を実現する』これは、現在のクラブの礎となっている考えです。それらを脈々と受け継ぎガイナレ鳥取は『スポーツを通じたまちづくり、人づくり』をクラブの理念に掲げています。『外遊びが

少なくなり、遊びを通して人間関係を築くのが苦手になりつつある子どもたちに遊び方やその楽しさを伝えたい』という想いをプログラム化し、年間100回を目標に活動を展開し、延べ60,000人以上が参加しています。

まちに公園遊びが復活した瞬間

スタート時は、参加者は多くはありませんでしたが、回を重ねるごとに参加する子どもたちが自然と増えていきました。やまつみスポーツクラブの副理事長の大原さんは「当時は、本気で大人が子どもたちを负かशीにいていた！「鬼ごっこ」や「めんこ」で子どもたちを泣かせたことが何回もあった。でも、子どもは悔しくてまた挑んでくる。大人も子どもも本気だったよ。その本気の熱量が大切なんだよ」と熱く話してくれました。その時間の楽しさが子どもたちの間で広がりイベントの日でもないのに、会場となった地域の公民館には自然に集まって遊ぶ子どもたちが増えるようになり「今日はやまつみの人は来んらしいで」と公民館の職員が声をかけると、子どもたちから「そんなことは知ってるよ。自分たちでやりたいけん、集まっとうだがん」とあっけらかんとした返事が返って来たそうです。それはまさに大人たちが望んでいた、子どもたちだけで遊ぶ姿が「復活！」した瞬間でした。

『復活！公園遊び』のこれから

今ではお陰様で募集を開始すると1週間で全日程が埋まってしまい、小学校の各学年の学年部、地域子ども会などからの公園遊びの開催依頼はお断りする場合もあるなど大盛況となっています。会場では「本当に楽しい」「またきて欲しい」と子どもたちからは喜びの声と笑顔があります。保護者や学校の先生からは「あんなに楽しそうな顔を見たのは初めてです」「いつもと違う子どもたちの様子を見ることができました」などの嬉しい言葉が聞こえてきます。同時にこうした活動を通じガイナレ鳥取を応援して下さる方が増えていきました。「たかが遊び、されど遊び」。体を使った遊びの持つ力を再認識し、地域の協働者を増やしつつ県内の子どもたちとより多く関わられるような仕組みづくりと、遊びの持つ大きな魅力・可能性・現場の熱量を全国の子どもたちへ発信を続けていきたいと考えています。これから『復活！公園遊び』検定を作ってクラブ公認プレイヤー(ガキ大将)を増やす、スタジアムに『復活！公園遊び』コーナーを常設するなど、街のいたるところで大人も子どもも垣根なく遊んでいるような日常が当たり前な鳥取の未来を思い描いています。



地域のガキ大将づくり『復活！公園遊び』 2/2

活動詳細情報はこちら



・年代別クラブホームタウン活動マップURL

・クラブ公式HP <https://ux.nu/xYThU>

・復活！公園遊びルールブック <https://ux.nu/sSZmv>

<2020> <https://ux.nu/kun5d>

<2019> <https://ux.nu/tlZRs>

<2018> <https://ux.nu/stt1T>

<2017> <https://ux.nu/2XIYv>

<2016> <https://ux.nu/f4Ts0>

<2015> <https://ux.nu/mNvvi>

<2014> <https://ux.nu/OI4PS>

<2013> <https://ux.nu/rxBvF>

活動場所

米子市小学校放課後児童クラブ、境港市小学校放課後児童クラブ、鳥取市小学校放課後児童クラブ、鳥取市内保育園、幼稚園、認定こども園、鳥取県内小学校おやこ会、米子市内こども会

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

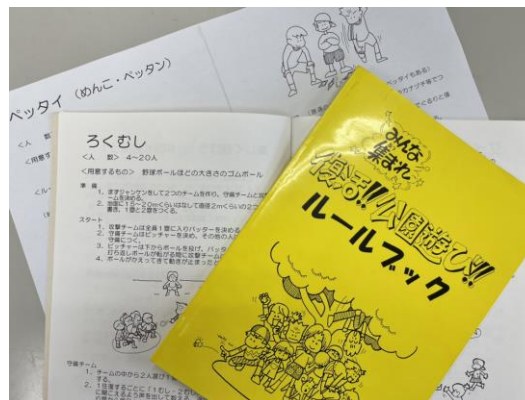
企業、学校、行政

協働者名

NPO法人やまつみスポーツクラブ、ミライズ永伸商事株式会社、鳥取県スポーツ課、鳥取市スポーツ課、米子市こども家庭課、境港市教育委員会、社団法人鳥取福祉会、米子市、境港市、鳥取市各小学校

補足(協働者・参加者の声)

いつも大人しい子がめちゃくちゃ生き生きしていました(保育園の先生) / 本当に2人なんですね!! (小学校学年部保護者) / 子どもたちの新たな一面が見れました(保育園の先生) / 我が子があんなに楽しそうな姿を見たのは久しぶりです(小学校学年部保護者) / 子どもたちは毎年この日を楽しみにしています(小学校放課後児童クラブ指導員) <復活！公園遊びあるある> 子どもたちが選手のフルネームを知らない(ニックネームで呼び合うため) / ・100対1(参加者100対スタッフ1)で公園遊びをしたスタッフがいる / 街中で子どもたちに声をかけられ、保護者に疑いの眼差しを向けられる / 復活！公園遊びに参加した子どもたちがスタジアムに来場して遊んでくれたお兄ちゃん(選手)を応援する





《障がい者アート》48時間デザインマラソン 1/2

Story 「Ki-Bi Lab.48 時間デザイン FunRun」とは、障がいのある方の文化芸術活動の振興と、立、社会参加の促進を図ることを目的に全国各地で開催されている「48時間デザインマラソン」という事業の岡山版。「48時間デザインマラソン」とは、障がいのあるクリエイター、県内外のデザイナー、福祉事業所スタッフの方々などがチームとなり、合計48時間という限られた時間の中でデザインを作り上げるという取り組みです。この岡山では岡山県備前県民局の主催により行われました。障がいのある人とデザイナーとのマッチングにより、障がいのある人のイラストや絵などの創作物が社会に発信されるきっかけをつくるという目的のもとに集った皆さんが、ファジアーノ岡山を題材にチームでデザインを起こし、そのデザインがあしらわれたナップサックとハンドタオルをファジアーノ岡山のホームゲームでクラブ公式グッズとして販売する、ということで協働した取り組みとなりました。後でお聞きしたところによると、多くの参加者の方から、「楽しかった」、「またやりたい」と

のお声をいただけたようで、その活動の一端に参加することができたクラブとしても、大きな意義を感じる事業となりました。また主催者の岡山県備前県民局からも「障害者アートを活用したデザインの価値は、まだまだ認知度が低いのが現状です。そのデザインが、地元によく愛されるクラブの公式グッズに採用・販売されることで、多くの方に興味を持っていただけるきっかけになればと思い、地元NPO団体とも連携してこの取組を行っています。たくさんのサポーターの手元に素敵なデザインが届き、この取組が広まっていくことを願っています。」とコメントも頂きました。ファジアーノ岡山をつかおう」地域の活動でファジアーノ岡山が必要とされ、クラブを活用してもらうことでその活動に取り組むエネルギーや発信力が増大する。そのようなことに少しでも寄与できるようになれば、このクラブが真に地域に必要とされるクラブとなれるものと信じています。引き続き社会連携事業の取組みにクラブとして一つ一つ臨んでまいります。

《障がい者アート》48時間デザインマラソン 2/2

活動場所

岡山市栄町商店街

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ

8



協働者

NPO、行政

協働者名

主催：岡山県備前県民局、
協力：NPOハートアートリンク、
FabLab Setouchi B”





“Save Hiroshima” キャンペーン 1/2

Story

2020年3月、広島県が一丸となって新型コロナ感染防止対策に取り組む中、Jリーグクラブだからこそできる形で、ホームタウンである広島を守り、支えていくための方策の検討を開始した。まず、広島のサッカーの歴史に着目した。75年は草木も生えぬと言われた被爆からわずか2年後に、広島高等師範学校附属中学が優勝するなど広島の学校が次々と全国制覇し、復興を目指す県民・市民に勇気を与えた。サッカーには希望を引き出す力がある点を広くアピールすることにより、共感者、協働者を募るとともに、県民に一丸となって苦境を乗り越えようというメッセージとして発信した。

次に、キャッチコピーは合言葉として使えるよう、「ひろしまの力を合わせて Save Hiroshima」に決定した。ロゴは、広島県の地図を小さなドットで表現し、一人一人の力を結集して、この難局を乗り越える思いを表現。「力」はクラブの由来でもある3本の矢を用いてデザイン。親しみやすいロゴマークで好評を博した。これらは、地元紙・中国新聞の全面に社長直筆の手紙として掲載。「広告賞年間グランプリ」をいただくなど、大きなインパクトを与えることとなった。

キャンペーンの取組については、広島県、広島市等の行政側とも協議を繰り返し、できることから始めることとした。その主な取組は次のとおり

- ① 活動に当たり、キャッチコピーを入れたTシャツを製作・販売し、キャンペーンの参加を呼び掛けた。多くの企業や県民が協力。Tシャツの売上の一部(100万円)をコロナ対策費として、県に寄付。
- ② 「Stay・Home～がんばろう広島～地域応援プロジェクト」として、テイクアウトを行っている飲食店の情報やマップ、商店街のチラシ等を、HP等のSNSで幅広く紹介し、地域の活力アップを目指した。
- ③ 医療従事者に敬意とエールをお送りするため、Jリーグアドバイザーの大毛教授が勤務されている広島大学病院を城福監督ほか5選手が訪問した。「ありがとうございます。Sanfrecce」の横断幕を掲げて激励。病院長より病院職員の励みとなり、頑張ろうというメッセージとなった。」と感謝していただいた。また、数名の選手が、医療機関へマスクを贈呈した。

さらにホームゲームでは、試合終了後、毎試合、選手全員で、医療関係者の皆さんへ感謝を伝える横断幕を掲げ、ピッチを1周している。

- ④ コロナ対策に係る県民・市民への行政情報等をクラブのSNSで拡散。行政に比べ、はるかにアクセス数が多い当クラブのSNSを活用することにより、情報の攪拌という観点で貢献できたと考えている。逆に、クラブHPで公開している選手のメッセージ、ストレッチ等の動画を行政にも提供・リンクし、ステイホームに役立てる取組を行った。
- ⑤ 各種スポーツイベントが中止となり、スポーツをする機会を失っていた子どもたちに対し、親子で楽しく体を動かしながら、プロスポーツ選手と触れ合える機会を設けるため、行政と共同で親子サッカー教室を開催。参加者からは親子での思い出作りができたことと好評を博した。
- ⑥ 県北の地域の活性化のため、国営備北丘陵公園と共催で、シルバーウィークの4日間、サンフレッチェ広島応援イベントを開催した。子供たちのダンス等の発表会が軒並み中止され、屋外のステージで発表の機会を提供。天候にも恵まれ、多くの方に楽しんでいただいた。

以上、キャンペーンの主なものを羅列したが、選手とのふれあい等人と人の接触が制限される中で何ができるかが、大きな課題であった。クラブとしては、2018年に発生した西日本豪雨災害の時も、「がんばろう！広島」キャンペーンとして同様にTシャツを作成し、被災地の子供たちを中心にサッカー教室や募金活動など被災地支援事業を展開した。

今回は、その時の取組をステップに、苦境を乗り越えるためのメッセージとして、広島サッカーの復興の歴史を紹介するとともに、具体的な施策としては、感染防止対策を万全にした屋外でのイベント、アクセス数の多いSNSの活用、「ひろしまの力を合わせて Save Hiroshima」というクラブ統一のメッセージをポスターなどすべての刊行物に挿入するなどの取組を展開した。

今回の取組は一定程度の評価いただいたと認識しているが、今後は、取組の中で、商店街等地域や行政との連携などで習得したノウハウを活かした、さらなるシャレン活動の充実に取り組みんでいきたいと考えている。



“Save Hiroshima” キャンペーン 2/2

活動詳細情報は



<https://www.sanfrecce.co.jp/news/hometown/2966>

<https://www.sanfrecce.co.jp/news/event/3019>

<https://www.sanfrecce.co.jp/news/hometown/3367>

<https://www.sanfrecce.co.jp/aso/community-support/>

<https://www.sanfrecce.co.jp/news/hometown/2732>

活動場所

県内全域

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ

コロナ対策

協働者

企業、行政、飲食店、商店街、
医療関係者等

協働者名

広島県、広島市、東広島市、国営備北丘陵公園、
広島大学病院等





『人生の先輩からのエール』企画 1/2

Story

レノファ山口FCは、ホームタウンである山口県が直面する、人口急減・超高齢社会といった大きな課題に対し、問題意識をもち、シャレン活動に取り組んできました。2020年12月、サントリーウェルネス株式会社から、「認知症の“予防”や、高齢者や認知症の方との“共生”」を目的に、地域に根差したJリーグと協同でプロジェクトを実施したいとの話があった。住み慣れた場所で生活を続けていくため、地域と地域を繋ぐ交流人口を創出・拡大する取組はクラブ理念とも繋がり、新たな関係性や価値を生み出す流れになると共感し、プロジェクトに参加することとなった。実施するプロジェクト内容について、レノファ山口FCサポーター団体「ヤマグチスタ」、レノファ山口FC公認ボランティア「TeamBONDS」へ共有したところ、趣旨に共感いただき、プロジェクトを主導したいと返答いただく。高齢者や認知症の方など、普段は周囲に「支えられる」機会の多い方が、サッカークラブの“サポーター”となることで、クラブや地域を「支える」存在になっていければと、「人生の先輩からのエール」というプロジェクトを実施することとなった。具体的には、先輩の定義を、当時の監督よりも年上の方とし、山口県内19市町に在住の方々から、「人生において、どうやって苦境に向き合い、乗り越えていったらよいか？」という問いに対して

のメッセージを横断幕に記入いただく。そして、記入いただいた特別な横断幕を2020シーズンの最終戦に掲げさせていただくセレモニーを実施。プロジェクト実施にあたって、クラブとのつながりのある、自治体やパートナー企業、各市町の高齢者施設へ呼びかけ、メッセージを集めた。ご協力いただいた高齢者施設の職員の方から、普段は口数の多くない入居者さんがメッセージを書きながら、昔の話を楽しそうにする姿がとても印象的だったとの話をいただいた。メッセージを書くという作業がきっかけで、昔を振り返り、いきいきした気持ちをとりもどしたり、周囲の方との会話のきっかけになったりする場面が多数見られた。また、メッセージを記入してもらった横断幕が選手ロッカーに掲載されてある様子や、メッセージを読んだ選手がピッチでプレイをする様子、選手がセレモニーで横断幕を掲げている様子をたくさんの観客の方に見ていただいている様子をご覧になって、誇らしい表情をされていた。今回の「人生の先輩からのエール」企画をスタートとして、高齢者や認知症の方など、普段は周囲に「支えられる」機会の多い方が、サッカークラブの“サポーター”となることで、クラブや地域を「支える」存在となっていけるよう、プロジェクトを継続していく。

活動詳細情報はこちら



<http://www.renofa.com/archives/67440/>

『人生の先輩からのエール』企画 2/2

活動場所

維新みらいふスタジアム

カテゴリ（SDGs）／取り組みテーマ

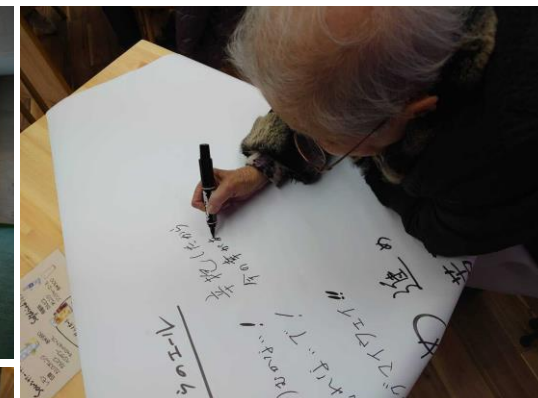


協働者

企業、住民

協働者名

サントリーウェルネス株式会社、
レノファ山口FCサポーター団体「ヤマグチスタ」、
レノファ山口FC公認ボランティア「TeamBONDS」





地元企業コラボマスクでマスクの供給と寄付活動 1/2

Story

2020年4月、新型コロナウイルスの感染が拡大し緊急事態宣言が発令されるなどその猛威は日本全国に急速に拡大しました。感染対策として様々なアイテムがありますが、とりわけ「マスク」は一時、品薄状態が続くなど各地で大混乱を招いていました。そうしたマスクが不足している状況だからこそ、いつも地域に支えられているカマタマーレ讃岐が香川県内を結ぶ懸け橋となることで地域課題解決の一助になり恩返しができないか、地元企業が作る品質の高いものを地元香川に住まわれている方々へお届けすることが出来ないかと考えました。そんな中、地元香川県にある手袋メーカーの株式会社スワニーがマスクを製造されていることを知り、すぐさま企画をまとめて提案を持ち込みました。快く趣旨にご賛同いただき、協働で抗菌・抗ウイルスのオリジナルマスクを製作することになりました。マスクが生活に欠かせないアイテムとなったため、デザイン面は外出先でも気兼ねなく着用できる普段使いのしやすさと、さりげなくアピールもできることを重要視しました。その結果、クラブのコーポレートスローガンであり、今回の趣旨にも合う「ALL FOR SANUKI」のロゴをワンポイントで入れたオリジナルマスクが完成しました。完成したマスクは香川県内でマスクを必要とされている皆様にお届けできるようスーパーマルナカを中心に販売しました。初回生産の500枚はマルナカの店頭、カマタマーレ讃岐オンラインストアともに即完売となり追加生産となりました。

品質も高くSNSでは購入いただいた方から高い評価をいただきました。また、地元企業とのコラボという点でもサポーターからはとても好意的な意見が寄せられました。後日、このマスクの売り上げの一部は日本赤十字社香川県支部に寄付させていただきました。寄付に至った経緯は昼夜問わず県民の為に新型コロナウイルス対応の最前線で尽くして下さっている医療従事者の皆様へ少しでも恩返しが出来ればと考えたためです。ホームタウンである香川県内の企業で作られたものを地元のスーパーマーケットを通じて地元の皆様へとお届けする一連のサイクルにより、関わる全ての人が笑顔になれる取り組みが実現し、今回の地域との連携を通じて改めて人々の温かさを感じました。今後、地域密着型クラブとして何が出来るかを考えるとき、今回の取り組みを糧にして、クラブ単独では乗り越えられないことも、地元企業・自治体と連携して輪を広げることで乗り越えて、地域により深く・より広く寄り添った取り組みに繋げてまいりたいと思います。

■協働者様からのコメント

弊社の手袋縫製で養った技術を、地元プロチームのカマタマーレ讃岐のオリジナルマスクの生産に活かして幸栄です。また、マスクを通して地元プロスポーツチームの盛り上がりにも貢献できた誇りと、社内的にも「カマタマスク」を自社生産出来るという盛り上がりで社内活性化にも繋がりました。社員一同、カマタマスクを着用して応援しております。

活動詳細情報は



<https://www.kamatamare.jp/news/?id=1184&item=%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0%E3%82%BF%E3%82%A6%E3%83%B3>

地元企業コラボマスクでマスクの供給と寄付活動 2/2

活動場所

マルナカ栗林南店・マルナカパワーシティ丸亀店

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ

3

すべての人に
健康と福祉を



協働者

企業、日本赤十字社香川県支部

協働者名

株式会社スワニー、株式会社マルナカ、
日本赤十字社香川県支部



障がい者支援(精神障がい・発達支援)サッカー教室 1/2

Story

私達は、障がい支援として、精神障がい者フットサル交流会を2012年から、徳島ヴォルティス株式会社、日本精神科病院協会徳島県支部、徳島県精神保健福祉協会が一緒になって活動を始めました。

対象は、地域で生活する精神障がい者と医療関係者スタッフが、徳島スポーツヴィレッジ(TSV)で月に1回開催(土曜日、18:00~19:30)している。参加人数は、障がい者、医療関係スタッフ等合わせて、20~30名が参加している。技術指導は、徳島ヴォルティスホームタウン推進部普及コーチ(3~5名)がおこなっている。サッカー経験者も未経験者も、男性も女性も混在して楽しく活動をしている。毎回参加される方、たまに参加される方、久しぶりに参加される方など参加頻度は体調に合わせて様々である。

活動への想いとしては、①皆さんがサッカー(フットサル)を通じて、達成感を肌で感じてもらいたい。②仲間作りができる場になってもらいたい。③笑顔が増え、自信が持てるようになってもらいたい。④参加者が楽しいと思える環境を作りたい。⑤障がいは意識しながらもプレイヤーとして普通に接する。⑥障がいや病気の事は、理解するが調子が悪い時の対応は専門家(一緒に参加している医療スタッフ)にまかせる。活動の広がりとして、普段、活動している場所(徳島県東部)は、少し遠い方々に対して参加しづらい地域(徳島県西部、南部)の方へ向けた交流会も開催している。また、徳島県にある四国大学の学生(看護学部や女子サッカー部)とサッカーを通じて交流を実施した。直接、接する事で精神障がい者に対する正しい理解の促進に繋がる。

異年齢との交流として、われわれ徳島ヴォルティスホームタウン推進部普及コーチは、発達障がい児とも2013年から2か月に1回のペースでサッカー教室をおこなっている。利用者は、6歳~18歳の重度、軽度の方々だ。その児童や学生は、毎回楽しく体を動かしてワーキングメモリー(記憶する容量)を増やす練習をしている。しかし、高校を卒業したらサッカーをする場所がなかったのが、今では精神障がい者フットサル交流会に参加してプレーができるようになってきている。発達障がい児から精神障がい者まで全てが繋がり、活動をしているという事で参加者から医療スタッフ、コーチ陣もとてもうれしく思っている。

発展とし発達障がい児のチームと健常者のチームで大会を開き、周りの方への周知や健常者も障がい者も楽しんで活動をするという、Jリーグの理念に

も沿って活動している。

また、徳島ヴォルティスのトップチームの前座として、発達障がい児、精神障がい者の方々と交流会として合同イベントもおこなった。このような機会を作り、現在までおこなう事で、参加者はサッカーやフットサルを皆でおこない、喜怒哀楽があるこの場所は、安心安全だと感じてもらっている。

医師からも言われた言葉で、【参加者の方々が生き生きとしている、医師の私が言うのも違うかもしれないが、薬よりスポーツをする事がとても有効だと思う】とおっしゃられていた。私もそれは本当に強く感じている所だ。そして、徳島県のチームを作り、楽しくボールを蹴る気持ちから、相手と勝負して勝ちたいという欲も出てくる参加者も増え、今では四国大会に参加したり、四国代表チームを作り、全国大会に出場できるまでに力がついた。私も全国大会で監督という立場で指揮をとらせて頂き、とても幸せな体験、経験をさせて頂いている。

効果や変化に関しては、活動を通じて参加する前と後ではより大きく差が出た。その項目としては、①生きがいがある。②不安があっても自分のしたい生き方ができる。③自分の将来に希望を持っている。④成功したいという強い願望がある。⑤元気でいたり、元気になったりするための自分なりの計画がある。⑥頼りにできる人がいる。⑦さまざまな友達を持つ事は大切な事と感じている。⑧症状が自分の生活の妨げになることはだんだん少なくなっている。このような変化があった。また、参加者の日中活動の場も自宅やデイケアから仕事や就労支援へシフトしている。

まとめとしてフットサル活動は、パーソナルリカバリーに効果的である。そしてうれしいニュースとして活動を通して、出会いがありお付き合いが始まり、結婚された方もいる。またフットサル日本代表候補に入る参加者も徳島から出てきた。参加者、医療スタッフにとってもこの場所は、家や職場、学校とも違う居心地の良いサードプレイスになっている。そして、この度、一緒に活動をさせて頂いている、むつみホスピタル様、南海病院様が徳島ヴォルティスのスポンサー様にもなってもらいました。

未来展望として、今後も参加者、私たちにあってサッカーやフットサルを通じて挨拶、仲間作り、協力する事の大切さ、ルールを守りながら積極的に社会復帰や元気に学校に行ってもらう事を目指していきたいです。勇気と自信、元気と笑顔をこれからも私たちが発信していけるように精進していきます。



障がい者支援(精神障がい・発達支援)サッカー教室 2/2

活動場所

徳島スポーツヴィレッジ

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

企業、行政、病院

協働者名

徳島県精神保健福祉協会、徳島県精神病院協会、桜木病院、南海病院、いつもここから、オレンジノート、むつみホスピタル





つながり愛

Story

愛媛FCでは、新型コロナウイルスの影響により、「ホームゲーム開催」を待ち望むファンサポーターの皆さまが少しでも元気になる情報発信、また普段より「愛媛FCの活動を支援」していただいております、スポンサー様、また愛媛県庁をはじめとした20市町の各自治体の皆さまへ、なにか力になれることはないか、と考えコロナ影響による中断期間中、少しでも多くの情報発信をしていきたいと考えております。～愛媛FCHPより～ コロナ禍でJリーグクラブ・愛媛FCとして、ホームタウンに出来ることがないかとクラブスタッフ・選手全員で考えて実施した活動です。スポンサー企業や地域の飲食店、地域のPR、選手が主導で行った県民の方々への寄付活動などをとおして地域へ恩返しを出来ないかに行った活動です。

活動詳細情報は



<https://ehimefc.com/special/tsunagariai.html>

活動場所

愛媛県

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

企業、住民、行政

協働者名

愛媛県や愛媛県20市町の自治体、スポンサー企業など





市内小学生への環境教育冊子の寄贈

Story

FC今治(株式会社今治・夢スポーツ)は、ソーシャルインパクトパートナーのデロイト トーマツ グループと環境教育冊子を共同作成し、2020年12月18日に今治市教育委員会へ約1400冊を贈呈いたしました。この環境教育冊子は、今治市教育委員会を通して、今治市内の公立小学校に在学する現小学5年生全員に配布されます。今回贈呈した環境教育冊子は、FC今治の「次世代のため、物の豊かさより心の豊かさを、大切に社会創りに貢献する」という企業理念のもと行っている環境教育事業と、デロイト トーマツ グループの「WorldClass」とで、互いにシナジーを生めないか、と考えて実施したものです。この冊子は、弊社が今治市より指定管理委託を受けている「しまなみアースランド(今治西部丘陵公園)」にて今治市内の小学5年生向けに実施している環境教育プログラムをもとに製作したものです。一度の経験だけでなく、繰り返して環境を考える機会となるような継続性のある教育となることを目的として制作しました。環境教育プログラムのメッセージを、地球自身が語るという構成の絵本となっています。地球のこれまでのこと、これからのこと、そしてこの地球に暮らす生き物たちのこと…。優しいイラスト共に、大切なメッセージが語られています。大人が読んでもハッとすることがある内容になっています。また、2021年にはこの環境冊子をもとにした、読み聞かせ会を実施予定です。

活動詳細情報は



<https://www.fcimabari.com/news/2020/003773.html>

<https://www.fcimabari.com/special/2020 deloitte/post 1.html>

<https://www.fcimabari.com/special/2020 deloitte/post 2.html>

活動場所

今治市教育委員会

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

企業、学校、行政

協働者名

デロイトトーマツグループ、今治市教育委員会、今治市内小学校





健康づくり地域交流フェスタ 1/2

Story 地域における人口の高齢化、少子化等対策の事業の一環として、政令市を除く福岡県内市町村の世代間交流と健康増進を図ることを目的に「健康づくり地域交流フェスタ」を公益財団法人福岡県市町村振興協会からの委託事業として2013年から開催しています。三世代や近隣との関係も希薄になった現代において、本イベントを通して交流の一助になればとの思いでお手伝いさせていただいています。3世代の参加者約80名が安全かつ心から楽しめるメニュー作りを現場担当のスクールコーチが試行錯誤しながら作っています。年間約15会場で実施しますが毎回1メニューは新しいメニューを必ず取り入れるようにしています。会場を後にされる時には、皆さん笑顔で「ありがとう」と言っていただく瞬間が最大の喜びです。アンケートでは約90%が楽しかったという結果で、下記のようなお声もいただいています。

(69歳)イベントの内容が濃く、楽しくて時間が経つ感じがしなかった。「まだこんな時間？」と思うくらい本当に楽しい時間を子どもたちの元気の良さやコーチのやさしさの中過ごすことができました。(6歳)さいごはまけたけどよくがんばったとおもいます。かてなかったことはくやしいけどつぎこんなイベントがあったら参加したいです。この活動は公益財団法人福岡県市町村振興協会からの委託事業ですが、この事業を受託するまで何度も担当者の方と打ち合わせをして内容を修正しながらようやく受託することが出来ました。数年活動を通して各自治体との信頼関係が築かれていき、この活動以外で自治体主催のイベントを受託することもできるようになりました。今後は多くの自治体や住民の方とより信頼を深め、複数の自治体からイベント受託やホームゲームの集客協力など関係構築し地域住民の方々にも喜んでいただける施策を増やしていき、地域の課題解決へ少しでも貢献できればと思います。



健康づくり地域交流フェスタ 2/2

活動場所

福岡県内15市町村

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

企業、住民、行政

協働者名

公益財団法人福岡県市町村振興協会





曽根干潟クリーン作戦 ～循環型社会の実現に向けて～ 1/2

Story

曽根干潟は、希少生物や野鳥の宝庫として北九州市内では知られています。特に世界的にも数が少なくなっている「ズグロカモメ」の日本有数の越冬地となっていて、休日ともなると熱心なバードウォッチング愛好者でにぎわいます。ズグロカモメがモデルとなっているクラブマスコットのギランもこの地が大好きです。北九州市立曽根東小学校では、平成9年から学校行事として「曽根干潟クリーン作戦」を行っています。活動のきっかけは、5年生児童が曽根干潟で釣糸が首に巻き付き苦しむ野鳥を助けたことにはじまります。曽根干潟には、多くの流木やペットボトル、ビニール袋等も流れつき、野鳥が食事と間違えて食べてしまい命を絶ってしまうことも少なくありません。ギラヴァンツ北九州もギランと関わりが強いこの曽根干潟のクリーン作戦に賛同し、ともに活動を行ってまいりました。2020年度、コロナ禍の中、曽根東小学校もクラブも「この活動を何としても止めたくない！」という気持ちが強く、どのような方法をとれば、実現できるかを模索していました。このような状況の中、バードライフ東京からJリーグ鳥の会へ、循環型社会の実現に向けた地域参加型リサイクルプログラムを実施できる事業を探しているというご相談を受けました。その内容は、ダウ・ケミカル日本株式会社と、テラサイクルジャパン合同会社が、循環型社会の実現に向けて、地域と連動した清掃活動と環境教育、さらに回収した廃プラスチックをリサイクルするプログラムを2020年9月より1年間実施するというものでした。2019年8月、高円宮妃久子殿下が曽根東小学校をご視察された経緯や、Jリーグ鳥の会の会鳥をギランが担っているということからも、この事業のキックオフの活動を北九州の地で行うことになりました。当初の計画では、2020年9月17日(木)に、全校の児童に向けて、地球温暖化や海洋プラスチック問題などを分かりやすく解説する環境授業を行い、午後から全学年の生徒とPTA、ギラヴァンツ北九州スタッフ、ギランで曽根干潟の清掃(廃プラゴミ分別)を実施し、廃プラごみをテラサイクルが回収、その他のゴミを北九州市の収集車が回収するというものでした。しかし実現に向けては、様々な諸問題も出てきました。第一にコロナ禍の中で、いかに密を避けて、感染予防対策を講じて実施するか。この件に関しては、例年お声掛けして

いた地域企業の参加を控え、小規模での実施、また環境の授業は体育館や講堂を使用せず、放送室よりライブ配信という方法をとりました。第二に天候による実施の判断でした。9月17日(木)開催本番の日は、午前中に雨が降り、午後からは晴れたのですが、児童の安全を考え、環境授業はそのまま17日に実施し、全校生徒と実施するクリーン作戦は9月18日(金)になりました。遠方からきている関係企業の方々は18日までは北九州に残れない為、17日に環境授業だけでなく、午後から晴であれば何とか大人だけでも実施しようと、曽根東PTAの方々の協力も得て、廃プラゴミの回収が実現できました。18日(金)は天候にも恵まれ、環境授業で学んだことを生かし、児童もギランもゴミ回収だけでなく、廃プラゴミの分別を実施することができました。そして、今回のプログラムで回収された約150キロのプラスチックごみの一部は、テラサイクルでゴミ袋などにリサイクルされることになっております。最後に、曽根東小学校澤野校長先生のコメントを紹介します。『新型コロナウイルス感染防止を徹底した中で、秋の曽根干潟クリーン作戦を行いました。前日からの雨で大変心配しましたが、午後からは天気も回復して、実施することができました。曽根東っ子は、曽根干潟の自然を守ろうと、どの学年も時間いっぱい清掃活動がんばりました。6年生が回収したペットボトルは150kg、その他の学年のゴミは810kgにもなりました。回収したペットボトルは環境局の方や関東の企業の方などの協力でリサイクルされる予定です。本年度は、ギラヴァンツ北九州さんの提案で、プラスチックを循環させる新規活動「テラサイクル&バードライフが活動主体でダウ・ケミカルの支援」と連携させていただき、現在、世界的な問題となっているプラスチックによる海洋汚染の防止の取組やプラスチックごみの回収・再利用についても事前に学習することができました。この活動を機会に環境保全と資源の再生への関心が高まることを期待しています。』ギラヴァンツ北九州は、この活動を通して、学校と企業、行政、地域との連携強化を推進することにより、児童だけでなくクラブ職員やその他の参加者も資源のリサイクルについて理解と関心が深まり、野鳥の生態系や海の豊かさを守ることができようになる、より良い事業に成長するという可能性を感じました。

活動詳細情報はこちら



<https://www.giravanz.jp/news/p34782.html#gsc.tab=0>



曽根干潟クリーン作戦 ～循環型社会の実現に向けて～ 2/2

活動場所

曽根干潟

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

企業、住民、学校、行政

協働者名

北九州市立曽根東小学校、曽根東PTA役員、北九州市、
ダウ・ケミカル日本株式会社、テラサイクルジャパン合同会社、
一般社団法人バードライフ・インターナショナル東京





歴代記念配布ユニフォームでマスクをつくろう 1/2

Story

2021Jリーグ！シャレンアウォーズでは、「歴代記念配布ユニフォームでマスクをつくろう」をエントリーさせていただきます。この取り組みは全国的にマスクが不足していた4月から5月にファン・サポーターに向けてマスク生地としてユニフォームを提供し、ご自宅でのマスク製作に役立てていただくというものです。生地として提供するユニフォームはこれまで来場者に対してスタジアム配布を行ってきた17種類のユニフォームを再利用しました。また、佐賀県の公益財団法人と協力し、余分に作ったマスクを子ども食堂や放課後児童クラブに寄付できる仕組みを作りました。マスクをつくることができ、寄付もできるというとてもシンプルな企画でしたが、ファン・サポーターの皆さん、地域の企業様、活動団体様、メディアなどを通して少しずつその輪が大きくなり、最終的に私たちが想像していた以上の反響をいただく取り組みとなりました。その過程や背景を皆さんと共有できればと思います。

【活動の背景・詳細】

サガン鳥栖ではこれまで17種類のユニフォームを来場者へ配布してきましたが、予備分のユニフォームを倉庫に保管していました。2020年4月頃、世の中ではマスク不足が叫ばれており、マスクを買うために行列ができ、買い占めが起きたりしていました。そのような状況にこのユニフォームの在庫をマスク生地として提供すれば役に立てるのではないかという閃きからこの取り組みが始まりました。もう1つ課題として考えていたことはコロナ禍のネガティブな雰囲気や少しだけポジティブに変える取り組みにできないだろうかという点でした。1枚のユニフォームを目一杯使えば、10枚以上のマスクをつくることができます。もし、その中の数枚を困っている誰かにプレゼントできれば、よろこぶ人が増えるのではないかと考えて、余分に作っていただいた方はサガン鳥栖へ返送いただければ、公益財団法人を通じて佐賀県の子ども食堂や放課後児童クラブへ寄付ができる仕組みを作りました。1ヶ月の間に3000名を超える応募があり、5,454枚の寄付が集まりました。うち300枚は地域の企業様(27企業)に製作いただき寄付していただきました。コロナ禍にファン・サポーターの皆さん、地域の企業様と一体となって取り組めたことは、クラブの歴史を振り返る上で大きな財産になることと思います。寄付されたマスクは5月中旬、久しぶりに友達と再会した子どもたちにサプライズプレゼントとしてお届けしました。

【試行錯誤を繰り返した部分】

生地はマスクとして効果があるのか、うまく裁縫できるのか、どのように郵送するのか、お金をいただいていいものなのか、など検討すべき事項が多かったです。裁縫が得意な社員が試作品を作り、通気性やマスクらしい形になるかを検証しました。今でこそ様々なデザインのマスクが販売されていますが、当時はユニフォーム柄のデザインを生活の中で使っただけか頭を悩ませました。工程については、幸いにも地域のハンドメイドショップに協力していただくことができ、型紙や製作手順の説明書を作成し、分かりやすい説明でファン・サポーターの皆さんに製作に取り掛かっていただけたと感じています。郵送するための袋詰め作業においても、蜜を避けるためスタジアム前の広場に机を並べ社員、アカデミースタッフ、スクールコーチで行いました。

【サガンティーノと全国のサッカーファミリーに感謝】

バリエーション豊富な17種類の配布ユニフォームがあったことは、どれが手元に届くのか楽しみに待っていただくことができ、完成したマスクにも様々な個性あふれるデザインが生まれて良かったと思います。「当時の試合を思い出しながら、STAYHOMEを楽しめました。」という声を多くいただきました。また全国放送のメディアに取り上げていただいたこともあり、県内だけではなく日本各地から申し込みをいただきました。中でも他クラブのサポーターや日頃あまりサッカーを観ない方から応募をいただいたことは、私たちも想定していない大変嬉しい出来事でありました。また清水エスパルス様とは情報交換を行いながら同様の取り組みを実施されており、SNS上で「#サガン鳥栖ユニマスク、#エスパルスマスク」のハッシュタグでファン・サポーターを交えた交流ができました。この交流は共通の社会課題を複数のクラブで解決できる可能性を感じさせるものであり、今後のシャレン活動において応用できるように思います。

【最後に】

2020年は誰もが不安や無力感を感じたことかと思えます。しかし、そうした状況の中でも人は人のことを想いやることができ、誰かの役に立ちたいと考えることができるということをこの企画を通して皆さまから教えていただきました。関わっていただいたすべての皆さまにこの場を借りてお礼申し上げます。

歴代記念配布ユニフォームでマスクをつくろう 2/2

活動詳細情報は



<https://www.sagan-tosu.net/news/p/4583/>

<https://www.sagan-tosu.net/news/p/4609/>

活動場所

ご自宅、オフィス、県内の子ども食堂、放課後児童クラブ

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

企業、NPO、住民、学校

協働者名

公益財団法人佐賀未来創造基金、
NPO法人放課後児童クラブ、
ハンドメイドショップ SUSIE、布作家tonto様、
地域の企業様(27企業)





愛と平和と一生懸命～長崎市と連携協力した平和の灯～ 1/2

Story

V・ファーレン長崎は、クラブ創設以来、ホームタウンである長崎県でスポーツ・サッカーを通じて平和を発信してきました。V・ファーレン長崎は、クラブ創設以来、ホームタウンである長崎県でスポーツ・サッカーを通じて平和を発信してきました。2019シーズンからは「愛と平和と一生懸命」をクラブの平和活動のスローガンとして、8月9日の長崎市への原爆投下の日を中心に毎年、平和について様々な活動や発信を行ってきました。2020シーズンは、原爆投下から75年、クラブ創設15周年という節目ということもあり、さらに多くの方と共に平和について考える機会を作りたいという思いで行政や様々な団体と共に平和について考え、発信する活動を行いました。そんな中、長崎市の被爆継承課の皆さんから、行政だけでは発信力が弱いというお話や、若い世代への平和への関心が薄れてきているという悩みを伺い、V・ファーレン長崎として何かこの悩みを解決する方法がないかと考えていました。コロナ禍ということもあり、平和についてのイベント実施になかなか踏み切れずにいましたが、感染者数が減少し、万全な対策をとったうえでということで、長崎市と平和の灯実行委員会が主催する「平和の灯」へ長崎市の被爆継承課の皆さんや、原爆資料館の皆さんと連携協力をして一緒にイベントを成功させて多くの方に平和について発信していこう！ということになりました。この平和の灯は、平和祈念式典の前夜(8月8日)に、長崎市民が手作りのキャンドルに平和への願いをこめたメッセージを書き入れて、灯をともしことで、原爆で亡くなった多くの方を慰霊し、一人ひとりが原爆の惨禍を決して忘れることなく、若い世代に平和の尊さを継承していくために毎年開催している行事です。クラブとして多くの方にこの行事のことや、平和について知ってもらうべく、7月18日に平和の灯のイベントで使用するキャンドル作りのイベントを長崎市の長崎市民会館で開催しました。当日は長崎市と平和の灯実行委員会、原爆資料館の皆さんにキャンドル作りの指導はもちろん、平和の灯自体の意味合いについてお話をいただき、事前に募集していたファン・サポーター21名と共に平和

への思いを新たにしてキャンドル作りに挑みました。最終的にはファン・サポーターの皆さんの平和への想いを書き記したキャンドルと共に、選手たちにもメッセージを書いてもらうためのキャンドルも含めた約100個のキャンドルを制作しました。イベントには長崎原爆資料館の篠崎桂子館長、社長の高田春奈やヴィヴィくんも参加し、参加したファン・サポーターや取材に来てくれたメディアを通じて多くの長崎県民の皆さんへ平和について考える大切さをお伝えしました。このイベントで作成したキャンドルにはその後選手や監督、スタッフ自らクラブハウスで平和への思いやイラストを書き入れました。V・ファーレン長崎として作成した100個のキャンドルは、8月8日の平和の灯のイベントに先行して7月25日にホームゲームで選手入場の際の通路にキャンドルを設置し、会場に集まったファン・サポーターへお披露目するとともに、V・ファーレン長崎としての平和への思いなどについて考えるきっかけとなりました。そして8月8日平和祈念式典の前夜、開催された平和の灯にはこれまではイベントに参加する子供たちやその関係者が多かったのですが、V・ファーレン長崎のユニフォームを着用したファン・サポーターがイベントに参加してくれていました。今回、一緒に平和の灯へのV・ファーレン長崎の参加について動いてくれていた長崎市の方々には、「コロナ禍での実施という状況で、V・ファーレン長崎に参加してもらうことで新たな平和への思いの発信ができた。とてもありがたかった」という話や、原爆資料館の皆さんからも「V・ファーレン長崎が積極的に平和についての発信を行うことで、V・ファーレン長崎のホームゲームを見に来たアウェイサポーターが資料館を訪れてくれてきている。これまでにない発信になってとてもありがたい。」などの言葉をいただきました。2020年はコロナ禍で活動が制限される中、ファン・サポーターや行政、多くの平和活動を行う団体と連携協力していくことで、これまでできていなかった多くの平和活動を行うことができました。今後も「愛と平和と一生懸命」をスローガンに長崎から世界へ平和を伝える活動を行って行きます。

活動詳細情報はこちら



<https://www.v-varen.com/peace/>

<https://www.v-varen.com/home town/118152.html>

<https://www.v-varen.com/home town/119610.html>



愛と平和と一生懸命～長崎市と連携協力した平和の灯～ 2/2

活動場所

トランスコスモススタジアム長崎、平和公園、長崎市民会館、原爆資料館

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ

16

平和と公正を
すべての人に



協働者

NPO、住民、行政

協働者名

長崎市被爆継承課、長崎原爆資料館、世界平和祈念行事実行委員会、平和の灯実行委員会、ファン・サポーター





5月5日子どもの日 Webで一緒にご飯を食べよう

Story

この活動は、休校中の子ども達の孤食を防ぐ活動をされているPrecious place「かけがえのない場所」様の活動に共感し、協力をご相談させて頂くことで、実現に至りました。コロナ禍で学校やJリーグも通常通りの活動ができない中、学校の休校により、子どもたちが自宅に一人で居ることが余儀なくされ、子ども達の「孤食」という状況が発生しているという事実を初めて知りました。その事実をより多くの皆様にも知って頂きたい、子ども達に食事する楽しさを伝えたいという思いから、5月5日子どもの日のオンライン昼食会に選手が参加する運びとなりました。当日は祝日で保護者の方と一緒に参加されている子ども達も多くいましたが、みんな緊張しながらも積極的に酒井選手や内山選手へ、「うまくパスを出す方法はどうすればいいですか?」といった質問や「どうしてあんなにながくスタジアムを走っていられるんですか?」、「おうちでできるトレーニングはありますか?」といった質問をなげかけてくれて、とっても楽しそうでした。コロナ禍で日頃見えていたものが見えなくなっていたり、逆に見えていなかったものが見えてくるようになる世の中で、互いに支え合い、協力し合うことが、本当に大切なことだと改めて気づかされた瞬間でした。これからも、熊本県の地域の皆様と共に、子どもああ達に夢を届けていきたいと思えます。

活動詳細情報はこちら



https://roasso-k.com/home_town/detail/435

活動場所

ロアッソ熊本クラブハウス

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ

3

すべての人に
健康と福祉を



協働者

住民、任意団体

協働者名

Precious place「かけがえのない場所」



コロナに負けるな！～まちかどお弁当販売所～

Story

コロナ禍の影響で、大分市内の飲食店の利用者の減少が起きてしまいました。そのような状況下で、大分市内の飲食店が少しでも賑わうように、市内商店街のイベントスペースを活用して、各飲食店が弁当の販売を行う企画が実施されました。各飲食店が販売した弁当には大分県産野菜が使用され、農産物の消費も目指した企画となりました。コロナ禍で密にならないようにする配慮や、お客様との弁当の渡し方などの対策など、様々な面に配慮して販売が行われました。大分トリニータは、HPやSNSでの告知活動や、スタジアムで販売している弁当の販売を実施しました。コロナ禍で協力できる活動は制限されていましたが、試合が開催されていない状況という事もあり、多くのトリニータサポーターが駆けつけてくれ、弁当を購入して頂きました。弁当は連日完売し、ご協力いただいた方々にも大変喜んで頂きました。その後は、同じ場所で街中の賑わい創出や飲食店を盛り上げる為のパブリックビューイングを実施し市内の盛り上げを共に行いました。

活動詳細情報はこちら



<https://www.oita-trinita.co.jp/news/20201162487/>

活動場所

大分市 祝祭の広場

カテゴリー(SDGs)/取り組みテーマ

17



協働者

企業、NPO、行政

協働者名

大分市、まち文化再生プロジェクト、みんなの株式会社



鹿児島ユナイテッドFC フューチャーズ 1/2

Story

フューチャーズの総監督である西真一さんが縁あって県内の知的障がい者サッカーに携わるようになったのは10年ほど前のこと。2018年の「INASサッカー世界選手権2018」では知的障がい者サッカー日本代表監督を任せられ、2022年の世界選手権に向けての代表監督を継続しています。鹿児島は同代表コーチとして泉谷光紀さん、また日本代表選手も輩出していますが、もっと障がい者スポーツを普及させたいという願いが、鹿児島ユナイテッドFCの理念と合致。知的障がい者チーム「フューチャーズ」が2019年から発足しました。泉谷さんが監督を務め、他にも養護学校の教員や社会福祉法人の職員の方々が、指導にあたっています。今までは学校でのクラブ活動と、社会人になってからはなにかの大会に向けての選抜チームが組まれることだけが、選手たちにとってプレーする場でした。それが、フューチャーズ誕生によって毎週金曜日の夜にトレーニング、週末は公式戦やトレーニングマッチを行える環境になりました。西総監督や泉谷監督のもと、選手たちはピッチに立つとゴールを目指して果敢なドリブル突破をしかけて、相手ボールに対しても一生懸命に守り、奪い返そうと走り、「とにかく勝ちたい」気持ちを魅せてくれます。2019年は同じJリーグの横浜F・マリノスの知的障がい者チーム「フトゥーロ」とお互いのホームゲーム前に交流試合を行うなど県外を舞台にした活動ができましたが、2020年は新型コロナの影響で県外での大会や遠征を行うことはできない事態に。それでも選手たちはそれぞれ前向きにサッカーに向き合い、19年から参加している健常者のリーグ戦である鹿児島県社会人リーグを通じて強化を図り、2020年は悲願の初勝利を挙げることもできました。ひと口に知的障がい者と言っても、負けん気の強い選手、おとなしい選手など個性豊かで、相手に合わせたアプローチが求められるのは、ほかのチームと変わりません。選手としてはもちろん、サッカーを通して1人の自律した社会人としても成長して欲しいというコーチ陣の願いを受けて、選手たちは日々サッカーに向き合っています。イベントが行われる際には選手たちも運営に参加して、子どもたちといっしょにボールを蹴ったりして1人の社会人としても

成長しています。その成長も、成果です。数年で物事が大幅に進化するはずがないことは認めつつ、西総監督たちは選手たちの技術面の進化、意識の変化を感じています。「フューチャーズがあることで、サッカーを続ける子、挑戦する子が出てきた」と西さんは言います。サッカーを通して、彼らにはたくさんのお会いや発見があります。チームメイトやスタッフという、自分や家族以外の人間と関わることが出来ます。日本代表選手を中心に、先輩が後輩にプレーに加えて、社会人としてのふるまいを伝える姿もピッチ内外で見られるようになりました。やさしい表情ながら確固たる信念を感じさせる西さんは、フューチャーズを通して実現したい未来を「20年後、30年後かもしれないけど」と前置きして「彼らがここを巣立って普通に健常者と同じチームでプレーする時代になって欲しい」「フューチャーズは今よりもう少し重い障害を持った人たちを受け入れる場になっていて欲しい」と語ります。その実現にはサッカー界だけでなく、鹿児島全体が多様性を受容できる社会になっていなければならないことでしょう。簡単ではありませんが、その未来が実現している鹿児島は、まちがいなく素敵な社会です。鹿児島県社会人リーグは健常者の大会なので、選手登録をしたコーチたちがピッチに立ち、プレーしながら指導することでひとつの共存の形を示しています。2020年には聴覚障がいを持つ選手も加わりました。彼は当然知的障がい者の大会には出場できませんが、社会人リーグでのプレーや、毎週トレーニングできる環境を求めてフューチャーズに加わりました。異なる障がいを持つ選手同士が丁寧にコミュニケーションを図る姿が、ピッチ上で見ることが出来ます。2021年からは鹿児島ユナイテッドFCの初代キャプテン、プロサッカー選手を引退した今は応援リーダーとしてクラブ内外をつなぐ仕事をしている田上裕も選手登録をして、障がい者スポーツの発展に寄与しようとしています。元プロサッカー選手、コーチ、そして障がい者が違和感なくピッチの上で「普通に」サッカーで真剣に競っている光景の先には、鹿児島の進むべき未来が描かれています。

活動詳細情報はこちら

<http://www.kufc.co.jp/futures/>



鹿児島ユナイテッドFC フューチャーズ 2/2

活動場所

始良フットボールセンターほか各所

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

障がい者サッカー関係者

協働者名

西眞一さん(始良市役所職員)、
泉谷光紀さん(鹿児島県立武岡台養護学校教諭)、
鹿児島県知的障がい者サッカー連盟事務局





沖縄「REVIVE-再興」プロジェクト 1/2

Story 沖縄市を中心とする沖縄県全県をホームタウンとするFC琉球はクラブ創設時の2003年より地域密着型のクラブを目指して歩みを進め、「沖縄を愛し、沖縄に愛される」という理念のもと、ホームタウン活動に取り組んでおります。コロナ禍で多大な影響を受けている観光立県沖縄の子供たちにスポーツの楽しさや夢を持つ楽しさを感じてもらい、また日頃から支えてくださっている地域のみなさまへの恩返しのひとつとして、離島を含む沖縄県内の全小学校266校に「沖縄『REVIVE-再興』プロジェクト」と題して、FC琉球×sfidaオリジナルのサッカーボール4個ずつ計1064個を寄贈いたしました。いくつかの小学校ではありますが、小野伸二選手や富所悠選手、FC琉球公式マスコットのジンバーニョなどが直接小学校にお届けしました。ホームスタジアムであるタピック

県総ひやごんスタジアムの近隣にある沖縄市立比屋根小学校を訪問した小野伸二選手は、寄贈したボールでリフティングを披露し、サプライズでサッカーをしている児童とリフティング交換も行い、会場から大きな拍手が鳴り響きました。また直接ボールを受け取った代表の生徒たちは目を輝かせていました。また、プロジェクト実施報告ため沖縄県教育長を表敬訪問し、「厳しい学習環境にあるなか、ボールの寄付は子供たちにとって大きな励みとなるので本当に感謝している」とのお言葉もいただきました。今回のオリジナルサッカーボール寄贈を通じて、沖縄の未来を担う子供たちにスポーツやFC琉球を身近に感じてもらうきっかけとなり、コロナ禍で明るいニュースの少ない中でもボールを通じて沖縄の子供たちの日々がより楽しくなることを願っています。

活動詳細情報はこちら



<http://fcryukyu.com/news/25820/>

<http://fcryukyu.com/news/25373/>



沖縄「REVIVE-再興」プロジェクト 2/2

活動場所

沖縄県内全小学校

カテゴリー(SDGs)／取り組みテーマ



協働者

企業、学校、行政

協働者名

株式会社ターミナル、琉球通運株式会社、株式会社SARCLE、株式会社イミオ

補足

小野伸二選手は「沖縄に来て一番うれしいと思えた瞬間でした。」とコメントしてします。

